

[もくじ]

はじめに…2	6・招待の日…139
1・捕囚の日…3	7・供述の日…167
2・更改の日…31	8・力説の日…195
3・降下の日…57	9・立証の日…225
4・翻弄の日…85	10・切替の日…251
5・遭遇の日…113	『ミコロボ』シリーズ一覧…285

★無断転載・無断掲載・複製・複写・転用・アップロード・フリマ出店はお断りします。

★シリーズを通して残虐行為・性的描写（年齢制限をかける程ではないですが、匂わせがあります）があります。ご注意下さい。

★特にこの本の『7・供述の日』に強めの性的描写のシーンがありますので、気をつけて下さい。

★この作品は、フィクションです。

☆はじめに☆

こちらは、『白井未衣子とロボットの日常（ミコロボ）』の《反転》ルートの前巻になります。

《反転》ルートですので、武人兄ちゃんとは離れ離れになります。
武人兄ちゃんと仲良くなるルートは《共闘》ルートを読んでください。

《反転》ルートですが、巻末の一覧でも記載されているように、《共闘》の『1・正夢の日』『2・復讐の日』を読んでから、この本を開く事をオススメします。

出会いときっかけを知るのは、大事ですし。

後巻も控えているので、今回もあとがきを書くのは止めておきます。

ページ数が多いのでね…。

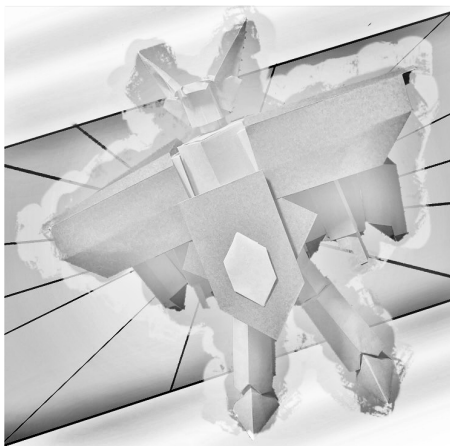
やっぱり、パソコンが欲しいですねえ…。

前置きはここまでにしておいて。

次のページから、《反転》ルートをどうぞ。

この本を手にとってくださり、ありがとうございました。

1 ・ 捕囚の日



『10年』という年月は、どこか特別な感覚がする。

英語では2種類の単語、熟語に分けられたりする。

世代の違いも、大抵は『10年』毎に区切りをつける。

俺も20歳から30歳になった。

地球人ではすっかり、大人の枠に収まっている年齢だ。

20歳でも大人な奴もいるが。

身体的には疲労感が伝わるようになる。これは感覚ではなく、実際に身体がだるくなりやすい体質へと変化している。

高齢になるとヨボヨボの老人に変貌するから、その前触れなんだろう。

俺はHRだから、地球人的な疲労感を感じにくい。

まあ、別の意味でしんどさを経験しているが。

キャリア的には、重要なポストに就いていく頃合だ。

〔ラストコア〕のスタッフに教わった『サラリーマン』は、30代から管理職とかいう責任者に抜擢されるみたいで。

責任者に抜擢されると、お金が沢山貰えるようになるらしい。

俺は既に特別隊員として、動き回っているが。

〔ラストコア〕の特別隊員として務めた10年間、激動の日々だった。

宇宙進出の件、対HR用に開発された地球産ロボ、そして人員確保。

宇宙進出は地球側に知識が乏しいから、実現までかかると予測していた。

地球産ロボは着実に開発が進んでいた。

アレックスの検査に俺は何度も協力した。

人員確保が、最大の悩みの種だった。

地球内各地の戦争や紛争の影響で、俺を導いた米軍元中將、ディム・カミング
管轄下の部隊は戦場に駆り出されるしかなかった。

となると、宗太郎も関わる日本の正規軍しか、補充できなかった。

自ずから仕掛けに行かない日本だから、正規軍は持て余していた。

正規軍を招いての訓練は、幾度も行われた。

アレックスの開発した試作機を操縦してもらう狙いがあった。

ところが…正規軍のモチベーションは上がらない。

それどころか、やる気さえ見出せていなかった。

訓練に携わった正規軍の兵士が、休憩中の雑談で仲間達に漏らした内容があった。

『今は人工知能の時代だろ？

無人機作って対処したらいいじゃん。何で今更？』

『アニメの見過ぎじゃねえの？合体ロボなんてパフォーマンスにしか見えねえよ。』

地球にもそれなりの先進技術の研究が発展しているのは、俺も知っている。アレックスも併用で無人機も開発している。

人工知能は、万能ではない。

人間の思い通りにいかない可能性も存在するからだ。

何度も機器を使用していると、予期せぬミスが起きる時が必ずある。

トラブルの対処をどうするのが肝心だ。

ビジネスが絡むなら、顧客からクレームが出て、火に油を注ぐ残念な結果になるかもしれない。

リスクの軽減の為に、人の手が必要だ。操縦自体を完全に任せても、最終的に人の判断が必須な状況になる。

だから、【軍用機】に、一般機の試作である【パスティユ】に3人乗せている。

3人寄れば知恵がめぐるだろうという諺があった。

それに倣って、十数機程量産してもらっていた。

やっと、協力してくれる人間が白井3兄妹だった。

襲撃事件の際に、ちょっと誘導した形で加わってもらった。

責任は取るで自負したのだが…。正直果たせるのか心配だった。

子供だから、下手したら彼らの身の危険があるから…は承知の上なのだが。

これは恐らく、自分の問題だろう。

【ホルプレス】との戦闘後、俺は末衣子と会った。

その時に、俺は口にしていたのだ。

「俺が敵に回ったらどうするんや？」と。

逃がさない、と言わんばかりに彼女の頬を触って。

すぐに正気に戻って、戦闘後の夜は別れたのだが。

俺にはもう、自信を失いつつあるのだろうか、と懸念していた。

遠くから、クーランの嘲笑う声が聞こえてくる。

遠くから、クーランのオス特有のゴツイ手が伸びてくる。

俺の意識が奴に捕われる前に。

〔ラストコア〕全体の強化を図らねばならない。

さあ、急ごう。

俺の存在が消えたとしても、残された彼らが生き延びる道を作らないと。

★★★

【ホルプレス】の襲撃から翌朝。武人はアレックスの研究室にいた。

何となく様子を見に来る時にふらっと立ち寄る事もあるが。

今回の武人は用事があって来た。

アレックスは冷蔵庫からお茶を取り出して、コップに注いだ。

自分と武人の2人分。残ったお茶は冷蔵庫に戻した。

アレックスはトレーの上のお茶を、来客用のテーブルまで運んだ。

「久しぶりに汗かいたわ。ここ最近、まともな運動してへんからな。」

「10日程前にもお前は動いていただろう。」

「それも含めてな。」

武人の最初の発言を、アレックスは用事前の軽い挨拶だと見抜いていた。

「一応、激動の10日間をお前は追っていたんだ。何か思う事はあるんだろう？」

アレックスが何うように武人を見ると、来客用のソファに腰掛けている武人は本題に移ろう、と思った。

「戦力の補強、は言わずもがなやな。訓練は…ほんまやったら【ラストコア】に滞在して欲しいんやけど。」

「3ヵ月の短期間だし、2人は義務教育を受けている身だ。多少の通学は必要だ。」「大人がよかったんか？」

「あの状況下なら仕方ないだろうし、お前の決定でもあるからな。」

アレックスはソファに座り、お茶を啜った。

「用件はそれだけじゃないだろう。暇つぶしだったら追い出すぞ？」

脅し文句を言っているようだが、声の音量に強さはなかった。

武人もいつも言われ慣れているからか、怯える事はなかった。

「まずは…王子の案件やな。」

「お前との対決の後、かなりメンタルをやられていたようだ。」

「俺も脅した、ってのもある。アイツに謝っておきたいんやけどな…。」

「しばらくは顔を合わせない方がいいぞお前。」

お前の噂は、宇宙では持ちきりなんだからな。」

「俺も同じや。だからお前が少し、付き合ってやってくれへん？」

武人もコップのお茶を飲み始めた。

「俺も忙しいし、先程介抱はしたが？」

「ジェームズに頼んだけど、奴も兵の調達で忙しいんやと。」

「お前の選定が困難を極めているからだろう。」

「そりゃあ覚悟決めた奴にしか、機体に乗せられへんから。」

「子供達は…！」

「あの子らは純心や。大人と違って。地球を守る利点を言えば賛同しよる。」

「賢い子供もいるんだぞ？」

「…もう結果論や。3ヵ月間、あの子らの見張りをする。」

あっという間に、武人はコップのお茶を飲み干した。

「あの子ら…白井家の兄妹についても、相談があるんやけど。」

「戦闘以外でも、俺は面倒見ている方だぞ。部下にも伝えたし。」

「別の案件や。あの子らの家族構成を探れないか？」

アレックスがお茶を飲む動作を止めた。

「家族構成も最初の段階で聞いた。」

「祖父母と、父が単身赴任の形で働きにいとるんやろ？」

「…そこまでわかれば十分ではないか？」

「お前やったら、もっと疑うやろうと思ったんやけどなあ…。」

武人の発言の後、アレックスはムッと彼を睨みつけた。

童顔な男で、威圧感は薄い。

場の空気を陰悪にしたいくないので、武人はアレックスを宥めた。

「すまん、研究者への偏見やった。」

「疑問から入るのはいつもの事だからな。」

アレックスは再びお茶を啜り、飲み干した。

コップをテーブルの上に置く。

「日本でも、海外でもそうだが。子供には両親が付きものだからな…。」

「やっぱりそこは考えるんやな？」

「生物上、子を成すには父と母の存在が欠かせない。まして胎内の育成機能を持つ母がいないのは…。」

「何か訳ありってなるわな。」

「と先程言ったが、一応彼らの母についても伺っているぞ。もうこの世にいないらしい。」

「あちゃー。見当ついとったか？」

ショックを受けた感じの発言をしたが、武人の表情は変わらない。

「子供達は短期間でもパイロットとして任命している。少しの懸念は抑えておきたいんだ。」

「じゃあ…家族構成を深掘りするのはどうや？」

「…俺はこれ以上手が回らないぞ。」

誰かさんのせいで試作の一般機の改良に忙しいんだ。」

「頭に留めておくだけでもええよ。俺の、ちょっとしたワガママやし。」

「尚更自分でやれ。俺に任せるな。」

「せやな…人任せはあかん…。」

武人の口調に弱さが表れた。アレックスはそれを見逃さなかった。

だから、譲歩策を武人に示した。

「俺から声をかけてみる。」

武人はその言動を聞き逃さなかった。

「…そうか、すまん…。」

「技術局の管轄外の者も含めるが、構わないだろ？」

「もちろんお任せするわ。」

武人はソファから立ち上がり、研究室を出ようと、ドアの前に向かった。

背中を見せると、アレックスの制止が掛かる。

「お前…ストレスでも溜まっているんじゃないのか？」

アレックスがそう言うと、武人は顔を合わせずに、右手をヒラヒラさせた。

「悩み相談の時間、無いんやろ？」

【パスティーユ】の改良を第一優先しとき。」

自動ドアが開かれた。武人は研究室から通路へと歩み出した。

自動ドアが閉められた研究室に、アレックスが1人残されていた。

「…やっぱり溜め込んでるだろ、アイツは。」

彼もソファから立ち上がり、使用済みのコップをトレーに乗せて、キッチンまで運んでいった。

（アイツ絡みで、トラブル無ければいいが。）

アレックスは深刻そうな表情をしていた。

☆☆☆

王子の訪問当日に襲撃した【ホルプレス】は難なく対処できた。

まだまだ不慣れな点はいくつかあったけども。

【パスティーユ】は基本、攻撃をする時の操作が簡単だった。

《LOCK》と書かれた赤いボタンを押し、隣のパネルで方法を選択するだけ。

映像を確認しながらでもできた。

赤いボタンは自動的にオフにされる。誤操作の心配も不要だった。

しいて言えば、公園の襲撃の時に比べると数が多いし、強くなっていた。あの
はぐれ【ホルプレス】はたまたまで、本来は集団で行動していると武人兄ちゃんから教わった。

兄ちゃんには、戦闘後の夜に会った。

武人兄ちゃんに出会うのは苦痛じゃない。

むしろ、喜びの気持ちで100%勝っていた。

なのに兄ちゃんと別れた後、どこか心がチクリと痛んだ。

多分、会った時の兄ちゃんの発言、

『俺が敵に回ったらどうする?』に影響されているんだ。

頭の奥ではぐるぐると、答えを探していた。

訓練と勉強に励んで、週末の学校の休みが訪れた。

金土日は泊まりがけで【ラストコア】で訓練と勉強に取り組んでいた。

土曜日の昼食時、私は食堂で栄養満点のランチを注文した。

ランチを運んでいると、端の席でリュート王子が食べていた。

飲み物とパンだけの軽食で、お腹が空きそうだった。

私が多彩な品目を揃えたランチと比較したから、余計にそう映った。

王子の向かいに座ろうとして、王子に声を掛けた。

王子の許可が出て、私は向かいに座って、ランチに手をつけた。

食べながら、お互いの昼食については話したけど…しばらくは無言のまま食べる手を進めていた。

沈黙が長すぎても、気を遣うから。

私は何か話そうと口を開いた。

王子が私に質問をしてきた。

まずは、武人兄ちゃんについてどう感じているかを。

私は最初、いい人だよと言った。

すると王子は兄ちゃんを『犯罪者』と呼んだ。

そうは見えない…と言おうとして、言葉が詰まってしまった。

1週間くらい前、【ホルブレス】襲撃時の後の武人兄ちゃんが放った言葉が頭をよぎったからだ。

なんて返そうか動揺している私を見て、王子はどうした、と聞いてきた。それでも、私は答えなかった。

王子が質問を変えた。

2つ目に入ったけど、今度は私に関する行動だった。

何故【ラストコア】に積極的に通い続けるとか。

どうして学校が嫌いなのかとか。

王子は私を陥れる気とか更々なさそう、とは思っていたので、ある程度正直に話した。

いじめられていると言うと、もちろんいじめの原因も尋ねてきた。

そこで私は『同じ夢しか見れない現象』を言った。

目の前で聞いた王子は驚いたけど。

警報アラームが鳴り、私と王子の会話はここで中断した。

『猛スピードで急降下する物体』を確認したらしい。

隕石でも流れてくるという事前情報などなかった。

スタッフさん達は解析中で、HRが飛来してきたかは不明だった。

でも、備えは大事。

私もジェット機のcockpitの中で待機しようと決めた。

「王子、安全な所に避難してくださいね！」

「君はどうするのだ！？」

「私はコレで、【バスティーク】に乗りますので。」

私は服の中に忍ばせたペンダントを王子に見せた。

ペンダントは転送装置だから、cockpitまで一瞬だ。

「もう止めるんだ！君の夢の現象については…！」

「リュート！」

「その声は、サレンか！？」

「アレックスさんの研究室に行きましょう？地球のロボの戦闘をもう少し見て欲しいって言ってるわ。」

「…わかった。」

（同一の夢しか見れないとは…。彼女の現象は何か関係性があるのでは？）

★★★

急降下した物体はHRのロボであると判明したのは、輸送機が飛んですぐの事だった。

詳細は不確実な情報も多く、正体までは不明。

海外の荒地で暴走しているという報告で、敵の襲来の可能性が高いと判断された。

叫び声が聞こえるという付加情報で、話すロボだと認識された。

敵の着地点まで輸送機が向かっている最中に、敵の全体図の映像が送られた。

【パステージュ】は輸送機と連携しているので、データの送受信は迅速に行えた。

データを確認して、私達兄妹は【ホルプレス】と違う色合いのHRに驚いた。

しかも、1体だけ大地の上に立っている。

私は違和感を覚えた。

これまで2週間以上、【ラストコア】での勉強に徹してきて、HRに関する知識を習得した。

HRには、皆で行動を共にする、いわゆる《同調性》がある事も知っている。

だから、1人で立っているHRが奇妙に感じられた。

『これは…何か企んでるな…。』

武人兄ちゃんは脱出口の前で立っていた。

『まさか例外パターンが先に来たとはな…。』

『例外って…。』

『尖った能力の持ち主やと、能力のおかげで誰かと群れんでも乗り切れる奴もおるんや。』

『マジかよ…。』

勇希兄ちゃんは初耳のように聞いていたけど、私はこれも知っていた。

訓練や座学の講座以外にも、自学自習もしているからかな。

実際には武人兄ちゃんと【ホルプレス】以外のHRを初めて見たので、映像を送られて直後は私も驚いた。

モニターの映像で、敵のHRは着地点から一向に動いてない。

ただ悲鳴のように叫んでるだけ。

大きすぎて、耳が痛かった。途中で音量調節をしてしまう程に。

叫び声以外にも、映像の中のHRは何かを言っていた。

『出てこいラルク！お前をクーラン様に献上する！』

他にも言ってたけど、中身はみんな同じだった。

ラルク…？誰の事かなあ。

聞いた事あるような名前だけだなあ。

私はん？と不思議に思った。

モニターの映像は輸送機の格納庫の様子も映っている。

武人兄ちゃんが脱出口の扉に手を付いている姿を確認した。

『…この敵の相手は面倒いタイプや。俺が先に出て、仕掛けておく。君らはこの場で待機や。』

扉の開く音がした。

上空を飛んでいる輸送機だから、強風が入り込んでいる。

武人兄ちゃんの簡素な服装も風でピラピラと動いていた。

人1人が通れる小さな脱出口の縁は、兄ちゃんが後ろへ飛ばされないようにする支えとしては十分だった。

白い雲もチラッと見える大空へ、武人兄ちゃんは飛び込んだ。

ロボ形態へと変身する兄ちゃんだから、落下事故の心配はしてない。

別の…兄ちゃんが厄介な敵に陥れられないかは心配だった。

きっと、1週間くらい前の兄ちゃんの発言が、私の頭の中に残っている。

敵に回るとしたら…震にハマるパターンを真っ先に思い浮かんでしまう。

公園で助けてくれた兄ちゃんが、自分の意思で裏切るなんて有り得ないと信じてるから。

☆☆☆

【ラストコア】の輸送機は、着地した敵、エスト・フレスラーとの距離を縮めていた。

あと数千キロという間隔から武人は飛び降り、【ブラッドガンナー】へと変身した。

【ブラッドガンナー】の武器は銃だが、格闘に似たスタイルに持ち込めるので身軽である。

だから、スピードも速い。

輸送機の通信機器のモニターからの映像から、武人はエストの行動を把握していた。

エストのロボ形態【ティア・ルーチン】の周辺に人や動物がおらず、寂れている状態が気になった。

これと叫び声に、因果関係があるのか…武人は調べる為にわざと近づこうとした。

接近速度を上げて。

【ブラッドガンナー】は右手に中距離程度の範囲を放つハンドガンを出して、試しに撃ってみた。

【ティア・ルーチン】が荒地のど真ん中にボツンと立っている姿は、【ブラッドガンナー】のアイカメラで把握できた。

狙いを定めたら、撃ち落とせる可能性もあったが、あえて外す方向で放った。

威力のそこそこある攻撃がされたと、エストは反応した。

【ティア・ルーチン】の正面は飛んでくる【ブラッドガンナー】に向けられた。

『その姿は、ラルクだな！』

エストが言った。

彼は両脇をしめて、やる気を出していた。

【ブラッドガンナー】との対決に興奮気味だった。

【ブラッドガンナー】は右手のハンドガンの銃口を上に向けて、あと数十キロという地点で止まった。

回避行動の取りやすいように、上空で漂う状態になった。

『俺の名前は武人や。ラルクとちゃうで。』

武人はエストに訂正を促した。

この言動には、呆れの感情が込められていた。

エストには、武人の発言が虚偽だと感じ取った。

『僕は知っている！黒と赤のボディのHRは、火星圏タレスの象徴だろう！』

『単体の黒も単体の赤も存在するで？属する専任の研究者がほぼ1人やから、色は偏るけどな！』

『その発言は！出身をバラしたとみなすぞ！』

その後エストは叫んだ。

あああああ！と一番高い母音を用いて。

【ティア・ルーチン】の凶暴な口は、エストの叫び声で牙が丸見えになった。

あれで噛み付かれると、ロボの装甲に穴が開くだろう。

【ティア・ルーチン】が脅威に感じられるのは、他の要素もある。

武人が輸送機で見た時の、雄叫びの威力。

彼の雄叫びは、敵を寄せ付けないようにできている。

【ブラッドガンナー】も極限まで距離を詰める事はしなかった。

雄叫びの威力で吹き飛ばされる。

無駄なダメージは避けたい。

そこで武人は、一定の距離を保ちながら、ハンドガンで敵の体力を減らす作戦を考えた。

雄叫びを無闇に阻止せずに。

周りを寄せ付けられない程の叫び、情緒も不安定だと武人は推測していた。

機敏な自分が空中でちょこまか動くと、相手をイラつかせる。

【ティア・ルーチン】には武器らしき持ち物は見当たらなかった。

適度に煽り続けていれば、相手は疲弊して自滅するだろう。

トドメはその後と、武人は考えていた。

☆☆☆

武人兄ちゃんが荒地のど真ん中に立つHRと交戦した。

コックピットのモニターの映像でも、【ブラッドガンナー】の姿の兄ちゃんが華麗な動きを見せていた。

これ以外の敵は、出現していない。

【パスティユ】は合体せず、輸送機内でジェット機を固定されたままだった。

こんなに激しく動いて、武人兄ちゃんが疲れないかなあと心配してるけど。
少しダメージを受けつつも、分身術を駆使するような動きで翻弄しようとする
【ブラッドガンナー】。

私達兄妹は監視を忘れそうになっていた。

武人兄ちゃんの誘導がすごい。敵のHRが慌てる様子もわかる。

『大人なのにあの素早い動作するのは凄いな…。』

『訓練の時とは比べ物になんねえ位、強えよ…。』

「襲撃事件の時から知ってたけどね。」

各々感想を述べていた。

いつ輸送機の陣営に攻撃を仕掛けてくるか、私達が出撃するのかわからない緊急時に。

モニターの地図データの確認を急っていた。

当然のことながら、ジェット機搭載中の輸送機が襲われた。

交戦中の映像に気を取られすぎちゃって。

ジェット機は格納庫で固定されている。

輸送機が揺れると、ジェット機も揺れにつられた。

『うわっ！』『きゃあっ！』

私と勇希兄ちゃんは声を漏らしてしまった。

激しい揺れに驚いて。

和希兄ちゃんは歯を食いしばっていたのか、声をそこまで漏らしてなかった。

『今は戦闘中だよ！危機感持って！』

『はい！すみません！』

和希兄ちゃんは輸送機の操縦士さんに謝った。

輸送機に攻撃が当たったと知り、私はモニターの地図に視線をずらした。

他に敵が存在している。

私や兄達、輸送機に同乗している皆さんまでもが確信しているのに。

地図上には、敵を示す赤い光の点がなかった。

地図データはタッチ操作で半径を拡大できる。

指でなぞる様に地図を広げていった。

それでも、敵の姿がなかった。

もしかしなくても、潜んでいるのかな？

私の勘だった。1人の少女の勘は、戦闘時だとあまり意味がないから、状況だけ報告していた。

『厄介だなあ…。』

『どうしましょうか？出撃する方が…。』

『アレックスさんは別の対応に追われてるし…出撃しよう。他の輸送機にもA-1の展開を呼びかけておくよ。合体して迎撃に備えておくんだ。』

操縦士さんの指示に、私達は承諾した。

安全装置の一式が、全て外された。

固定用のアームも外されたので、揺れが起きればジェット機はタイヤで動いてしまう危険性もある。

格納庫の整備士さん達が発進口の開錠作業まで着実に進めてくれた。

ジェット機を飛ばす直前に、彼らは退避した。

3階建の構造になっている格納庫。

各フロアに、【パステージュ】のジェット機が1機ずつ収容されている。

下の階から1機ずつ上空へ飛ばされていく。

ピンクのラインが入ったジェット機が1番下の階だから、私から先に飛ばす。

カウントダウンと発進の掛け声の後に、俊速で上空に出る。

巨大ロボになる為の合体は、ジェット機が障害物の少ない広々とした空間で行われる。

勢いよく飛行するので、障害物に衝突して戦闘不能に陥りやすいからだ。

《熱融解》の仕組みで、【パスティユ】のジェット機は全機を三角形の様に配列する。

勇希兄ちゃんの黄色ラインのジェット機が上だった。

敵の姿が確認できない今、【パスティユ・サニー】で複数の輸送機を守る形を取る見込みだった。

支援ロボとして、数機のA Iも射出されている。

《熱融解》の仕組みが作動し、【パスティユ】の3つのジェット機全てが白く光出した、時だった。

三角形の塊に、下から電撃が走ってきた。

電撃はコックピット内にも伝わった。

絶縁性のあるパイロットスーツを着込んでいるので、稲光を見ても私達が痺れる事はない。

だけど、機体は動かない。

当然、安全策を取る為、合体作業を一時中断させた。

痺れないけど、潰されそうになると感じた私達兄妹は叫んでいた。

ポツポツと、小さな爆発も起きている。

寸前の所で、破壊は免れた。

ジェット機の下でA Iロボの一部が電撃を吸収してくれた。

電撃をまともに吸収したA Iロボは爆発した。

私達は逃げ切り、上空の高度を上げた所で合体して、降下した。

形態は【パスティユ・フラワー】だった。

予定していた【サニー】と違っていた。

電撃をくらった事で、敵の勢力の一部を推測したのだ。

畏を仕掛ける…すなわち敵は見えない所で多数存在しているのではと。

【フラワー】はロッドを前に構えた。

地図データに敵を示す赤い光の点が点滅しない以上、無闇に技を披露するはいけない。

【パスティユ】に搭載されたエネルギーは有限だ。

浪費は失策に繋がる。

もう少し、敵の動きに集中しなければ。

輸送機から距離を離さずに、【フラワー】の飛ぶ地点周辺を警戒した。

『何だよ、敵が見えないって！』

『ピンポイントすぎて、自然の雷じゃない。天候は晴れている。』

2人の兄達が言った。勇希兄ちゃんが怯えている様子なのはわかる。

私も見えない敵には戸惑いを隠せないから。

でも、それは言い訳にしかない。

短期間でも【パスティユ】のパイロットなら、務めなきゃいけない。

訓練時に、敵の戦略パターンは多様化していると教わった。

正体不明の敵への対処も、典型的な戦略パターンの1つと考えれば、多少の気持ちは楽になる。

そもそも私達兄妹は【ラストコア】に来て2週間程度の新人。

武人兄ちゃんと【ホルプレス】以外の敵なんて、未知の存在でしかない。

だから余計に、警戒を怠ったりはできなかった。

武人兄ちゃん、【ブラッドガンナー】の華麗な動きに見惚れている暇などなかった。

兄ちゃんの様子は画面の隅に小さく流しておき、周辺の状況をチェックしていた。

何もなくて、静かだった。

大地の草木や砂場だらけの土地でも、人は住んでいるだろうに。

最初に人払いしたからかな？

地図データも実際の映像とリンクしていて、敵の気配はなかった。

輸送機が被弾し、ジェット機に電撃が流れてきたのに。

本当に不気味すぎる。

予感は当たっていた。

武人兄ちゃんはこの時の備えとして、私達を連れてきた。

あのHR 1体だったら、兄ちゃん1人でも対処できる。

HRの基本的な特性として、《同調性》があると勉強で教わった。

仲間と、同志と共に行動する能力。

あのHRには同志の存在があって、その同志が今、私達に攻撃を仕掛けてくる。

3度目の敵の攻撃。

白い光が何発も降り注いできた。

今度はセンサーが反応し、バリアがダメージを軽減した。

輸送機側にもバリア展開でダメージを抑えていた。

光を拡大すると、白い立方体の塊が流星の様に降り注いでいた。

上から下へと、ほぼまっすぐに。

ようやく、敵の位置の大まかな特定ができるようになった。

私達を含め、全員が『上空に敵が潜んでいる』と判断していた。

『もしや…レーダーに反応しないのは…。』

操縦士さんが何か思い出したみたいに言った。

『条件とか、あるんですか？』

『一応は、何だけどね。大気圏外、もしくは圏内でも極度に高度のある上空に位置する宇宙船やロボは、反応が途絶える危険性があるんだ。』

「じゃあ、敵は今…！」

『他の要因もある。レーダーに反応しないよう、宇宙船やロボがわざと姿を眩ませている事例だ。我々地球人と違って、他星人達は特殊な能力を持ち合わせているケースもある。』

姿を消すのも簡単かもしれない。』

『ちょっと待てよ！ヤバイ奴と鉢合わせしてるだろ！』

勇希兄ちゃんが吠えた。

キャンキャンうるさい下の兄だけど、今回の発言には私も同情するよ。

操縦士さんとやり取りを交わしているうちに、立方体の弾が雲もどきと化して、沢山落としてきた。

バリアを張っていても、威力が高まってきて…耐えるのに必死になる。

バリアだってエネルギー消費に繋がっている。

予備分も持参してるとはいえ、このままではギリ貧になってしまう。

立方体の弾は光を放っている。

モニターの映像がチカチカしていて、直視したら目が痛くなる。

『…厳しいけど、打開するしかない。今援護要請をした所だ。黒川さんにも連絡するよ！』

「武人兄ちゃんは交戦中じゃあ…。」

『敵の誘導をさせるよ。1カ所に纏めて鎮圧した方が、戦闘コストも被害状況も抑えられる。』

『そうですね！それまでは防御に…』

通信に割り込みが入った。別の輸送機の操縦士さんからだった。

彼の表情に焦りを感じた。

『まずい事になったぞ！』

台詞からも焦りが見受けられた。

私達にお手付きの操縦士さんがすぐ応答した。

『どうした！』

『【パスティーユ】の子供達は通信繋がってるか！』

『はい、俺達に届いています！』

『距離の問題か？』

別輸送機の操縦士さんは操縦席内を見廻した。

異常が発生してないかのチェックをする為だろう。

でも、距離の問題かな？今のモニターの映像もおかしいんだ。

チカチカしているのはもちろんの事だけど、ノイズの線が入っているのも気になった。

もしかして、通信関係自体が乱れている可能性がある…？

『それと何の関係があるんだい？』

『先に黒川さんの補聴器に通信を入れようとしたが、エラーが出たんだ…。』

☆☆☆

過去に何人かの【宇宙犯罪者】のHRも見てきた武人は、HRの見た目を目視しただけで特定できる者もいる程、知識は豊富である。

だが今回のHRは、初対面だった。

だから、エスト・フレスラーが彼と互角に戦えるのに驚いていた。

さらに武人は、武器の持ち合わせにも着目した。

【ブラッドガンナー】は多数の銃を使用するHRである。

素手でも戦えない事はないが、有利に進めたい武人はこれを好まなかった。

対してエストのHR形態【ティア・ルーチン】の、武器らしき所有物は見当たらない。

まして彼は、拳ではなく『叫び声』で敵を翻弄、圧倒していく。

人数については暫定的で、敵は他にも潜んでいると武人は睨んでいた。

同時に、ソロで挑んでいたHRも見てきた彼だったが、『声』で寄せ付けないHRは初めてだった。

純粹に、武人はエストを評価していた。

他にも彼は、エストの『叫び声』に悲しみや憎しみが増していると感じ取っていた。

（うまい事乗せたったら、コイツは味方になるとちゃうか？）

彼は思った。

白井兄妹が乗る【パスティーユ】が戦力に加わったとはいえ、[ラストコア]の戦闘保持力はまだまだ弱かった。

地球での生産ばかりでは敵の戦力に追いつかない。

脅威のHRでも、引き入れたら利用価値は十分にある。

武人は行動に移した。『叫び声』で遠くに飛ばされやすいから、距離を置いた状態で大声で言った。

『お前、強かったんやな！』

【ティア・ルーチン】の全身が、ピクリと動いた。

【ブラッドガンナー】のアイカメラは数百キロ先の物体も鮮明に映される。エストの動揺も、見逃さなかった。

『何を、言っている…。』

『俺は思った事を素直に言っただけや。お前は敵を中々引き寄せへん。それは、お前の実力やで？』

ウッ、とエストは声を漏らした。

彼に武人の言葉が、かなり響いたようだ。

（これは…もうちょいで効くんちゃうんか？好きで罪犯してる奴ばっかちゃうしな。）

武人は思い通りにいくように、エストに話を続けた。

『なあお前。今までいくつ、滅ぼしたんや？』

『滅ぼしたって…星の事か？数を聞いてどうするんだ！』

『いいから、教えてくれへん？』

エストがカッとなって怒りそうな様子が見られた。

武人は難なく彼の感情をスルーした。

『……覚えている限りで、4つ。』

エストはボソッと呟くように言った。ロボ形態はマイクと同じ音量であり、呟きも遠くの武人には聞き取れた。

『ほお。4つで[宇宙犯罪者]の烙印を押されるんかいな。』

『1つ滅ぼしただけでも犯罪者扱いになるだろう！』

『安心し？俺なんか11や。』

『…それは、知っている。』

『4つなんてかわいいもんや。滅ぼしたのも、別に故意があってやった行為ちやうやろ？』

『…どうして、ズケズケと僕に聞いてくるんだ？』

エストは武人に疑いをかけた。

彼にとって、武人が奇妙な問いかけをしてるのが謎だったからだ。

彼の心は不安しかない。

『お前には、反省の余地がある。』『え…。』

【ティア・ルーチン】の姿ではよくわからないが、エストの両目は大きく開かれた。

『俺の経験からしかわからんけどな。あんだけの星を潰しても、俺には救いの手を差し伸べてくれた恩人がいてくれたんや。だからお前にも恩人が必要や。』

【ブラッドガンナー】は手に持っていたハンドガンを消去した。

銃はHRの能力で生成されるもので、消去は収納の意味合いと同じだった。

『誰もお前に手を貸せへんのなら、俺が貸す。』

仲間には、うまく交渉するから。どうや？俺と来るか？』

【ブラッドガンナー】は左手を前に差し出した。

【ティア・ルーチン】のカメラアイからでも、その様子を確認できた。

自分に、差し出された手を握れというのだろうか…。

エストは戸惑っていた。

彼の人生は過酷だった。

HRとしての改造の為、故郷の冥王星圏から離され、研究所もたらい回しにされ…嫌われ者として孤独に生きていた。

誰もが彼を侮蔑し、お返しとして嘲笑う者達を蹴散らした。

唯一の彼の持ち味である『叫び声』で。

自分を出迎えてくれる機会なんてなかった。

だからエストには、黒づくしの【ブラッドガンナー】が、輝いて見えていた。

あの手を握ってみたい…と思った矢先に、新手の策が仕掛けられた。

新手かと悟ったのは武人の方だ。

【ブラッドガンナー】の全身に、白い糸が張り巡らされていた。

大地にはHR1体がすっぽり収まる円が刻まれていた。

円から白く光る糸が、植物のツルのようにグングン伸びていった。

『こ、こいつは…！』

武人はこの罠について、見識があった。

刻まれた円も、全身を絡め取った糸も、白く光る。

技の発動から今までが、魔法の罠かと疑ってしまうくらいに。

『やっぱ誰か、おるんやな！こんな手の込んだ攻撃すんの、マル口か！』

武人はもう遅いと頭で理解していても、震の仕掛け人の正体を見破っていた。

エストはただ見つめるだけだ。それどころか、突然笑い出した。

『ハ、ハッハッハッ！ 僕が甘かったんだな！ 逃亡者のお前にホイホイついて行こうと、一瞬考えたじゃないか！』

【ブラッドガンナー】のカメラアイは、両手の肘を下に曲げた【ティア・ルーチン】の姿を捉えた。

痺れの影響で、武人は動けなかった。

ツルのように伸びた白い糸から、小さなサイコロ状の玉が生え出した。厄介な玉が、電撃を流したのだ。

電撃の稲光が【ブラッドガンナー】の全身を包み込み、彼に麻痺を味わせた。

痺れて身動きの取れない状況でも、武人は意識を失わなかった。

意地でも、歯を食いしばった。

『僕に手を差し伸べようとしたけど、もう既に協力を結んでいるんだ。今の攻撃を繰り出す相手を知ってるんだったら、誰と手を組んでいるかわかるだろう？』

エストが言った。

悪どい笑みを浮かべていそうだと、武人は読み取っていた。

武人は悲鳴を上げなかった。代わりに彼は、最後に忠告した。

『お前…あんなど畜生な奴と…同等に成り下がってもええんか…？ 一生、後悔するで…。長生きしたいんやったら…自分の行動を…振り返るんや…！』

電撃の痺れにも屈せず、力を振り絞った武人。

彼に対する攻撃の手は、緩めなかった。

むしろ、痛み付けを加速させていた。

流石の武人も、悲鳴を上げた。

『ぐああああ！！』

電撃の威力は増し、【ブラッドガンナー】は全く動けなくなった。

真っ白な炎で燃え上がるかの如く、彼の姿も白くぼかされていた。

停止行動は一瞬だった。

白い糸は絡まったままだったが、発光は徐々に弱まっていた。

【ブラッドガンナー】はズルズルと地上へ引き寄せられた。

武人の意識は、途絶えていた。

地上に刻まれた円の枠内に収まった【ブラッドガンナー】を、白い和装姿のロボ達が4体、囲んでいた。

彼らはマル口こと、天王星圏スイルのHR、マルロ・ヒーストンの仲間達であった。

もちろん彼らもHR。

【パステージュ・フラワー】のように、白いロッドを片手で振るタイプのHRだ。

彼らが左手で1振りするだけで、糸で拘束された【ブラッドガンナー】の周りに四重の輪が形成された。

これは動かない【ブラッドガンナー】を上空へ持ち運ぶツールとして使用していた。

4体のマル口の仲間は直立状態で、空へ登った。

四重の輪の中の【ブラッドガンナー】は、強制的に連れて行かれた。

見送る【ティア・ルーチン】も後を追った。

他の地点からも、マル口の仲間達が同じ方向を目指していた。

この時以降、武人が地球へ帰ってくる事はなかった…。

2・更改の日



火星圏タレス・[レッド研究所]は、相変わらず薄暗い施設であった。

クーランの部屋ではコンピュータだけが稼働している状態。

モニターの明暗もまちまちで、不気味さも増していた。

この時、違う点もあった。クーランの部屋の訪問者である。

普段は和装姿の《オス》・マルロしか訪れていなかった。

マルロはHRの中でも知的な奴として、クーランが利用していたものもある。

今回の訪問者は、エストだった。彼の訪問は数回だがあった。

クーランが《自慢の息子》と称するラルク、すなわち武人を捕獲するよう、エストに依頼していた。

任務依頼の際に彼はエストを呼んでいた。

クーランが呼び出したのはこの1回きりで、他はエスト本人が自ら出向いた経験があった。

力不足で情緒不安定だとして、クーランはエストをうまく活用できなかった。

たまたま今回、エストに白羽の矢を与えたのだった。

今のエストは、いきいきとした喜びの表情を見せていた。

クーランから寄越された初任務を達成できたからだ。

表情もいきいきしていれば、言葉も自然にはきはきと喋れるものだ。

生物形態では、憂鬱さが際立つ地球人の男性にしか見えないエスト。

クーランの前にはこの姿で報道相を守ってきた。

「ラルク・トゥエラーを見事に捕獲しました！」

クーランも珍しく、コンピュータに背を向けていた。

エストの報告を聞く為に。

「そうか。奴はどこに仕舞っている？」

「マルロさんの宇宙船から実験室の大型カプセルへ搬送して頂きました！」

「ほお。だったら楽に作業できるな…。」

クーランは顎髭を摘む仕草をしていた。

「これから、僕の待遇も検討して…え？」

エストのいきいきとした笑顔が、一瞬にして消えた。

カチャ、という小さな音で。

クーランが銃を手にしていて。銃口の先は…エストの胸元だった。

これは、命を狙ってきている…？エストは焦り出した。

「あ、あの…。任務果たしました、よね？」

「おう、ラルクをここまで引っ張ってきてくれたのは、感謝するさ。」

「でしたら…。」

「だがな。それを実行したのはお前さんではなく、マル口のお仲間だろう？俺は最初から最後まで、じっと監視していた。お前さんはただラルク相手に叫んでいただけだろう？」

クーランは長々とエストを責めた。

エストも負けじと、自分の今の上司的存在の者に反論した。

「ですが！ 囹役としては十分活躍しましたよ！」

「まあ、お前さんの行動でマル口は動かしやすかったとは言ったさ。例の地球産ロボはアレでボロボロになっちまっただろうし。」

エストは褒め言葉を聞いて、少しホッとしていた。

まだクーランの銃は降ろされていない。

その後の発言がエストに衝撃を与えた。

「お前さんは戦闘終盤に、ラルクに変な話を持ちかけられただろう？ラルクの手を握ってみたいだと、一瞬たりとも思っただろう？」

「何を…根拠に？」

「お前さんの終盤の動向で、なんとなく推測したさ。」

クーランの右手の人差し指に、銃の引き金を押す力を強めていた。

弾は発砲されていない。

「お前は用済みだわ。喚くだけ喚いて、面倒見んのしんどいんだわ。」

「ま、待ってください！僕にはまだ価値が…！」

エストはこれ以上、喋らなかつた。いや、喋る事を許されなかつた。

エストの胸元に銃弾が貫通し、穴が開いた。

H Rは自身の心臓部分をやられると、全体の機能が停止する。

彼もこの例から漏れる事はなかつた。

最後のエストの脳内に、戦闘に挑んだ武人の言葉が繰り返された。

『後悔するで。』

言葉の真の意味を知った彼だが、もうなす術はなかつた。

エストが呆然とした状態で仰向けに倒れた後のクーランの部屋。

少年らしき《オス》が入ってきた。

動かないエストに向きもせず、ロッドの底を突きながら歩いた。

クーランは銃を下に捨てた。

「おう、報酬の件だな？」

「…銃声、部屋から離れた場所でも響いたぞ。」

「強力だからな、この銃。」

クーランと訪問者の《オス》マル口は捨てた銃を見た。

「被害拡散も視野に入れてないのか？」

「だって俺、H Rじゃないし。此奴の事だからいつ呼び散らすかわからんしなあ。」

ついでにマル口は目も口も開かれたエストに視線をずらした。

胸元の穴から、オイルのような赤い血が床に広がった。

「あっちへこっちへフラフラ寄っちゃう信念のねえ奴は嫌いだよ。扱いがめんどうくせえ。お前さんだって敵に寝返る奴は始末するだろう？」

「…そうだな。」

クーランはモニター前のパネルをキーボードのタッチのように両手で操作した。

文字の入った図表がモニター画面に大きく表示された。

「約束の報酬な？これで大世帯のお前さんとこの部隊も食わせていけるだろう？」

「事足りる。…《自慢の息子》も処刑するのか？」

クーランはコンピュータと向き合ったままで、マル口からは表情を確認できない。

だが画面の反射で、笑みの表情が薄らと映った。

「これから招集をかける。」

★★★

エスト戦は〔ラストコア〕側の実質的な敗北に終わった。

地球の大地に降り立ったエスト以外にも敵が潜んでいた事実は、武人も予測していたのだが。

武人以外の味方が【パスティーユ】とアレックスのA Iのみの戦力では、数の多いマル口の部隊相手に太刀打ちできなかった。

出撃した【パスティーユ・フラワー】は、ほとんどバリアで防御に徹していた。

マル口の部隊は全員がHRという強力な組織で、魔法の弾を飛ばす形の攻撃は【フラワー】の動きを封じていた。

兄妹の中で揉め事が起き、メインパイロットの末衣子がキレてバリアを解除してしまった。

ロッドの大技の攻撃を繰り出して、一気に敵を片付けたかったからだ。

ところが、戦闘経験の浅い彼女達は、

当たり前の惨劇に襲われた。

バリアの解除は、ダメージの軽減をなくす事に繋がる。

マル口の部隊からの激しい攻撃で、【フラワー】の損傷も酷くなっていった。

油断である。

輸送機の操縦士の応援要請とA Iロボの多大な犠牲により、【パスティユ】

の喪失だけは防げた。

敵のマル口の部隊が一定時間後に撤収したのも大きい。

傷だらけの【パスティユ】と輸送機達も、敵の撤収を確認した後に即帰還し

た。

これ以上戦闘を続けると、白井兄妹も巻き込まれるからだ。

戦場で命を落とすのはつきものであっても、子供達が了承したとしても、大人

としては最悪の事態を避けたかった。

《剛力ガラススフィア》の緊急脱出の指示も検討していた。

エスト相手に単独で行動していた武人には、[ラストコア]の別部隊が向かっ

ていた。

この時、別部隊の輸送機は発見した。

エストと交戦していた武人。

武人のHR形態、【ブラッドガンナー】が白い糸に絡まって動けない状態に

なっていた。

別部隊の輸送機が辿り着いた時に、武人は危険に晒されていた。

アレックスのA Iロボは搭載されていたので、各輸送機から発進させた。武人

の痛みを、少しでも抑えるために。

しかし、無駄弾を浪費しただけに終わった。

上空から立方体の弾がA Iロボに降り注いだ。

回避行動を学習しているAⅠロボだが、弾の振り方が異常で攻撃を読めなかった。

弾はまっすぐ落ちるタイプもあれば、乱雑に描くように落ちるタイプもあった。

AⅠはパンクし、弾の直撃で爆発した。

各輸送機の操縦士は、【バステューク】が控える地点の部隊や【ラストコア】本部に連絡を取ろうとした。

ところが、謎の通信障害が発生していた。

乗組員達が原因の解明に努めたが、通信の復旧には至らなかった。

目の前で武人が敵に拉致されるのを、操縦士達は黙って見守るしかなかった。

通信が復旧したのは、敵の撤収後だった。

通信障害は敵の妨害だったのだけしか操縦士達は知らなかった。

敵の陣地に踏み込めないからだ。

【ラストコア】総司令官の西条宗太郎は、別部隊の操縦士から武人拉致の情報を聞いていた。

だから彼は、稼働部隊が戻る前に個室のモニター前にいたのだ。

目的は、外部との連絡だった。

統制制御室でできる作業だが、敢えて個室から通信回線を繋げた。

宗太郎はとある人物と連絡を取る時、この方法を利用していた。

ディム・カミング。元アメリカ軍中將。

彼は【ラストコア】の設立を支援した人物だった。

これから宗太郎は、彼との通信に踏み切る。

「中將…。誠に申し訳ございません。」

宗太郎は個室のど真ん中で、壁際のモニターに対して頭を下げた。

モニターには還暦を迎えた元中將の男性・ディムが映し出されていた。

『顔をあげるんだ西条。このような結果が出るのは想定内だ。むしろ、10年も維持できたのは幸いだった。』

ディムは左の手のひらを出して、画面越しの男に謝罪を止めた。

『話が長くなるだろう。適当にイスを持ってきて、座りたまえ。』

「それは…。」

『気にするな。将校の時代は過去の話。今の私はただのおじさんだ。君は辺境の地にいるとはいえ、現役の左官だ。足に負荷をかけさせたくはない。』

ディムに念を押された宗太郎は、個室内の設備として保管していた折り畳み式の椅子を取り出した。

椅子の姿に変形し、彼は座った。

『敵の勢力が活発化したようだな。』

「仰る通りです。衛星データでも、火星付近の星から、流星の様な動きが何度も目撃されてます。今年に入ってから…。」

『黒川は火星圏出身だったな。報復の準備が整ったと言ってもいいのだろう。』

「それに比べ…我々は準備不足でした。期待通りに兵士達の募集と育成を進めずに…。」

『【パスティユ】等HRに対抗できる兵器を開発したのは御の字だ。私も、うまく人材を引き抜けなかったのも申し訳ない。』

今度はディムが頭を下げた。

『フェリー少佐が正規軍からこっそり人材を確保しようと善戦しているのに…。私は世界情勢が、などと口にして。』

「とんでもありません！私も地球内の情勢には耳を傾けております。各国の軍隊が我々に手を貸せる余力がないのは十分承知のつもりです…。』

ディムの弱気な発言に、宗太郎は慌てて否定した。

宗太郎も地球内で起きたニュースをチェックしているからだ。

「中将の尽力がない訳ではありません。優秀な研究者等、裏方のスタッフは集まったのですが…。」

『約半数は黒川が罪人から拾ったな。かつてのヘイリー君もそうだった。』

「【バステュー】の完成発表は2年前でした。一般人用としての運用を計画していた為に、稼働開始が遅れました。」

『【軍用機】も【バステュー】完成の1年前にお披露目されたのだ。合体機構のあるロボットの開発に難航したのだろう。』

「普通の地球人では、HRに対抗できませんから…。」

『数で合わせて皆で手分けすれば、個々の負担も少なくなる…気持ちのゆとりを持たすようにしているのにな。』

「結局、前線には誰も行きたがらないんですね。」

『命を捨てたくない人間が増えた。仕方のない事だ。』

ここで彼ら2人の間に沈黙が流れた。

2人とも苦悩に満ちた表情をした。

先に口を開いたのはディムだった。

『西条、今後の【ラストコア】の運用はどうするか決めているのかな？』

「…すみません。今後の活動に向けて、中将からご意見を頂戴したく…。」

『黒川の奪還は計画するのか？』

「もちろん、それを進めたいです。幸い、今は土星圏の王子一行もいますし。」

そうか、とディムが反応を示した。

ディムは両手を下で動かしていた。

それは…モニター画面の切替わりを示唆していた。

宗太郎は察知し、モニターの隣の簡易パネルを操作した。

ビジネスで活用する、一般的な表形式のリストの書類データが出力された。

表記は全て英語だが、宗太郎は読めた。

「このリストは…。」

宗太郎は尋ねるように聞いたが、人物の名前と出身地の惑星の名前には気づいていた。

『[宇宙犯罪者]のリストだ。』

「え…！」

宗太郎は驚いた。

[宇宙犯罪者]、それは宇宙上の星を滅ぼしたHR、またはそれに準ずる者が総じて呼ばれた称号だった。

星を滅ぼした経験がある事実は、それなりの戦闘能力も戦術も長けている証拠になる。

すなわち状況次第では、自分達の住む地球に危険を脅かす者も現れるという羽目になる。

そんな彼らが、リスト上に掲載されているのだ。

「信用して…いいのでしょうか？」

宗太郎は恐る恐る聞いていた。

ディム自身は[ラストコア]創設時から立ち会ってくれた人物。

宗太郎は元アメリカ軍中将自体は信頼していた。

今回揭示されたリストとは別、と判断したくはなかった。

しかし武人無き今の[ラストコア]では、白井兄妹が臨時で乗る【バスターコ】ぐらいしか、対抗戦力は残されていない。

宗太郎は額に右手を当てて、困り果てていた。

『酷な話にはなるが…。【パスティーユ】と…協力できれば土星圏の王子達。これとヘイリー君のA I ロボでは不十分だろう。1名だけでも引き抜くしかあるまい。』

ディムはそう言ったが、当の本人も宗太郎の気持ちを汲んで、哀れな目で見ていた。

ディムの話は、まだ続いた。

『もう1つだけ進言しよう。戦力を機体だけに向けてはいけない。視野を広げるんだ。ヘイリー君ら技術局は、機体以外の開発にも力を入れてるのだろう？』

「まさか…宇宙船を？」

『宇宙船、と言うべきだったか…君達の該当する戦艦だとそうなるだろうな…。』

「最新の宇宙船で、[天海号]が我々の中では話題にあがっておりますが…。」

宗太郎はある宇宙船の名前を出した。

『…私の意見は1つの参考として留めてくれればいい。襲撃時のみでも、宇宙船を地球上の戦闘として使用するには、この惑星に負荷がかかり過ぎてしまう。』

「そうですね。」

ピコン、と電子音が鳴った。

宗太郎は携帯のメールの受信音と設定していた為、コート右側のポケットに視線を当てた。

『PCとモバイル両方に、データを共有しておこう。』

ディムが言い出すと、宗太郎はすぐに顔を上げた。

「ありがとうございます！わざわざファイルを作成して頂いて…。」

『構わんさ。ご老体の頭脳トレーニングの一環として、文書作成ソフトを利用していただけた。』

「これだけの膨大な情報があれば、十分参考になります。」

『厳しい時期に突入するが…私には声援を送るしかできない。頑張ってくれ。』

「気持ちだけでも感謝します、今回はありがとうございました！」

ここで通信が切れた。

モニター画面はディムが消えて、PCのデスクトップに似た表示に変わった。

簡易パネルで、宗太郎はディムからのリストを再確認した。

「こんなに存在するのか…。」

宗太郎は〔宇宙犯罪者〕の多さに圧倒された。

リストの中に、《マルロ・ヒーストン》の名前もあった…。

☆☆☆

〔ラストコア〕には何度も臨時でミーティングが開かれる。

だからといって、いちいち統制制御室に顔を出さないといけないとかはない。

中には自分の作業場から手が離せない人もいる。

その人達の為に〔ラストコア〕の全部屋には、モニターが最低でも1台は備え付けられていた。

…私は特に、ミーティング時に来れない理由なんてないんだけど。

ペンダントの《転送装置》も持っているし。

というか、しばらく部屋に出たくない気持ちが強かった。

直近の戦闘でのショックが大きすぎて。

あの戦闘は、私の想像の範疇を遥かに超えた。

【パスティーユ】は強いと思ひ込みすぎた。

【フラワー】ならあの白い和装姿のロボ達相手を一気に蹴散らせる。

そんな認識の甘さが悪かった。

ここまではまだ序の口で。

戦闘はマニュアル通りにいかない場合が多いと教わっていたし。

今回の件で反省と対策の選択肢を増やせばいいだけだから。

私が立ち上がれない理由は、他にあった。

武人兄ちゃんが敵のロボに連れて行かれた報告は、帰還した翌日に聞かされた。

報告担当のスタッフは「落ち着いて聞いてね。」と気を遣ってはくれた。

でも、冷静を保ちたくても保てない状態だった。

『武人兄ちゃんが敵に捕まった』

と言うワードは、私の思考を混乱させるには十分だった。

『俺が敵に回ったとしたら、どうする？』

以前の【ホルプレス】戦後の夜の時の問いかけが、私の頭の中に蘇った。まさか、敵に捕まえて…。

報告時に私は、何度もスタッフさんに聞いていた。

自然と口が開いていた。

どうして救出しなかったのか、打開策は無いのか、口に出ていた。

当のスタッフさんの気持ちを考えずに、困らせてしまった。

突っかかるように言っていたのも、兄達に抑えられるまで気がつかなかった。

私は、かなり熱くなっていた。

熱が冷めた私は、気力を失っていた。

当てがわれた個室のベッドの掛け布にくるまって、引きこもるようになった。

武人兄ちゃんがいないと知って立ち直れず。

日課の訓練も『体調不良』扱いで欠席した。

兄達はちゃんと参加しているけど。

行方不明の日から5日程経った頃。

西条司令から臨時ミーティングのお知らせがあった。

兄妹全員が、前日に告知されていた。

私は兄達が部屋を訪問した時に知った。

4日、5日も引きこもる私に、兄達は心配した。

特に勇希兄ちゃんからは散々文句を言われた。

「いい加減にしろよ」とか「気を遣ってんだぞ」とか…。

2人は兄ちゃんが行方不明でも、ピンピンとしていた。

私と同じく、【パステージュ】の中で電撃の威力に縛られた筈なのに。

それもそうか。

2人は武人兄ちゃんから、あの問いかけをされていないから…。

わかりきった私は、兄達とあまり会話をしなくなった。

ミーティングには、モニター閲覧を利用すると伝えておいた。

勇希兄ちゃんはこの…と手を出しかけていたが、和希兄ちゃんが腕で止めた。

和希兄ちゃんは了承し、司令に伝えておくと言った。

勇希兄ちゃんを連れて、私の個室から立ち去った。

臨時ミーティングの開始はわかりやすかった。

開始15分前に個室内のモニター画面に電源が入った。

掛け布の隙間から、私はモニター画面の映像を確認しようとした。

ミーティングのメイン会場は統制制御室が大半だから、その部屋が映るかなあと思った。

予想の通りで、制御室のど真ん中付近で西条司令とジェームズさんが立っていた。

後ろ向きの姿だから、今回のミーティング前の調整でもしてるんだろう。

ま、画面をじっくり見る事はないけど。

音声はちゃんと流れるから、耳で聞き取れるなら問題はない。

話が長くなければいいけどね。

たまに掛け布の隙間からチラチラと室内の様子をチェックしていた。

兄達2人がちょうど着いたようで、西条司令と聞き取りにくい会話をして
いた。

両者の間に、笑顔なんてなかった。

☆☆☆

敬愛するディムへの相談を終えた宗太郎は、即時〔ラストコア〕全スタッフに
向けて、ミーティングを開く予定を入れた。

通信を切ってから、真っ先にに事務局長のジェームズ、技術局長のアレックス
に連絡した。

2人共宗太郎の指示を承諾し、各々の部下達に伝達を始めた。

白井兄妹にはアレックスから訓練スタッフへと順次連絡を入れた。

それがミーティング前日。

数日間訓練に不参加だった未衣子には、2人の兄が直々に伝えに行った。

未衣子の引きこもりは解消されなかった。

個室内のモニターで聴くという事実を、和希は宗太郎に報告した。

隣のジェームズは痺れを切らしたが、宗太郎はこの報告を軽くあしらった。

本部の最高責任者には、1人の女の子の精神状態を気にかける余裕はなかつ
た。

早急に武人が抜けた〔ラストコア〕の今後について、対策を検討しないといけなかったからだ。

臨時ミーティングの開始はスムーズに行われた。

スタッフ全員が疑問を抱かず、素直に宗太郎の指示に従った。

宗太郎がミーティングの場として指定していた統制制御室は、彼の周り半径５メートルより先は混み合っていた。

壁にのめり込まれたモニターにも、集まれなかったスタッフの面々が映し出されていた。

もちろん、個室にいる末衣子も。

時間が経ち、武人不在の臨時ミーティングが開始された。

「全スタッフ諸君。忙しい中、ミーティングの開催に快諾した事に感謝する。」

宗太郎が統制制御室のど真ん中で言った。

「そして、黒川武人の拉致について、誠に残念な結果となってしまった。」

この発言で、俯いた者がちらほらいた。

握り拳を作っている者も存在した。

笑いの表情を見せている人間などいなかった。

宗太郎は進言を続けた。

「黒川はいない。もはや帰還も果たせない可能性も出てきただろう。だが、我々〔ラストコア〕は諦めてはいけない。私は黒川失踪後、ディム・カミング元中将与密談を交わした。」

中將が！？周りが騒然とした。

名前を聞いただけで驚いた者もいれば、知らないで近くの人に聞いた者もいた。

「静かにしろ！」

宗太郎の隣に立つジェームズが黙らせた。

「中將は今隠居の身だ。表舞台では活躍していない。だが、我々にヒントを与えて下さった。」

アレックス、と宗太郎は名指しした。

呼ばれた本人は統制制御室にはおらず、自分の研究室のイスに座っていた。

もたれかかる姿がモニター画面に映し出されている。

アレックスはわかったと返事し、自分の側にあったキーボードとマウスに触れた。

マウスを動かすと、統制制御室の様子が変わった。

照明が薄らと暗くなり、宗太郎の背後から白い長方形の巨大なホログラムが現れた。

ホログラムなので、この長方形は通り抜ける事ができる。

今はそんな用途で表示されているのではなかった。

宗太郎が伝えたい内容は、このホログラムの中身だった。

見た目はビジネス用のリストを巨大化した物だ。

ディムが入力した英語を読める者は、このリストの正体を掴んだ。

人物名らしき固有名詞と、出身地の惑星圏。

太字の明朝体から窺える、《HR》のアルファベット。

「このリストに記載された奴から引き抜くって事でしょうか？」

リストの解説した者が宗太郎に質問を投げた。

「中將からのリストは、あくまで参考程度だ。記載のない未知のHRもいるだろう。もし地球に襲い掛かった時、1名だけでも引き入れようと思う。」

解説した者とは違う、怯えた姿を見せた者が宗太郎に聞いた。

「あの…。どうやってHRを引っ張るんですか？対抗馬は【バスティーユ】しか…。」

「対抗馬は残している。」

宗太郎は反論した。

ええ…とどよめくスタッフ達。

中には隣の人間と顔を合わせる者もいた。

この時でもジェームズは専ら静粛の勧告役だった。

「地球に来て間もない、土星圏の王子とかですか？」

これを言い出した者はリュートに視線を注いだ。

リュートの隣で腕を掴んで支えていたサレンが、名指しした者を睨みつけた。

少し身を乗り出しそうになったのを、リュートは手ぶらの片手で止めた。サレンは俯いて、リュートの後ろに半歩下がった。

宗太郎も2人の土星人を遠目から見ていた。

発言をする時は視線を戻し、真正面を向いた。

「お越し頂いた王子達も、立派な戦力になるだろう。だが、我々には隠された兵器が残されている。最新の宇宙船、[天海号]だ。」

本日、3度目のざわめきが起きた。

知らないと言を傾げる者もいれば、正気なのかと疑う者もいた。

「本来なら、試運転と微調整を済ませてからの予定だったが…。」

『そりゃあ、ざわつくだろう…。しかも宇宙船だぞ？』

自分の研究室でため息をつくアレックスが言った。

「宇宙船って、ロボ等の機体を収容する移動機関ですよ？戦闘ではあくまで、支援に徹する体制を取りますよね？」

ざわつく周辺スタッフの1人が尋ねた。

これでざわめきは一旦収まった。

宗太郎は戸惑いを見せずに、正直に答えた。

「[天海号]も宇宙船だ。本来の目的通り、宇宙進出が決定した時に稼働する予定だった。だが、今回は緊急事態だ。使える手段は考慮しなければ、いずれは[ラストコア]全体の崩壊に繋がる。」

この発言で、スタッフの一部は唾を飲んだ。

宗太郎は左手をあげた。

モニター越しのアレックスはそれに反応し、キーボードとマウスを動かした。

宗太郎とジェームズの背後のモニターに、数枚の画像が並べられた。

どの画像も、宇宙船の外装と内部構造だらけであった。

外装メインの画像は、搭載された武装を披露するシーンしかない。

半数以上が、武装を曝け出した宇宙船の画像で埋め尽くされた。

「[天海号]はかつての宇宙船と異なり、単体での戦闘行為が可能だ。HR相手ならば厳しい戦に発展しかねないが、何も講じないよりはマジだ。だから、今後とも協力を惜しまないでほしい。」

宗太郎はスタッフ全員にお願いした。

スタッフ達はむう、と何か文句を言いたげな雰囲気だった。

直接言わなかったのは、彼ら自身に代替え案が浮かばなかったからだ。

宗太郎本人もスタッフ達の気持ちを汲んだのか、不安そうな表情をしていた。

「[天海号]の詳細は、各部隊に順次公表していくようにする。それまで待つていてくれ。」

宗太郎の告知宣言の後、すぐに解散が伝えられた。

統制制御室に集まった者達は皆、モニターと反対側に位置する出入口へ歩いた。

モニター越しのスタッフ達は通信を切断した。

統制制御室は、宗太郎とジェームズ、在中するオペレーター役以外は去って行く、筈だったのだが。

「西条司令、お話があります。」

土星圏ニコソからの訪問者2人は、立ち去らなかった。

「すまないが…。【天海号】の件はシークレットな部分も含む事項だからな。」

「いいえ。そちらの事項とは別件の話です。」

サレンは前に出て、きっぱりと言った。

隣のリュートは、目を逸らしたままだ。

「アレックスさんには事前に通達しましたが、私達は母星に帰らせていただきます。」

サレンの瞳に、躊躇いはなかった。

ジェームズは猛反発した。

「ちょっと待て！黒川の対決と引き換えに【ラストコア】に協力すると約束しただろう！」

「アレックスさんは話をつける、と言いましたよ？」

「今の司令の話を聞いていたか！？黒川のいない今、我々の戦力はガタ落ちなんだ！少しはやる気になってもらわんと困るぞ！」

「土星圏の私達には、関係ありませんから。」

ジェームズは反論する若者にイライラが募っていった。

サレンは彼の怒りに対して、怖気付く様子はなかった。

宗太郎はジェームズに代わり、目の前の若者に鋭い眼差しで言った。

「すぐに帰還準備をしろ。」

「宗太郎！」

「戦意喪失者に、これ以上協力を請うても無駄だ。」

「ありがとうございます。」

サレンは礼をすると、リュートの手を引いて退出した。

土星圏の王子達は、2日待たずして地球を去った。

★★★

引きこもりがちのクーランであったが、『自慢の息子』を捕獲してもらってからは研究所内を歩くようになった。

自室のコンピュータと睨めっこしていた時と大違いで、生き生きとしていた。

そんな彼が現在、司令室の役割を果たす大部屋に立っていた。

司令室なのに1人しかいない。操縦も指揮系統も全て機械が担う為、オペレーターのような人材は必要ないのだ。

中央奥のコンピュータ群に縁を掴んでクーランは立っていた。

彼の視線は目の前の巨大モニター。

4つに均等に分割されており、1名ずつ配置された構図になっていた。全員が、クーランと向き合う状態になっていた。

左上に金星圏メイスの一部隊を率いる兵士、ピウス・エクステラ。

金色の綺麗なロングヘアと端正な顔立ち、地球人の美形を彷彿とさせた。

右上に土星圏ブラドンの一賊団を率いるトカゲ頭の『オス』、トンケ・スパークス。トンケの隣には賊団の参謀であるグロスが怯えた様子で構えていた。

左下には木星圏フォトムの巨人、ヒスロ・インフィ。

クーランの発明した技術により、彼は強固な線で縛られていて、不服そうにしていた。

右下には海王星圏ミラニアの麗人、ニシア・ペディルド。

水を滴る黒色の長髪と女性と見間違えられる美貌を持つのだが、性別は『オス』である。

巨大モニターには映ってないが、既にクーランの少し斜め後ろにロッドを片手に持った少年らしき《オス》。

天王星圏スイルのマルロ・ヒーストンが立っていた。

これらの他星人は皆、クーランが集めた「宇宙犯罪者」と呼ばれる類の者達である。

それが今回、全員を集結する形となっていた。

「…よく集まったもんだなあ。ま、一部は強引に寄せただけだな。」

クーランは顎髭を摘む行為を繰り返した。

強引、というワードにヒスロは眉間に皺を寄せた。

普段でさえ厳つい表情の彼だが、クーランの言葉の棘が心に刺さったのだろう。いい気分になれないのは確かであった。

『全員が集まったのですか？』

「エスト以外はな。奴は処分したさ。」

『可哀想に。生物形態の彼は可愛いから、相手してあげたかったわ。』

「やめとけ。つまらん夜を過ごすぞ？」

ビウスとニシアの発言に、クーランはそれぞれ返した。

H R側からも、宇宙船等のモニターから人数を認識できたが。

ビウスは高貴な兵士で真面目さがあり、念の為尋ねていた。

『チビもこっそり付いてんのか。なら重要な話なんだな！早くしてくれ、こっちは忙しいんだ！』

『トンケ様、まだ何もおっしゃってませんよ！』

グロスが必死に落ち着かせようとする、トンケは彼を鋭く睨め付けた。

ヒッ！というグロスの怯える様は、司令室のモニター画面でも捉えられた。

マルロはムスツとしていたが、何も言い返さなかった。

自身の体格がチビである事は認めていて、貶されていると思いが立った。

だが口論に発展するのが馬鹿らしくなって、悪口に目を瞑るようにした。

「…じゃあ、本題入るからな。」

各陣営の些細な揉め事は、クーランのこの一言で静まった。

「ドンパチは後でしてくれよ。ま、飛んでる最中にすっかり忘れていたのかもしれないがな。」

彼の発言が琴線に触れたのか、突っかかりかけた者もいれば、マルロの様にムッと表情を微妙に変えた者もいた。

「今回、全員に来てもらった理由はな…方針を変えるからだよ。」

『方針…ですか？』

ビウスの声だった。

クーランはニヤリと笑い、続きを述べた。

「お前達、今までご苦労さん。契約はここまでだわ。」

『なっ…！』

背後のマルロ含め、クーラン以外の聞いた全員の表情が一変した。

「ヒスロ。お前さんも解放してやる。自由に暴れてもいいぞ？」

『ちょっと待ってください！契約を止めるという解釈をしていいんですか！？』

グロスが慌てるように尋ねた。

トンケの睨みつけが更に鋭くなっている。

名指しされたヒスロに至っては、八つ当たりのようにもがき足掻いていた。

だがクーランの表情は、一切変わらなかった。

「元からお前達はつなぎの役割だ。ラルクが戻るまでのな？理屈でもわかるだろう？他人の子供より自分の子供がかわいいと思う奴が大半だってな。」

『ラルクも、本来は貴方の子供ではないでしょ？』

ニシアは水槽の縁に肘から下を密着させた。

ニシアも驚いた内の1人だが、彼は口と目を少し開いただけ。

すぐに平静を装うように、女性のような美しい笑みを浮かべた。

余裕があるのか、動揺を見せつけないでいたのかはわからない。

「コイツは実親がいないからなあ。皆同じけどな。」

クーランは左手の親指で何かを指差した。

4人の【宇宙犯罪者】を映し出した司令室のモニター。

前方奥の他に、左右にも張り巡らされていた。

前方奥のよりも少し小さめの画面だが、映像の画質は鮮明だった。

ライトグリーンの色が強めで、単一カラーに見えなくもない。

しかし、れっきとしたカラー映像だ。

明るい緑は保存液の色だった。

保存液のおかげで、中の人型の生物の輪郭はぼやけて見える時があった。

誰が潰けられているのかは判断はつく。

黒髪の地球人に似た生物、クーランが『ラルク』と呼ぶ《オス》は、瞳を閉じて静止していた。

空気の泡が下から上へ昇るのと、彼の長髪が広がりを見せる以外、動きはなかった。

クーランは左手を下ろし、突然話を切り出した。

「今、《自慢の息子》は再改造を施している。

俺の技術力で、奴はメキメキと力をつけるだろう。そこでだ。今まで協力してくれたお前達に、最後の希望をくれてやろう。」

『最後の、希望…?』

ビウスが目を大きく開いて言った。

「そうだ。俺との契約が切れた所で、お前達は行く当てもなく彷徨うだろ？

【宇宙犯罪者】であるお前達を、マトモな他星人が匿う訳がねえ。」

『[宇宙犯罪者]のレッテルは一部の勝手な戯言でしょう!』

「黙って聞け。」

うっ、と遮られたピウスは吠えるのをやめた。

ニシアはクスッと笑った。

「頭の悪いお前達の為に、簡潔に言ってやる。

《ラルク》と勝負しろ。勝負して《ラルク》を倒せ。コイツの生命が途絶えたら、勝ちを認めてやる。そしたら、待遇を考えてやるよ。」

発言の終わりに、クーランはニヤリと笑った。

彼の後ろのマルロ以外、全員が内容に驚いた。

ところが、画面越しの4名の[宇宙犯罪者]達は、すぐに喜びの表情に変わった。

『なんだ!単純にラルクを倒せばいいだけってか!最初からそう言えよ!』

「すまんね。頭を使うと思考がごちゃごちゃになるんだわ。」

『楽しみねえ…。久々に私の活力が目覚める時が来たわ。』

「だったら俺の相手もしてくれよ。溜まってんだわ。」

『倍の料金を頂戴できるならね。』

ニシアはクーランの軽い誘いを、遠回しに断った。

あしらわれる事自体わかりきっていたので、クーランは特に気に留めなかった。

「競技場は用意する。観客も多く入れる。せいぜい、バトルを楽しめよ?」

じゃあ、解散。クーランの一言で、前方奥のモニターの映像が次々と灰色の砂嵐に変わっていった。

何の不满、不平もなく、4名の[宇宙犯罪者]は回線を切断した。

「…ばーか。そんな楽に契約更新なんかするかよ。」

クーランは小さく呟いた。

左手のやや小さめのモニターへ、体を向けた。

「禁忌を犯した以上に、手術は施してんだ。発声機能の喪失代わりに、肉体の強化に専念した。ポロポロだったからなあ。地球で何やってたんだか。」

クーランは独り言を喋っていた。

近くにマル口が残っている事は、気づいているのに。

マル口もいつもの無愛想な表情で見つめるだけだ。

「実戦データは取りたいし、奴らの最後には相応しいだろう。長生きしておくれよ？愛しの《自慢の息子》よ。」

囁くようにクーランが言うと、彼は高笑いをして、画面を切らずに司令室を後にした。

まだ立ち止まっているマル口は無視して。

司令室の照明はついたままの状態だった。

クーランの後にマル口はついて…行かなかった。

消えていないモニターの映像を、集会から立っていた位置で眺めていた。

その視線は冷ややかでもあり、哀れみもあった。

この他に、彼の心には恐怖心が勝っていた。

（最強の男と、最恐の研究者に挑めと言うのか…。俺達は、生き延びれるのか？）

マル口は心臓部分に痛みを感じた。

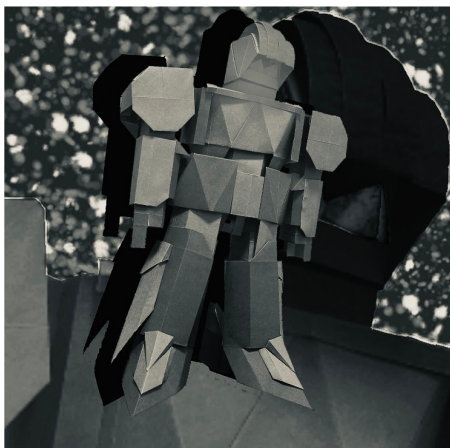
（俺は奴に深入りしすぎたかもしれない。ラルクに本気で挑めば…同朋が多く失われる。このままでは、奴の思う壺だ。）

マル口は一瞬だけ目を閉じた。

心を落ち着かせるために。

司令室に用事のない彼は、何の後始末をせずにこの部屋を出た…。

3・降下の日



引きこもるのが、しんどくなってきた。

武人兄ちゃんが拉致されてから、ちょうど1週間が経過した。

臨時ミーティングは映像を観ずに、音声だけ聴いていた。

掛け布に包まったままで。

内容は大まかな部分は把握していた。

…小さなメモ帳に、ペンで走り書きをしていた。

『他のHRないし〔宇宙犯罪者〕でもいいから引っこ抜く』

『最新型の宇宙船を使う』

走り書きだから字は汚いけど、読み返しても支障がない程度に書き方に注意を払った。

聴き取り作業をしていたら疲れた感じになって、包まった状態で前のめりに倒れて寝込んだ。それはもう、ぐっすりと。

でも、寝過ぎてても疲労が溜まるだけなんだなあ。

時間が遅く感じるから、退屈になるし。

武人兄ちゃんが存在していた1ヶ月は、目まぐるしいスピードで時間が経過していたのに。

今は、時計の針がちっとも進まない感覚がした。

だから1週間目のこの日、私はベッドから離れた。

くしゃくしゃになった掛け布を綺麗に伸ばして。

身だしなみ用の簡易的な鏡で髪の毛を整えて。

服も着替えてから、私は自分の個室を出た。

時刻は午前6時頃。

多くのスタッフさん達が起きる時間帯である。

7時ぐらいから食堂で、朝食のメニューが並ぶ。

まずは腹ごしらえかな。

食堂が混み合う時間は6時半を過ぎた頃だし、食堂まではゆっくり歩こう。そう思って、なんとなく通路を歩いていると。

「…未衣子？」

声を掛けられた。

名前を呼び捨てするのは、武人兄ちゃんと…あと2人。

私の兄達、和希兄ちゃんと勇希兄ちゃんだった。

2人は私の後ろに立っていた。

私は名前を呼ばれたから、後ろを振り向いた。

「おはよう。兄ちゃん達。今からご飯食べに行くの。」

「もうメンタルの方はいいのか？」

「何言ってるの？体調はそこまで悪くないし、引きこもっても退屈だし。今日から復帰するよ。」

そう言った私は、前を向いて歩み出した。

「今日は平日じゃないでしょ。訓練は朝から出るね。」

兄達に聞こえるように声を少し大きくして言った。

すると、兄達が私の両脇まで走ってきたんだ。

勇希兄ちゃんは私の肩を掴んでいた。

すぐに払いのけたけど。

私と横に並んだ所で、2人は歩く動作へと切り替えていた。

「へへ、やっと復活したんだな。」

復活？そうかもしれないな。

だって急用以外、私は個室から全然出なかったし。

「俺達もついている。久々の訓練だから、徐々に普通に戻るよう、支えていくよ。」

和希兄ちゃんは相変わらず優しいなあ。

引きこもり時の私を叩こうなんて考えなかったし。

2人の兄達は私が元気を取り戻した、と喜んでいる。

掛け布に包まってふて腐っていた人間が、掛け布無しで外に出て歩いているんだから。

でも、私の本心は…別に元気ではない。

復活とか復帰とか、微塵も思っていない。

訓練も気を遣わず、普通にすれば良い。

引きこもりは私の自業自得。

私には、やり残した仕事が残っていると痛感したんだ。

武人兄ちゃんが敵に拉致されたんだったら、取り戻さないといけないうて。

個室内で憂鬱に浸っている暇なんてない。

短時間でも、兄ちゃんが敵に洗脳されているかもしれない。

だから、急がないと。

実力をつけて、強くならなきゃ。

☆☆☆

クーランが主である[レッド研究所]は、研究機関の枠内に収まらなかった。

実験室や制御室以外にも、敷地内には様々な施設が存在した。

賑わいが盛んな競技場も、[レッド研究所]の施設内に設けられていた。規模は地球上の、陸上の競技場と変わらない大きさであった。

地球の公園の大木並みの高さで普通と言われるHR達にとっては、この競技場は狭い。

観衆もスタンドの柵ギリギリまで詰め込まれていて、HR達からの被害を受けないか心配になるだろう。そこはクーランの技術力で、ライン上に半透明のバリアを瞬時に出す機能を搭載しているらしいが。

観衆の声は大きかった。応援の声が少しあるだけで、殆どが怒声・罵声の負の感情ばかり爆発していた。

野次馬だらけである。

柵の内側のリングに立つ生物形態のHR達には、罵倒の嵐に晒されても気にしなかった。

元々、滅ぼした星の民からの怨みも買っている者達。

罵倒も慣れていた。

競技場のリングに立つHRは4名。

【レッド研究所】の司令室でクーランが呼び寄せた者達。

ビウス、トンケ、ニシア、ヒスロが1メートルずつ離れて立っていた。

「おい、メスっぽい化け物。」

「化け物は失礼よ。礼儀を弁えなさい。」

トンケの言葉が気に入らないニシアは忠告した。

「どうせロボ形態になっちったら化け物とか怪物とか関係ねえだろうが。」

「その発言が失礼だと申しているのではないのか！」

「オメーには聞いてねえよ。貴族風情は引っ込んでろ。」

「全ての貴族が優雅に生きていると思うな！」

距離が少し離れていても、バチバチと火花が散っていた。

スタンドの柵には2ヶ所、競技場の外に繋がる出入り口がある。

1ヶ所は4名のHR達が入場した出入り口。

ちょうど反対側の出入り口からは。

「おーおー、早速乱闘か？燃え上がるんだけどよ、今は後回しにしてくれや。」

競技場の持ち主でもあったクーランが入場してきた。

今までずっとだんまりを決め込んでいたヒスロが、暴れ出そうとしていた。

「ぬう！貴様…！」

ヒスロの身体中には、未だに鋼の如く強固な線が雁字搦めになっていた。移動そのものは車輪付きの台で自動運転をしていた。

「落ち着けよ。試合を始める頃合いには解除してやるから。」

ヒスロの陰しい表情に対しても、クーランは怖気つく様子はなく、普通の態度で接していた。

「…後ろが、奴ですか？」

ビウスが尋ねた。

聞かずとも答えは出ているようだが、あえて彼は聞いた。

「おう。民の連中をビビらせないようにフード着させているがな。それでも怖がらせているがよ。」

「被らせる必要はないんじゃないの？私はときめきが止まらないわ。」

トンケの時と態度が変わって、ニシアは笑顔で期待を寄せていた。

ワクワクして喜びを隠さないのはニシア。

ヒスロは興奮で怒りを露わにしている。

ビウスとトンケには…背筋が凍りつく感覚に戸惑っていた。

「何だ…おい貴族、奴に違和感を感じねえか？」

「貴様もか？違う雰囲気を漂っているとは、私も感じるのだが。」

「そりゃそうだわ。今までの《息子》に、改造手術を重ねているんだからな。」

「「！？」」

トンケとビウスの声は、クーランに丸聞こえだった。

2人は冷や汗をかいた。

自分達が恐怖を感じていると見透かされてるかもしれないと思ったのだ。

ここでトンケは、最初から抱いていた疑問をぶつけた。

相手はニシアではなく、クーラン本人に。

「おいクーラン、質問があんだけどよ。」

「脳みそがイカれたお前がか？まあ、純粋な悩みなら聞いてやるよ。」

クーランから自身の知能を馬鹿にされたように言われたが、気にする余裕がトンケにはなかった。

「ガキの姿がねえんだけどよ。逃したんじゃ、ねえんだろうな？」

質問の最後に向かって、トカゲ頭の彼の両目が細くなった。

逆に睨みつけて、クーランを怯えさせようとしていた。

そんな試みをして、幾多のHRを使役したクーランには効果はなかった。

ああ、と思い出したみたいに答えた。

「マル口の部隊はな、地球に向かわせたわ。」

「何！？」

「最新鋭の地球産ロボの首を討ち取ってくると約束してな。」

クーランの答えに、4名のHRは驚いていた。

一番大袈裟に驚かなかったヒスロが一言放った。

「弱者の考える事だ。勝手に散ればよい。我は興味がない…。」

無言になりかけた所で、ヒスロは身体を大きく跳ねた。

拘束されているにもかかわらず、車輪付きの台が凹まないか気になるレベルの破壊音を出している。

「早く、手合わせさせよ。」

ヒスロは元々低音の渋いボイスが特徴的だったが、今の発言時のボイスはさらに低音に磨きがかかっていた。

重低音のボイスは対象者に脅しを加えるには十分な行為であった。

こちらもクーランには効き目はない。

しかし、言われた当の本人もこれ以上の雑談には飽き飽きしていた。

「わかったよ。すぐに拘束解いてやるから。戦闘以外ではおとなしくしとけよ。」

クーランはポケットから専用のリモコンを取り出し、ボタンを押した。

ヒスロの拘束に使われた線はバラバラに解き、地面に散らばった。

ヒスロは車輪付きの台から飛び降りた。

ドオンと地割れを促すような轟音が響く。

ヒスロの行動を見た観衆は怖くなり、野次を飛ばすのを止めてしまった。リング内で反応を示したのはビウスとトンケで、彼らも驚きの表情をしていた。

流し目程度で済ませたのは、ニシアとクーランとフード男のみだった。

「…被害拡散しすぎもヤバイから、とっととやるか。」

冷静を保っているクーランに、ヒスロを除く3名のHR達は視線を向けた。

「ルールは簡単。コイツの息の根を止めた奴が勝利だ。誰が止めたかは俺が判断する。勝利した者には、今まで通りの契約を約束しよう。」

戦闘が始まりそうな予感をひしひしと伝わってきたので、クーランは簡潔に説明した。

脅威的であっても、クーランは一研究者でありHRではない。

戦闘をフード男…ラルク・トゥエラーに任せて、リングの外に避難したかった。

「じゃ、早速おっ始めてもいいぞ。」

「ちょっと待て！ルールはそれだけか？」

「1対1の形式でなくともよろしいのですか！？」

トンケとビウスが聞いた。

とっととリングから去ろうしていたクーランは歩みを止め、顔だけ後ろを向いた。表情は笑っていた。

「好きなようにやりあえばいいさ。ラルクだけじゃ足りねえなら、最後の1人まで争っても構わねーよ。」

言い切った彼は、入場した出入口へ歩いた。

同時に、ラルクはフードを脱ぎ捨てた。

★★★

火星圏タレスから離れた位置の宇宙空間。

汎用型の宇宙船〔スイルシルバー〕は、他の同種の宇宙船と共に移動していた。

白系統の宇宙船一行は、全部同じ方角を保っていた。

マルロは〔スイルシルバー〕のブリッジではなく、自分の専用の個室で書物に目を通していた。

書物、というより資料集と言い換えるべきだろうか。

冊子や巻物等の紙媒体の他、タブレット端末のような機器、モニターに飛び込むデータまで…。

情報収集の為に資料集の幅が広がった。

これだけ膨大な量の資料集が個室の机の上に散らばっているのに、内容のテーマは一貫して同じであった。

それは宇宙船一行が向いている方角の延長戦上に位置する、青と緑の惑星が関係していた。

アルファベット文字の崩した形の文字から、記号のような象形文字まで…資料集の文字表記も様々だった。

どれもこれも、日本語に翻訳すると《地球》の言葉があがってくる記事が並びばかりだった。

《地球》の環境、《地球》の文明…《地球》にまつわる教養や知識の資料集がたくさんある。

だがマル口はこれらよりも、注目して目を凝らして読んでいる資料があった。

〔ラストコア〕、そこで産み出されたロボの【パスティユ】関連が記載された資料である。

こちらは常に更新されるからだ。

マル口は現在、数枚のA4ぐらいのサイズの紙で目を通してている。

紙の文字は機械のインクで印字された、整然と並んだ美文字である。

実はこの資料は、〔スイルシルバー〕の射出する小型偵察機からもたらされた衛星データによるものである。

衛星データの情報の更新の頻度は高い。

最初の情報だらけで印字された紙の色は綺麗な白で、汚れなど一切なかった。

（…まだ宇宙船や有人仕様のロボが隠されている。技術者達の会話のみでは鵜呑みにできない…。俺の部隊の偵察機では、機能が制限されている…。）

『隊長！準備が完了しました。』

モニター画面に誰かが割り込んだ。

「ギリギリまで詰めたか？」

『はい。地球の太平洋上に降下できます。』

「仕留めるのは〔ラストコア〕周辺のみでよい。それで原始地球は自滅の道を辿るだろう。今のあの組織に《ラルク》はいないからな。」

マル口は綺麗な資料に目を通したままだった。

通信相手の部下は気にしていない。

自分達の隊長が熱心に情報収集に専念していると信じ、気に留めなかった。

「[ラストコア]を落とし、【パスティユ】の首をクーランに持ち帰る。同時に、太平洋の海底に我々の拠点を作るんだ。地球は、水の資源が豊富な筈なんだ…。」

マル口は宣言のつもりで言い放った。

マル口や彼の部隊・【ヒーストン】の集団は、スイル他天王星圏の星々の民とロボのハーフ集団である。

HR、詳しい名称の《ヒューマニティー・ロボティクス》は、生物とロボ等の機械のハーフの子供をさす。

機械側の当事者にあたるロボ達に生殖機能を搭載してから、機械にも生命を宿すようになった。

搭載済みのロボ達の暴走により、メスの生物達が危険に晒された。

それがHRの誕生に繋がったのだ。

また、マル口達が産まれた天王星圏や、ニシアが産まれた海王星圏の星々は、元の惑星の影響を受け、表面が氷に覆われた星々ばかりであった。

だから、空気を吸うより水中を泳ぐ方が心地よかった。

水の外で活動するのは、マル口のHR形態【チタン・キュレン】や【ヒーストン】の仲間達全員が、水中以外の行動も可能だからだ。

それは彼らの成長段階で、大規模な改造を施された過去があったから。

矛盾してそんなこの仕組みは、マル口達を生涯にわたって苦しみ続けてきた。

資料にずっと目を通していたマル口が、ようやくモニター画面と向き合った。

画面の隅っこに映し出された宇宙空間の簡易的な地図の変化を目撃して。

「地球には、あと1日程か？」

『そうです。』

「もう少し早めよう。不意打ちをくらわせるんだ。暢気にしてる奴らの動揺を誘う。」

『では…各宇宙船の速度を上げていきますね。』

「地球には大気圏の層が存在する。突入時の衝撃にも備えろよ。」

『わかりました。』

回線はここで途絶えた。

マルロは資料の書類をモニター前のデスクに置いて、左脇のタッチパネルで画面の中身を切り替えていた。

正面には地球の外観が映った。

地球の周りに、様々な数値の混じったデータが吹き出しのように散りばめられた。

（侵攻時に調査を進めよう。危機に瀕した時は撤退も図る。徐々に攻略すれば問題にはならない。）

マルロはモニター画面に釘付けになった。

【スイルシルバー】他、【ヒーストン】らの宇宙船数隻の速度は上がった。

☆☆☆

本当に、腹が立つ。何で、邪魔をするの？

【ラストコア】の基地全域に、警報がやかましく鳴り響いた。

敵襲のお知らせが何度も繰り返された。

【ラストコア】にずっと泊まり込んでいた私は、ペンダント型の《転送装置》でコックピットまで飛んで行った。

スーツも着用したのに。

ピンク色のジェット機のコックピット内に通信が入ったんだ。

いつもの操縦士さんから。

『未衣子さん？今回、君は降りてくれないかな？』

突然回線が強制的に開かれたと思ったら…。

開口一番がストレートすぎて。

「今警報鳴ってますよね！」

『鳴ってるよ？でも、待機して欲しいんだ。』

パイロットスーツ姿で準備万全なのに…。

「【パスティユ】はどうするんですか？【フラワー】にチェンジする時もありますよね？」

『オート操縦は可能だからね。』

「兄達も今回は乗らないんですか？」

『いや…あの子達は乗せるよ。』

私だけ…？何で？ずっと休んでたから？

でも私は『体調不良』って、ちゃんと理由は伝えているよ。

精神的に参っている場合も、立派な『体調不良』でしょ？

それに…私はつい最近復帰したじゃない。

「行かせてください。私はもう大丈夫ですから！」

『しかし、司令から直々に指示が出されているんだ。勝手に動かす訳には…。』

「武人兄ちゃんが来ているかもしれないですよ！」

『証拠なんてないよ！今は落ち着くんだ！』

私の声が無意識に荒げていた。

それが操縦士さんに伝わり、彼も声を荒げていた。

『どうしたんです？』

誰かが回線に割り込んだ。和希兄ちゃんの声である。

出撃に手こずっているからだろう。

「実は…。」

『すまない君達。連絡漏れだけど、未衣子さんには待機して欲しいと指示があってね…。』

『初めて聞いたぜ！？』

今度は勇希兄ちゃんも割り込んできた。

モニター画面の映像には、3人の男が映っていた。

連絡漏れて…。大事な内容なら真っ先に伝えるでしょ？

「行かせてください。私はもう普通に動けますから！」

『これは司令からの…！』

緊急時になると、通信回線の割り込みが頻繁になる。

アレックスさんからの回線も、もちろん飛び込んできたのだった。

『君達に緊急連絡だ。降下した敵の情報が明らかになった。今からデータを送る。』

アレックスさんの連絡どおり、モニター画面の一部に敵の姿が確認できる映像が流れた。

『…これは！？』

和希兄ちゃんが最初に気付いた。

『直近で戦闘経験もあるから、覚えているだろう？以前のデータから分析したところ…HRで【宇宙犯罪者】の1人である、マルロ・ヒーストンの部隊だ。』

解析が遅くなってしまったが、とアレックスさんは最後に一言付け加えていた。

『こいつらが、一体…。』

『以前の戦闘では、映像のHRとそっくりな奴らが多数いただろう？彼らはHR共通の特性である《同調性》の体現した部隊でな、集団行動をして戦闘に挑んでくるんだ。』

なるほど。武人兄ちゃんが連れて行かれたあの日。

映像の人と似たような小柄なHRが沢山いて…私達は集団攻撃で手も足も出なかった…。

元々、集団で攻めてくるタイプの敵だったんだね。

卑怯だなあ…と私は思った。

多分、兄達にも尋ねてみたら同じ答えが返ってくるだろう。

『未衣子。』

アレックスさんに詰め寄られた。

画面越しだから、威圧感はないのだけど。

緊迫感はひしひしと伝わっていた。

『アレックスさん？』

正体はわかっているはずの緊迫感に怯む事はないが。

彼が真剣に私を見つめてくるので、ちゃんと話を聞くように耳を傾けた。

『今度は失敗しても、挫けないな？』

技術局長のアレックスさんが聞いてきた問いは、シンプルだった。

そしてパイロットである私達にとっては、忘れてはいけない心構えでもあった。

「大丈夫ですよ。兄ちゃんを助け出すまでは、持ち堪えますから。」

私はスラスラと答えた。

アレックスさんは何も言わず、暗い表情で見つめていた。

無言の時間はほんの数秒だけ。

『今回、黒川は発見されなかった。君達の機体は最高傑作物の性能ではあるが、技能はまだ未熟だ。以前と同じく、軽めの囷として出してもらう。』

通信越しに作戦を簡潔に説明させられた。

『まさか…大ボスの存在のHRは…。』

『司令が臨時ミーティングで発表した宇宙船を使う。』

『え！？軽くしか触れてねえけど、宇宙船って本来は支援用なんだろう？』

『通常はそうだ。だが…最新鋭の宇宙船である〔天海号〕は…巧みなギミックが仕掛けてあるんだ。見ればわかる。』

アレックスさんにそう言われると、私達兄妹は何も話せなかった。

武人兄ちゃんのようなHRと対等に渡り合える宇宙船は気になるんだけど…詳細は秘密にされるばかりだ。

ただ、今は最優先で注意を払わないといけない課題がある。

大量のHRの部隊への対処で、彼にも囷として専念しろと言われた。

HRに囲まれた状態での合体は再び囷にはまる可能性が大だ。

なので輸送機で遠くに運んでから合体し、ロボの姿で戦闘を開始する手段を取った。

近辺のHRは、アレックスさんのAIロボがその場しのぎの防衛線を張ってくれている。

クヨクヨしてられない。

兄ちゃんに、一歩でも近づかないと。

★★★

アレックスさんの指示どおり、遠くで合体を終えて、敵の激戦地点まで飛んでいった。

【パスティーユ・フラワー】の状態を維持したまま。

大量の敵を一気に消化するには、やはりこの姿が手っ取り早い。

この考えは私も兄達もアレックスさんも同じだった。

地点までは難なくすぐに飛んだ。

映像を拝見したまんまで、敵の部隊は太平洋上の上空で滞空したままだった。

【フラワー】の接近を察知していたのか、一部が攻撃を仕掛けてきた。

【フラワー】同様に、片手持ちのロッドで魔法使いみたいに、光の弾を飛ばしてくる。

形は球じゃなくて立方体だけど。

角に刺さったら痛そうだな。

角じゃなくても…発光している弾だし、どっちにしても痛いかな。

なんて事を考えながら、弾の連打をバリアで凌ぐ。

今のバリアは強固に張った。

【フラワー】の装甲は無傷だ。

過剰に機体のエネルギーは消費されている。

大ボス・マルロが奥に控えているはずなのにこの体たらく。

私達は囃役として出してもらっているのだから、マルロに本気で相手しなくてもいい。

彼に存分に振る舞う舞姿を見せつけて、フラストレーションを高めさせるのが目的なんだ。

今回、土星圏の王子達のロボこと【ホーンフレア5 t h】も参戦していれば楽だったけど、彼らは帰ってしまった。

武人兄ちゃんとの対決後、リユート王子はかなり損耗しきっている状態だったからなあ。

主に精神的な面で。

だから、私達【パステュー】とアレックスさんのA Iロボで、この厳しい戦況を乗り越えなくてはいけない。

大ボス・マルロを引っ張り出すまで、A Iと協力して暴れまくる。

マルロの部隊のH Rは、どれも似たようなロボだらけ。

銀色に近い白色の袴のような上着を着た、小柄なロボが私達に押し寄せてくる。

この中からマルロを見分けるのは難しいと思うだろう。

だけど、アレックスさんからマルロと他HRの決定的な違いを教えてもらっていたんだ。

マルロのHR形態、【チタン・キュレン】という名称は西条司令から送られたリストで判明した。

この【チタン・キュレン】、実は頭部に金色の角が立っている特徴があったんだ。

ごく僅かな特徴を見極めるのが、今回の戦闘の勝敗の決め手となる。

マルロが出ない事には、司令も参加しないからだ。

最新鋭の宇宙船【天海号】は、マルロの登場が発覚した後に、海から這い上がるように出番を見せる計画を立てている。

【天海号】は、既存の宇宙船の、戦闘のサポートシステムも搭載しているが…単体で挑めるほどの武装も隠してあると聞かされた。

司令が専念できるよう、私達が手下達を落としていく。

【フラワー】は猛威を奮った。

ロッドを豪快に振り回して、淡いピンクの光の弾を沢山飛ばしまくっていた。

結果、エネルギーが枯渇するだの、バリアを維持しないと傷つくぞだの、サブパイロットの兄達から怒声を浴びさせられたが、いちいち気にしていなかった。

とにかく、この戦闘を乗り越えたい。

武人兄ちゃんを取り戻したい気持ちが、そうさせている。

ロッドの攻撃により、手下達のHRは爆発を起こし、次々と散っていく。

敵を示す、地図データの赤い光の点も、ポツポツと消滅していた。

赤い光の点の数も、一定数減った時。

とうとう、ターゲットを映像で発見した。

『角だ…角が見えたぞ！』

『え！？どこだよ！』

「勇希兄ちゃん、映像を切り替えて！カメラDよ！」

《カメラD》とは、【パスティユ】のアイカメラの一視点から撮れた映像を移す枠である。

遠距離で画質は粗い目だが、例のHRの頭部が金色で照らしている模様が映し出されていた。

『なんかよ…反射しているみたいでチカチカするぜ…。』

『首より下はほぼ白系統で染まったHRだろうしな…。眩しさを感じるよ。』

《カメラD》の枠の配置は、設定を変更しなければ…写真の2L版くらいの大さになる。

2人の兄達が揃えて目に悪そうと感じるから、余程キラキラしてるんだろう。

勇希兄ちゃんは拡大して確認したかもしれないけど。

私の指摘もあったし。

かく言う私も、マルロのHR形態【チタン・キュレン】の輝きにクラクラしそうになった。

気分が悪くなりそうな意味合いで。

でも、今の私はメインパイロットの立場である。

気分が悪いからって、避けてはいけない。

【天海号】はあくまでも宇宙船。海底からの浮上には時間がかかる。

囃役で手下達メインで相手するように言われたけど、心底納得はしていない。

武人兄ちゃんの拉致の件から、私の心はずっとモヤモヤしている。

兄ちゃんを連れ去ったHRにイライラして、執念がもの凄く強くなっている。

武人兄ちゃんの拉致で束縛させたのは手下達で、マル口は直接やっていないのは過去の映像記録で知っている。

それでも、私の怒りの矛先はマル口に向けられていた。

時間稼ぎ？違うよ。

【フラワー】と似たような武装をしてるし、本気でやっつけたい。

上昇するスピードを上げていった。

『ちょっ、未衣子！』

『いきなり加速を上げるな！』

兄達が通信回線で声を張った。私の異常な行動を察したみたいで。

でも止めたくない。

兄達が、【ラストコア】の皆さんが危ないって禁止しても。

こんな所でもたついていたら、いつまで経っても、武人兄ちゃんに会えないよ。

☆☆☆

『燃料エネルギー、補填完了。』

『搭載装備の試験動作、良好。』

【天海号】のメイン制御を担当するブリッジの照明は暗かった。

かと言って、暗闇で歩行が困難にはならなかった。

正面奥のモニターの薄暗い灯りと、備え付きのパネルやボタンの点々とした光が、視界を補助していた。

オペレーターや整備士らしきスタッフ達の飛び交う声。

【天海号】にまつわる微調整が行われていた。

あちこちで飛び交うから人が多いと思われがちだが、暗いブリッジには〔ラストコア〕の最高司令官である宗太郎1人しかいない。

残りは全て…〔天海号〕の外部からの通信回線である。

『オート操縦切り替えも正常です。司令の号令でいつでも浮上可能です。』

「わかった。直前までの調整に付き合ってくれてすまない。」

『最初はびっくりしましたが、手を打てるものは使っていないといけませんし。司令の指示でしたらついていきますよ。』

「本当に感謝する。」

話し合いに時間を割いてくれたオペレーターの表情は曇りがちだった。

お仕事モードのつもりで、笑みを欠かさずにいたのだが。

浮上の合図を出す直前に、宗太郎はオペレーターから打ち明けられた。

『今更、後戻りできませんが…。』

「…何だ。残した事があれば何でも言ってくれ。」

『では申し上げます。些細な心配事ですが…よろしいのですか？司令単独の乗船で…。』

「私が言い出した作戦だ。この船自体が戦闘機として利用するのに、君達部下を巻き込むわけにはいかない。私が倒れた時に、立ち上がってくればよい。」

宗太郎はオペレーターの心配事に、素直に答えた。

宗太郎とオペレーターが画面越しに向かい合っている時に、別の通信が入った。こちらもオペレーターの人間であった。

「どうした。」

『【フラワー】が勝手に飛び出しました！』

『ええっ！？』

対応していたオペレーターが驚きの反応を示した。

宗太郎は表情を変えず、冷静に報告者に聞いた。

「進路の予測はできているか？」

『予測どころか…マル口のHRを目視した瞬間に、一気に加速したよう
で…。』

「そうか。」

割り込んだオペレーターの報告内容に、宗太郎は相槌を打った。

話を聞く為にやや前屈みになっていた自分の姿勢を、真っ直ぐに正した。

彼の眼差しは、前へ向いていた。

「浮上を開始したい。動かしてくれ。」

宗太郎は普段より高めの声で、モニター画面のオペレーターや整備士達に頼んだ。

浮上の為の準備を念入りに進めていた彼らは反対の意を示す事なく、自分達の作業に取り掛かった。

『浮上を開始します。上昇時の衝撃に備えてください。』

〔天海号〕の底面には、幾つかの穴が存在した。

ブースターの噴射で海底の地面から離れて、海上へ、地上へ、大空へと登っていくのだ。

浮上の合図が出てから、一先ず宗太郎はブリッジの艦長席へと着席した。無駄に怪我を背負う必要はないと判断しているからだ。

海中では周辺の敵はいない。

中に潜り込んで来ていない事が、〔天海号〕の起動準備と浮上を成功させた。

クジラのように、海面から宇宙船の上部が姿を見せた。

〔天海号〕及び本来の宇宙船は多数のロボや武装や物資を格納する船であり、10階建のマンションやデパート4棟分の規模はある。

ひょっこり見せても、波はうねる。

周辺に島や大陸が存在すれば、津波で害を被せてしまう損失もある。

襲撃の連絡が流れてすぐに、住民の避難勧告の通達は済ませたが。

宇宙船が姿を見せてから、敵のマル口の部隊は戸惑いを隠せなかった。

『隊長！海中から宇宙船らしき物体が…！』

『何故感知できなかった！？』

報告を聞いたマル口は怒鳴ってしまったが、今はその行動が全く意味がないのを悟っていた。

だから、切り替えて宇宙船の浮上に備える体制を取らせた。

『足止めをしろ！外観に飛行を促すブースターがあるはずだ！それを狙え！』

マル口の指示を聞いて、宇宙船周辺の手下達は即座に攻撃した。

【ヒーストン】と呼ばれた部隊のHR達は、【チタン・キュレン】と見た目も武装も酷似していた。

左手のロッドを振り回し、白い立方体の弾を繰り出す。

その数は、数えきれない程大量に。

立方体の頂点から白い糸を生やして、立方体同士を繋げていった。

こうして精密な網が出来上がるのである。

精密な網は手下達が繰り出した光の弾がベースとなっている。

故に電撃の発生も起こる。

案の定、上半分まで姿を現せた【天海号】も、電撃の猛威に晒された。

ゆっくり上昇していた【天海号】だが、この震でさらに上昇速度が弱まった。

あとはブースターの破壊で、【天海号】は落ちるだろう。

マル口も手下達も疑わず、手下達の一部が【天海号】周辺に近づいた。

ここで、【天海号】が地球内で最新鋭の宇宙船という証拠が示されたのである。

電撃トラップが一気に破られた。

繋がれた光の弾は周囲に拡散し、ブースター狙いの手下達は被弾して落ちていった。

〔天海号〕は上昇を再開した。

☆☆☆

『待て！【バステューク】！』

マルロヘー直線に進めていた【フラワー】。

無我夢中で前進走行の操作をしていた私に対して、通信が入った。

西条司令が、険しい表情で私に視線を飛ばしていた。

彼は〔ラストコア〕のトップの人間である。

制止の指示が出たら、従うしかなかった。

【フラワー】は空中で一時的止まった。司令の話も聞かないといけないから。

『…止まったぜ…。』

『司令が乗り出せば…。』

兄達は止められたにもかかわらず、ホッと安堵の息を吐いた。

まあ…私が勝手に飛び出したのが原因だからね。

でも私の中の怒りは、まだ抑えきれていなかった。

理由は話してくれるかもしれないけど、イライラが募った私は強く尋ねていた。

「どうしてですか！マルロは…。」

『作戦通り遂行しろと言っただろう！それを遵守するんだ！』

司令の強い返答に、私達は反論ができなかった。

コックピットの下、スーツに覆われた太ももに目を落としていた。

バカだな、悔しいな。

私の頭の中は、反省と後悔と嫌悪で入り混じっていた。

『君達の実力であの部隊の隊長には抗えない。他の〔宇宙犯罪者〕に対しても同じことが言える。今は戦闘の経験を積んでいけ。僅かな行動でも、戦況が有利に運ぶ場合もあるからな。』

「でも…司令は今から…。」

『私は元々軍人だ。激しい戦場には慣れている。対H R戦にも、何度か交戦の経験がある。また、司令官の代わりならば用意も済ませている。たまたま、長く生き延びただけだ。』

反論とかじゃなくて、私は、私達は司令に話す事はなかった。

この中高年の男性は、覚悟を決めていたから。

『敵の数の削減のみ専念しろ。今は…君達が命を落とす時ではない。』

〔天海号〕のブリッジが薄暗いのか、司令の背景は黒に近い青色が広がっている状態だった。

だから余計に、上からゆっくり降りてきた白いロープの群れが映えるんだ。

ロープ達は真ん中で垂れ下がるような感じで降りている。

放物線を作ったロープ達の中に、司令は両腕を突っ込んだ。

司令から遠く離れた方のロープのみ、しっかりと握った。

まさか、〔天海号〕の隠された機能って…。

『天王星圏スイル、マルロ・ヒーストン！

原始地球代表として、我、西条宗太郎が貴様に闘いを申し込む！聞こえているなら答えよ！』

西条司令は上を向いて、マルロに対して叫んでいた。

すると…既に海面から離れた〔天海号〕に、金色の角が付いた白くて小柄なH Rが近くに降りてきた。

あれは紛れもなく、マル口のHRだった。

マル口のHRは〔天海号〕の正面に立ちはだかるように浮いていた。

対面する両者。

先に口を開いたのは、マル口のHRだった。

『宇宙船とかが直々に俺に戦闘を望むとは…。地球の技術力も大した事ないな。』

口ぶりからして、マル口は舐め切っていた。

短気な人なら、秒で彼に突っかかるだろう。

でも司令は司令らしく、落ち着いて敵のセリフを聞き流していた。

『評価は実戦で確かめてからでも、遅くはないだろう？』

『フッ…ラルクのような最期になるのを、後悔しない事だな！』

マル口のHR【チタン・キュレン】は瞬時に左手のロッドを振り回した。

白い立方体の弾が彼の周りから放出された。

弾は〔天海号〕へまっすぐ飛んでいった。

〔天海号〕は宇宙船で、マル口達の的になりやすい。

しかし…先程の網を仕掛けた攻撃時と違って、立方体は即座に弾かれた。

僅か数メートルという寸前のところで、〔天海号〕にバリアが張られた。

海面から離れた以上、〔天海号〕全体をバリアが包んでいた。

透明に近い膜のようだった。

『ほう…伊達に開発をしていた訳ではないとな。』

攻撃を弾かれたマル口はキレル事なく、バリアの技術には感心していた。

『まだ装備はいくらでもある。

仲間にも明かしていない機能を、今ここで曝け出す！』

『攻撃しか能のない連中と俺は違うぞ！お前には出し惜しみなんてしないからな！』

【チタン・キュレン】、2回目の放出を開始した。

これも…【天海号】のバリアで弾かれた。

だけど、マルロが慌てる様子はなかった。

【チタン・キュレン】の動きはまだ、ぎこちなくないから。

2人は互いに戦闘に集中している。

私達の出る幕は、しばらくないだろう。

ならば。

マルロの手下達をできる限り、減らしていこう。

司令がミーティングで話した作戦を、きちんと遂行しよう。

そうすればあとは司令がうまく、マルロを丸め込めるだろう。

武人兄ちゃんだけが…HRじゃないんだ。

兄ちゃんの救出の為に、できる事を確実にこなそう。

4・翻弄の日



【レッド研究所】内の競技場は、いろんな意味で賑わっていた。

良い意味と悪い意味の配分で言えば、かなり悪い意味の方が大きいだろう。

観衆は応援よりも罵倒の声が圧倒的に優っている。

リング内でHR戦を繰り返しているせいで、観衆の目の前のバリアにぶつかる頻度が高かった。

観衆に被害は及ばない。

だが危険は危険であり、被害を受けたと思えば加害者に文句を言う事はよくあるのだ。

罵倒はそれだけではない。競技場の観衆は一部を除くと、暇つぶしで観戦に来た連中ばかりである。

どちらの味方につかず、双方の粗を探してそれを汚い言葉で罵っていた。

今、怪獣のようなロボが…【ブラッドガンナー】の攻撃でバリアと衝突した。

トンケ・スパークスのHR形態【イント・バイアス】である。

彼は他のHRに対して、一番挑発的な態度を取っていたが。

「トンケ様！？」

【トンケ団】の智将であるグロスが叫んだ。

目に涙を浮かべていた。

トンケを心配するのは彼だけで、他の者は皆、野次を飛ばすしかしていない。

『怪獣のくせにボロいなあ！』とか、『いきがってた強さはどこ行ったんだ？』

とか…好き放題言っていた。

しかし、罵倒の声がトンケに響いていない。

【イント・バイアス】の装甲はボロボロだった。

あちこちにダメージの傷が刻まれており、体力も消耗。

トンケにはもう、立ち上がる活力がなかった。

あとは…【ブラッドガンナー】がトドメを刺すだけで2人の対決は終了する。

【ブラッドガンナー】はゆっくりと歩み寄り、右手のハンドガンの銃口を【イント・バイアス】に向けた。

「ト、トンケ様あ！」

観衆の最前列で見守っていたグロスが泣き出した。

彼は正気を失ってしまい、うわああと泣き散らかした。

周りの野次馬からうるせえ！と怒鳴られても、狂ってしまった彼は止まらなかった。

「落ち着きましょう、グロス殿！僅かな奇跡が残されているかもしれませんよ！」

取り乱したグロスの近くにいた高貴な騎士達が、場の混乱を抑えようと必死だった。

彼らはビウス率いる【エクステラ隊】の隊員達である。

「何をおっしゃいますか！貴方方のリーダーは戦闘に入っていないから、悠長な発言ができるんですよ！」

「ビウス様も後に控えております！」

「順序が違うだけで我々も条件が同じなんですよ！」

隊員達も必死にグロスと同じ状況に置かれている立場だと説明した。

観衆側に騒動が起きていても、戦闘は続く。

とうとう、【ブラッドガンナー】がハンドガンで…柵にもたれて立てない【イント・バイアス】に2、3発放った。

それはHRの生命機能を維持する《心臓部分》に照準が定まっていた。

そこをぶち抜かれたトンケは…息を吹き返す事はなかった。

ビウスの隊員達に抑えられていたグロスだったが。

賊団の長が命の終わりを迎えた時…さらに大暴れしてしまった。

腰に常備していたナイフを抜いていた。

周辺の観衆に向けて、無作為にナイフを振り回した。

突然の凶器に周りの観衆は後ろに引いていた。

グロス程ではないが怯え出した者もいれば、グロス相手にも暴言を吐いた者もいた。

観衆用のスタンド内は狭く、身動きが取りにくい状態。

ビウスの隊員達は小柄な盾で周りを固めていた。

だがグロスの暴走は止まらない。

隊員達の盾にはナイフで刻まれた傷が増えていった。

スタンドが狭すぎて、グロスから離れたい観衆は外側にぎゅうぎゅう詰めへと加速した。

銃声が轟いた。

グロスの右手で振り回しているナイフが、スルリと下に落ちていった。

握力が低下したからだ。

握力どころか…グロス本人の気力も抜けていった。

彼の魂は、もう戻らないだろう。

胸元にちょうど、銃弾の貫通した跡が存在していた。

撃ったのは銃撃戦が得意な【ブラッドガンナー】…ではなかった。

観衆の中に紛れた野次馬の1人が拳銃を発砲した。

銃口には細長い煙が上がっていた。

「迷惑なんだよ！小童トカゲが！」

撃った野次馬の1人は罵倒した。

動かないグロスの身体はうつ伏せになるようにして倒れた。

銃弾の跡からは血が溢れていた。

土星圏の賊団の智将なんてどうでもいい野次馬達が、彼の頭を掴んで外へ引き摺っていった。

野次馬達の喧騒は終わらなかった。

★★★

『これが…奴の強さ…？』

H R形態【シェーク・フローレ】に変身したピウスは驚きを隠さなかった。

彼とトンケ以外も、H R形態に姿を変えていた。

ヒスロは【アング・ウォール】に、ニシアは【スイム・ドラंक】に。

ヒスロのH R形態のおかげで、ピウスとニシアは無傷だった。

ヒスロは改造に改造を重ね、脳に異常をきたしていた。

だが闘争心は強くとも、多少の気配りはあった。

挑発丸出しのトンケに戦闘を譲り、残り2人のH Rを後手に下げた。

戦闘に挑む分には心も体も万全な状態に保っていた。

そうした方がいい事は、ヒスロにも判断がついていた。

今、ラルクの手によりトンケは生命機能を停止された。

観衆スタンドとリングを分ける柵に、【イント・バイアス】はもたれ続けるだけだった。

対して【ブラッドガンナー】の装甲に…傷はなかった。

3人のH Rは距離を取っていたので、遠い目でざっくり見た時はそう感じ取っていた。

ギリギリまで近づけば、多少の傷はあるだろう…と3人のH Rは思っていた。

トンケ、【イント・バイアス】には触れただけで物体を溶かす能力を持っていた。

近接戦闘を行った場合、トンケの相手側は機体もしくは身体の一部が溶ける。

勝ち取った者にも、少しの被害は及んでいるケースもある。

銃撃戦を得意とする【ブラッドガンナー】に、その能力は及ばなかった。

銃弾は引き金さえ引けば飛んでいく。

距離を縮めていようがあけていようが、弾は対象物へ向かう。

遠くへ伸ばせる銃を使えば、遠距離でもダメージは与えられる。

【ブラッドガンナー】は距離を離しながら攻めていった。

だから【ブラッドガンナー】の装甲の一部が溶けるような事態には至らなかった。

ラルクや他方面に挑発していたトンケだが、【イント・バイアス】には飛び道具なる武器を持ち合わせてはいない。

トンケ側が圧倒的に不利になり、ラルクの手により数分で片付けられた。グロスが慌てるのも無理はない。

『次は…どうする？』

普段からあまり喋らないヒスロは、基本的にゆっくりと話す。

彼は他のHR達に尋ねた。

『んー。私は後でいいかしら？』

ニシアが答えた。

彼も先程の戦闘を見ていたが、恐怖に怯える様子はなかった。

赤い人型ロボが頬杖をついているような状態になっていた。

『何故だ？』

ビウスが聞いた。

ニシアに戸惑う様子はなく、彼は普通に答えた。

『私、じっくり楽しみたい派なのよ。さっさとケリをつけたいとか、微塵に思っていないから。だから、最後でいいわ。』

フフフ、とニシアは言葉の最後に笑い声をつけた。

となると、次の戦闘の候補は2人に絞られる。

ビウスは次に、隣の超巨大HRに聞いた。

『ヒスロ殿は…行かれないのですか？』

『我とて決闘を申し込みたい。だがあのトカゲ頭がでしゃばり過ぎたせいで…我は引いたのだ。卑怯者は乱闘でも良いと言ったが、我にそのハンデは要らぬ。』

『ならば先を譲ります。思う存分挑んでください。』

ここで、ニシアが横槍を入れた。

『あら、随分と弱気ね？行くのが怖いかしら？』

ウフフ、とニシアはこの発言の後にも、笑い声をつけていた。

それを聞いたピウスは、自分の癪に障ったと解釈した。

イライラを募らせながらニシアに言い返した。

『貴様も後回しの選択をしたではないか！』

『言ったじゃない。私はじっくり楽しむのが大好きって。一緒にしないでほしいわ。』

ピウスに問い詰められても、ニシアの返事に焦りなど感じられなかった。

【シェーク・フローレ】の両手に握り拳ができた。

ピウスの怒りは頂点に達しているレベルだった。

ラルク戦に備えて、我慢しているだけだ。

『私とヒスロは変わり種のHR。最初から孤独だし何も怖くないわ。それに比べ…あなたは凡人。《同調性》で仲間達と行動している。1人では何もできない。』

ぐっ、と声を漏らしたピウスは向きを変えた。

【シェーク・フローレ】の正面は、未だ立っている【ブラッドガンナー】と向かい合った。

『いいだろう。ならば私の実力で奴を沈めてやる！』

ビウスはそう言い切ると、【ブラッドガンナー】の立つ場所へズカズカと歩いた。

【シェーク・フローレ】の右手に剣を持ちながら。

『見るがいい！ラルクより強きHRが誰なのかを！』

ビウスは頭に血が上っていた。

野次の勢いも増していく。

これから始まる次の戦闘を、ヒスロとニシアは遠目で眺めていた。

『いいのかしら？一番興奮するのはあなたじゃないの？』

『構わぬ。奴らに倒されるラルクなんぞ、ただのHRにすぎん。貴様にも、勝敗は見えているのだろう？』

『そうね。私の想い人が簡単にやられるわけがないわ。』

★★★

【チタン・キュレン】のロッド攻撃の種類は豊富であった。

立方体の群れを遠くに飛ばすだけがロッド攻撃ではない。

【チタン・キュレン】と【天海号】の戦闘は、なかなか折り合いがつかない状況だった。

両者の表面積の規模で比べるならば、【天海号】が圧倒的に大きい。

【チタン・キュレン】の攻撃に対して、被弾しまくりの戦況であった。

マルロは多数のロッド攻撃を繰り出した。

ロッドの先端を敵に向けて固定した状態でビームを放ったり、立方体の角を積み上げてオリジナルの剣や槍を作り上げたり。

何度も【天海号】を貫く為に試し技を披露した。

ところが、【天海号】に損傷の被害は少なかった。

多少のキズはあれど、煙や爆発は見当たらなかった。

バリアが強固だからである。

〔天海号〕のバリアは【チタン・キュレン】のロッド攻撃を蒸発して防いだ。

白く光る立方体の弾は、HR能力を駆使して作られた魔法のような存在。

ビームと同格の弾はほとんどバリアで無効化される。

激しく交わした後なのに、〔天海号〕の装甲はピンピンしていた。

拡大すれば目につく傷ぐらいしか、見当たらなかった。

〔天海号〕のブリッジで、両腕を白いローブに通したまま、宗太郎は立っていた。

彼の手足は動いていない。

〔天海号〕にも他の宇宙船同様、砲弾やミサイルの装填がなされている。

ロッドを振り回して暴れる【チタン・キュレン】に対して、それらを何十発も撃ち放った。

オート操縦を可能にしているからこそ、宗太郎はじっと戦況を眺めたままでいられた。

弾は全て、マル口に落とされたが。

『くっ…！地球の調査は念入りに行ったというのに…！』

マル口は痺れを切らしそうになった。

図体のデカイ敵でメスを入れるのは困難ではないし、敵の攻撃の威力は彼からすれば弱い。

船を落とそうと思えば、落とせる筈だと思っていた。

だが、対する例の宇宙船はしぶとく飛んでいる。

バリアは消耗品の類いだと、マル口は認識していた。

消耗しきると、バリアも弱まると見込んでいたのに。

『なんて強力だ…。地球でこんな技術力…。』

『色々調べたのだ。ここ10年で。』

『まさか…ラルクか！』

『言っとくが、尋問とか、強制的に吐かせてはいないからな。』

【天海号】のブリッジの天井から出てきたロープが伸びて、緩くなった。

宗太郎は最両端と次点のロープを、力強く握りしめた。

両腕をズルッと平行に下ろした。

彼の膝も曲げられた。

右脚を軸にして、転倒を避けた。

人形劇などの演出の裏方がやりそうな宗太郎の行為だが、意味はあった。

【天海号】正面の両サイドから、くねくねと太い光の綱が現れた。

マル口がざっと数えた限りでは、6本程。

太過ぎて綱、というよりも蛸足のような触手に近い物が、【天海号】の左右の舷側についた穴から湧き出てきた。

液体のようににゆるにゆる出でてすぐ、先端が猛スピードでマル口に向かった。

6本の綱が自分の装甲を貫通すると想像したマル口は、真っ先に回避行動を取った。

【チタン・キュレン】は俊敏に後退していった。

触手みたいな綱から逃れているだけで、戦意は喪失していない。

宗太郎は腕に絡み付けたロープ群を、自身へ引き寄せるように前へ強く引っ張った。

これまた後ろへ転びそうになったが、ロープ群がうまいこと宗太郎を支えていた。

彼がそんな操縦をこなした途端、極太の光の綱の先端に変化が訪れた。

枝分かれするように、6本の綱より細めの綱が生えてきた。

マル口は数を数えきれなかった。

1本の綱からでも、多くの綱が生えてきたから。

（綱でも作って俺を閉じ込めよう、という魂胆が丸見えだ！）

【チタン・キュレン】は左手のロッドを振った。

弾を繰り出して綱を消滅させようと考えたのである。

立方体の弾は至近距離で飛ばしたので、細い綱を裂くのは簡単であった。

だが…【天海号】の綱の群れは活動を停止しない。

活きのいい生物を彷彿とさせる程、綱の活気は良くなっていた。

裂かれた細い綱の先端から、更に細い綱が生えてきた。

（やはり…距離を置かなければ…！）

危険を察知していたマル口だが、行動を取るのが遅かった。

おかげで【チタン・キュレン】の右脚が、別の細い綱に絡まれていた。

『…しまった！』

マル口はつい声に出してしまった。

H Rは元の生物が細胞分裂を繰り返して巨大化、機械化する。

すなわち、1種の生命体である。

コックピットが内在するロボとは違い、四肢をどこか切断すると戻れない。

《再生》能力等を持ち合わせていないと難しい。

ただの機械、ただのロボならば予備分や代用品等で修復が可能である。

修復技術に長けている者に任せられるのも問題はない。

H Rは1種の生命体なので、物質の問題も絡んでくるし、修復にはとりわけ専門知識に特化している研究者が必要である。

クーランみたいな専門家が不可欠だ。

マル口が【チタン・キュレン】の右脚が綱に絡まれたトラブルは、彼にとって非常に困難な状況に立たされていると同格だった。

幸い左手のロッドを振り回せる自由は残されていたので、細い綱の群れをギリギリの所でカットしようと模索していた。

ロッドの攻撃も、すぐに止められてしまった。

ロッドを上を持って来るよう左腕をあげると、別の細い綱の群れが巻きつけてきた。

長方形を平行四辺形に変形するかの如く、【チタン・キュレン】の胴体を引きちぎらんとばかりの強度で伸ばしていた。

『い、痛い！クソっ！』

マル口は悪態をついていた。

もがいているがどうしようもなかった。

手をこまねいていると、残りの自由だった四肢も細い綱に巻きつけられた。

瞬時に【チタン・キュレン】は綱の群れにされるがまま、大の字の姿を上空に晒された。

大の字姿はほぼ固定だが、細い綱の群れは時々四肢を引っ張ったり、力を緩めたりを繰り返していた。

左手の握力が、徐々に落ちていった。

【チタン・キュレン】が必要不可欠なロッドが、スルリと抜け落ちていった。

硬い物を握った感触が無くなっていた事実にもマル口は気づいたが、すでに遅し。

ロッドの行方がわからなくなってしまった。

これでは…マル口は手も足も出せない。

武人に施したような拘束を、自分が受けていた。

マル口の手下達が見過ごすわけがなかった。

綱の群れを、【チタン・キュレン】と同じロッド攻撃で断ち切ろうと振り回す。

それはうまくいかず、逆にHRの胴体をグルグル巻きにして縛った。

【天海号】の細い綱は、極太の綱の先端以外からも生やせる仕組みを形成していた。

ロッドこそ落とさなかったが、綱がビュンビュン動くのでロッド攻撃を繰り返す事はできなかった。

速い揺れに気を取られ、落ち着いて発動に時間を割くのが困難だった。

【天海号】のうねる綱の猛攻は続いた。

宗太郎はロープが絡んだ両腕を、前にクロスした。

ロープが堅く、力のいる作業だった。

力をふり絞り、『x』の形を作りあげた。

【天海号】の舷側の穴から出ている極太の綱に、白い電撃が伝わっていく。

綱全体に行き渡り、【チタン・キュレン】にも電流が流れた。

パチパチと電撃が威力を増し、【チタン・キュレン】の全身は眩しい位に点滅を繰り返した。

マル口は悲鳴をあげた。電撃は高熱を伴う。

今の【チタン・キュレン】の状況は、火炙りにされている感覚と同じだった。

天王星圏は氷や水の豊富な星々が多く、極寒の地に慣れていたマル口。逆に彼は、炎や熱に弱かった。

今の電撃ショックは彼にとっては脅威であり、冷静になれずに泣き叫ぶだけだった。これによる痛みつけは、長時間も行わなかった。

【天海号】のエネルギーも無尽蔵にあるわけではない。

一定の電流をマル口に浴びせた後は、急に流す作業をストップした。

焦げ目のついた【チタン・キュレン】。

潔白の袴着に似たマントカバーはグレーがかかった感じに仕上げられた。

ロボの関節部分から煙がチョロチョロ出ている事も、【チタン・キュレン】が悲惨な姿を晒していると見てとれた。

マル口はまだ生き延びてはいるが、余力は残されていなかった。

この状況を確認しても、宗太郎はまだ追い込もうとしていた。

武力を行使せずに、口で言い渡すだけだ。

『どうだ？最新鋭の宇宙船の兵器の感触は。お仲間がいるからまだ懲りないだろうが。』

パチパチと極太の綱の末端から電気の火花が散った。

宗太郎は電撃ショックを一時期止めているだけだった。

『…後悔したよ、今。クーランに請うた自分が情けない。逃げるように動いただけじゃないか…。』

マル口は呆れた笑いをこぼしていた。

【チタン・キュレン】の頭部だけは、可動な状態だった。

『刺せ。刺すんだ。俺を絡み付ける“糸”だったら、先端を矛に変化するのも容易だろう。』

『ダメだ。』『何…？』

終わりを悟っていたマル口は、宗太郎の返答に驚きを隠せなかった。

リーダー格の自分を倒せば、地球人の宗太郎ら【ラストコア】の勝利だろう。

想像できる展開が待っているのに、とマル口は思っていた。

彼が聞かずとも、宗太郎は目的を告げた。

『簡潔に言うと、我々の仲間になってほしい。』

『何だと…ウッ！』

咄嗟に身体が動いたが、痛みを感じてしまった。

『下手に動くと、手足がもげるぞ。』

『このっ…！』

マル口は宗太郎を恨んだが、無理に動かそうとしなかった。

両腕を複数のロープで絡めていた宗太郎だが、それ以外は自由な身であった。

腕の痛みを感じて険しい表情をしているが、体力自体は衰えていなかった。彼にはまだ余力があった。

マル口を説得する勇気を持ち合わせていた。

『[ラストコア]は常に人手不足でな。敵でも優秀な人材だったら確保したいんだ。』

『話を勝手に進めるな！ウツ！』

【チタン・キュレン】の縛られた全身は無意識に動く時があった。

その影響で、マル口は痛みを感じてしまうのだ。

宗太郎の発言が、マル口にとっては刺激的であったからだ。

『条件を提示しよう。君が仲間に加われれば、手下達は見逃してやる。こき使われるより、自由に羽ばたく方がいいだろう？』

『その言い分だと、俺はこき使ってもいいって話になるぞ！』

マル口は怒鳴った。扱いが違うと思ったからだ。

マル口に文句を浴びせられても、宗太郎の表情は変わらない。

鋭い眼差しは固定されたままだ。

『1人の[宇宙犯罪者]として名を轟かせている君が、罪状を軽くできるとでも？』

『もういい！早くトドメを刺せ！』

『ダメだ。楽になれると思うなよ。』

宗太郎とマル口の対話は続く。

宗太郎がマル口へ一方的に追い詰めている状況である。

単純に話をつけるだけでは困難だと感じた宗太郎は、方向転換する事に。

『君が申し出を受け入れないとしたら、空中爆弾で部隊を丸ごと消滅させるぞ。』

『その覚悟は承知の上だ！』

『そうだな…。だが、これはどうだ？』

〔天海山〕の上部に、ホログラムのような写真が映し出された。

光源は〔天海山〕の上部のライト装置群からである。

上空は爽やかな青空だった為、写真の背景は黒に近い青で塗り尽くされた。

ギリギリ、瓶の輪郭が区別できるレベルであった。

マル口は聞いた。

『何かの薬品か？』

宗太郎は写真を提示しただけである。

それをマル口はどんな『薬品』かと尋ねていた。

ラベルの巻かれた瓶ってだけですぐに特定できるとは…。

と宗太郎は感心した。

『これは劇薬だ。水中にばら撒くと真っ黒になる塗料のような薬だ。』

『塗料が劇薬…？成分でもしれているだろう。』

『HRからすれば大した害はないかもしれんな。ただの塗料ならば。』

マル口は不信感を抱いてしまった。

紹介された塗料について、何か裏があると気づいていた。

『どういう意味だ。』

『この塗料を生物の潜む海中にばら撒くと、生物は絶滅する。』

マル口は大きく両目を見開いた。

【チタン・キュレン】のカメラアイの眼孔が縦に細くなった動作が、マル口の心情と連動していた。

『お前達は、何の苦しみも悲しみも感じないのか！』

『人並みの感情は持っている。』

『嘘をつくな！さっきから爆弾といい、劇薬といい…平然と危険物を発明するな！』

宗太郎は両目を細めた。目を閉じて、少し頭を下げた。

すぐに顔を上げて、マル口との交渉を再開した。

『地球上の生物を思いやる気持ちがあるのなら、我々の配下に加わる事だな。決断は君に任せよう。表明次第では業務を遂行する。』

宗太郎は淡々と告げるばかりで、ブレがなく冷静であった。

決断を自分に任せる程余裕があるな…と、マル口にはひしひしと伝わった。

腑に落ちず、悔しさを覚えたマル口。四肢を綱で巻きつけられ、電撃ショックで体力を奪われた彼には…意思表示を下すしかなかった。

『…全【ヒーストン】部隊に告ぐ。今すぐ船に帰還し、宇宙へ上がれ。』

手下達の戸惑いの声が続出した。

『隊長…？何と申し上げたのですか？』

『時間の猶予は無い。俺を放置して、今すぐ地球の空から離れるんだ。もちろん、クーランの魔の手にも引っかかるな。』

『事実上の降参…ですか？』

手下達の間でざわついた。熱心なロッド攻撃を中断してしまった。

『降参』という2文字を直接使わなくても、マル口が下した指示はその言葉に相応する内容だった。

共に戦って乗り越えてきた手下達は、うまく飲み込めなかった。

『まだ戦えます隊長！』

『覚悟はできております！我が身が減びても、次世代の同志達が…！』

『言う事を聞け！』

マル口が現状発揮できる最大限の音量が、上空に響き渡った。

手下達は一瞬で黙り込んだ。

『既に大半は失っている。俺の選択が間違っていた。ラルク相手に戦術を練る方が、勝算があったかもしれない…。』

マル口の声が段々弱まっていく。

彼の意気消沈した心情を表しているかのようで。

『逃げるんだ。耐えるんだ。次こそ勝利を掴むために。今はお前達の命を散らす時ではない。俺は身代わりとして差し出されるだけだ。体制を整えてから、反撃の狼煙をあげろ。お前達が強くなると期待している。』

マル口は手下達に言い切った。

手下達に巻いた綱のみ、拘束を解かれた。

☆☆☆

「あれ？」

『どうした未衣子？』

和希兄ちゃんが聞いてきた。私が何か異変に気づいたからだ。

「急に攻撃をやめたみたいだよ？」

『俺も見てるぜ？ ついでにどっかに登っていく様もな。』

勇希兄ちゃんも敵の変わり様に気づいていた。

私達は【フラワー】で一気に片付けていた。

最後に放った攻撃も、ロッド攻撃で淡いピンクの光の弾を飛ばしただけである。

ところが敵は自前のバリアで防いだけで、仕返しなんかなかった。

それどころか、上空へ登っていったんだ。

【フラワー】で攻撃したHRだけではなく、他に散らばってたHRも一緒に登っていった。

敵の反撃がない今、コックピット内のモニターに蓄積されたデータの整理に努めた。

すぐに、マル口の手下達全員が向かった先は特定できた。

3隻くらいの宇宙船が雲の遥か上に止まったきり。

私達【ラストコア】の輸送機は飛行している状態だけど、海面近くの低空飛行を維持している。

従って、上空の宇宙船は全てマル口達の所有物だった。

所有物の宇宙船へ戻る事は、至極真っ当な行動である。

今が戦闘状態でないのならば。

緊迫感のある空気は、これ以上続かなかった。

コックピットの通信回線に、アレックスさんが連絡を入れてきた。

彼は現状を伝えにきた。

『【パスティユ】の子供達。お前達も時間が経てば帰艦するんだ。』

『何があったんだよ？』

『もしかして…マル口が落ちたのですか？』

帰艦の指示を出したアレックスさんに対して、勇希兄ちゃんが尋ねた。

和希兄ちゃんは今の敵の行動の原因を考えていた。

答えを確かめるように言った。

『【フラワー】で周辺の手下達を蹴散らすのに専念していただろうから、他の状況は把握しづらかったかもな…。』

『画面の隅をチラ見してはいましたので、少しの予想はついてましたが…。』

和希兄ちゃんがモニター画面の右下の小さな映像に目配せしていたので、私は映像を拡大して詳細を確認した。

西条司令が言った最新鋭の宇宙船【天海号】。

【天海号】の舷側部分から、触手みたいな太い糸？がにゅるにゅると出ているように見えた。

実際は糸は全然動いていないから。

糸は1体のロボをガチガチに巻きつけていた。

糸は凄い仕組みになっているらしく、太い糸の先端から細めの糸が出ていた。細めの糸が…マルロ・ヒーストンのHR形態である【チタン・キュレン】を縛りつけた。

【チタン・キュレン】の縛りつけ方は四肢に巻きつけてちょっと引っ張った状態になっている。

胴体部分はほとんどガラ空きだった。

マルロに体力無さそうとか、私は勝手に思ってしまった。

【チタン・キュレン】が燃えて焦げていた。

【フラワー】で挑みかけた時は、洗い立ての服みたいに真っ新で綺麗な白色で輝いていたのに。何らかの方法で全身を燃焼されて、巻き付かれた姿でぐったりしている様に見えてしまった。

だから、「体力無いなあ」と感じ取ったんだろう。

『すげえなあ…司令。』

『司令もだけど宇宙船も凄いな。あんな武装も持ち合わせていたのか…。』

兄達は純粋に司令と宇宙船を良い方向に評価していた。

私も状況を把握してただけで無言だったけど、【ラストコア】のトップの人だと改めて実感したのは事実だった。

実力を知ったらよかったと。

『…粗方引いたな。そろそろ戻ってくるんだ。』

敵の大将は降参状態で、手下が攻撃に転じる事はないだろう。』

あったとしても撃ち落とすだけだがな、とアレックスさんが言った。

地図データを見返すと、敵を標す赤い光の点が、段々と消えていってる過程がわかる。

3つ程は残されたままだけど。

『宇宙船だけは全機収容してからでないと離れないだろう。補給と整備を兼ねて、機体だけ先に戻す。完全に帰れるのは宇宙船が上がってからだ。』

「わかりました。」

アレックスさんの指示通り、【パスティユ】は輸送機の格納庫に戻った。

ロボの姿からジェット機に分離をして。

分離後のジェット機の状態だと、ミサイル以外の武装はない。

今、敵側が狙おうと思えばチャンスだろう。

《同調性》の特性付きのHR、とりわけマル口の部隊に関しては姑息な行動を取らなかった。

変な所、律儀に守ってるの凄いよね。

ジェット機は無事に格納庫に収容された。

簡単なチェックで異常が発見されなかったので、ハッチはすぐに開いた。

補給と整備に入る為、私達兄妹はコックピットから降りて、簡易的な休憩室へ移動した。

休憩室にも外の様子が確認できるモニターがあった。

操縦士さんから栄養満点のジュースを貰って、飲みながら敵の撤退の様子を見ていた。

☆☆☆

ラルク対ビウスの戦闘も、呆気なく終わってしまった。

【シェーク・フローレ】の自慢の剣捌きは、【ブラッドガンナー】の飛び道具の前では無力だった。

聖なる光を放つ強力な技も、【ブラッドガンナー】は手慣れたように軽くかわした。

逃げ回る動物の捕獲みたいに、ビウスは苦戦していた。

何とかラルクを追い詰めたかったビウスにも限界は来る。

実際そこを突かれてしまい、ビウスが負ける結果になってしまった。

ラルクが行った後処理のやり方は、至ってトンケの時と同じやり口で済ませた。

ビウスの生命機能も、トンケ同様停止した。

スタンドのビウスの仲間が、急いで撤退した。

グロスのように暴れ出す様子は見られなかったが、やっぱり何かしら慌てていた。

ここまでは戦闘シーンを静観していたニシアの予想通りだった。

挑発に踊らされやすい男だったのは、事前にカマをかけた時にも判明していたから。

トンケもビウスも、仲間達と行動を共にしないとともに戦えない。

単体での戦闘力が仲間内で随一の強さを誇るだけ。

星を少しでも滅ぼしただけで【宇宙犯罪者】のレッテルを貼られるHR達。

この両者は、仲間達と協力しあって星を追いやった経験しかないだろう。

ニシアは彼らと直接交えていなくても、ある程度の想像はできていた。

問題は、次の戦闘だった。

《同調性》の特性を持つHR。

稀にこの特性が応用されないタイプも存在した。

自分の絶叫で敵を遠ざけるHR【ティア・ルーチン】のエスト。

自ら魚介類を生み出して分散させ、敵の行動を阻ませるHR【スィム・ドラック】のニシア。

そしてあと1人。

脅威のHRがこの場に存在していた。

H R 【アング・ウォール】の状態では地面を揺らすヒスロが、ラルクが3戦目で対峙する相手だった。

スタンドの野次馬達も地面が揺れて、おお？とどよめきがあがった。

バリアの加護があっても、ビウスの剣技の威力でも危ねえぞ！と怒鳴り散らしていた奴らである。

いちゃもん付けたい者が多かった。

意思や感情を共有できる仲間でもない赤の他人であり、野次馬の暴言が酷さを増してもニシアは気にならなかった。

いちいちそれでメンタルやられていたら、戦闘にならないと理解している。

ヒスロは前の2名と違い、厄介な能力を持っていた。

敵からのダメージを《吸収》する能力だ。

《吸収》する事で、自身の肉体の強化を施す役割を果たす。

ダメージを受けると、自身の身体のスケールが大きくなる。

【アング・ウォール】が他のH Rよりも一回りデカイ体格なのはそのせいだ。

クーランの用意した闘技場は、ヒスロにとって狭いスペースと感じてしまっているだろう。

したがって、【アング・ウォール】は闘技場のど真ん中辺りのみ動いているだけ。

機敏に飛び回っているのは【ブラッドガンナー】の方だった。

観衆前に張り巡らされたバリアは、H Rの全身も弾く強固な壁になっている。

【ブラッドガンナー】は一時期の足場として、うまく活用していた。

元々巨体の【アング・ウォール】だが、現在のラルク戦でも少しずつ身体を成長させている。

地球の実在するものと変わらない【レッド研究所】内の競技場では、巨大化する【アング・ウォール】では圧迫してしまった。

【ブラッドガンナー】が飛び回る虫のようで、それを拳で潰そうと躍起になった。

バリアを踏み台にするラルク、ヒスロに対決を譲ってうまく被弾を避けるニシアは、怒り狂うヒスロに恐怖などなかった。

観衆の方が野次馬する根性を失って、一部は競技場の外へ逃げ出していた。

もはや気晴らしの為の試合観戦は、ラルク対ヒスロ戦で終わりを迎えようとしていた。

【アング・ウォール】の巨大化には弱点もあった。

大きくなる事はすなわち、的になりやすい脆さにも変化する。

【ブラッドガンナー】は【アング・ウォール】の手で叩き込むような攻撃を回避し続けた。

左手にハンドガンはずっと握っていたが、もしもの防戦張る為の射撃しか撃てない。

戦闘前より【アング・ウォール】の体格は、2倍近く大きくなった。

【ブラッドガンナー】の銃弾をちょっと受けただけでも、【アング・ウォール】は《吸収》する。

《吸収》の量により、【アング・ウォール】の成長量の増減が変わる。

今回の戦闘は、成長量も控えめだった。

攻める時はコンパクトに攻めると、ラルクは考えていた。

とうとう、ヒスロの暴走にも終焉を迎える。

【ブラッドガンナー】のハンドガンは左手に握っている1丁のみ。

戦闘開始から今まで、右手には何も持っていなかった。

遂に、右手にも銃を持つようになった。

丁度いい頃合いと判断して。

左手のハンドガンとは違う、特殊な銃。

スケールはハンドガンと変わらないが、銃口の形が違う。

針のように先端が鋭く光る棘が見えた。

彼はニードルガンを手にしたからだ。

右手の銃の発砲は、なかなか行われなかった。

【アング・ウォール】の肩ぐらいの高さで飛び回っていた。

【ブラッドガンナー】は【アング・ウォール】の胴体の、ある1部分しか照準を合わせていなかった。

手の攻撃に関しては、五感による反射神経でうまく交わしていた。

何度目かの回避。

狭まれた空間で飛んでいた【ブラッドガンナー】。

ガラ空きになった【アング・ウォール】の胸元に目が行った。

今が狙い目と確信したラルクは、【ブラッドガンナー】のニードルガンの発砲を、開始した。

飛ばされた光の棘は、一直線に【アング・ウォール】の胸元へ突き進む。

怒り狂ったヒスロはもう、些細な事に気付く器量を持ち合わせていなかった。

棘は胸元を貫通した。時間はほんのわずか。

【アング・ウォール】の現在の体格ならば、人差し指と変わらない程の長さの棘。それが彼の胸元を突き破っただけ。

ヒスロから見ると、直径数ミリの穴を身体に空けた程度にしか思えないが。

生命機能を停止するには十分な威力だった。

【アング・ウォール】の暴走は止まった。

巨大化した【アング・ウォール】の骨格は意外としっかりしていて、膝が崩れ落ちて倒れる事はなかった。

下を向いたのは、膝と手のひらと頭部だけだ。

何かに跪くような姿でしゃがんだ【アング・ウォール】は、その状態を維持したまま静止した。

それも、永久に持続していた。

【スイム・ドラנק】で避けながら観戦していたニシアも、心底不安になっていた。

持ち前の女性らしい口調で、なんとか平常心を保っていた。

『これは…クーラン様の策に溺れてしまったわね…。』

不敵に笑うよう心掛けたが、つい本音を吐いていた。

『私を含めて、馬鹿だったわ。全員。』

だが、もう彼は後戻りできない。

頭の中では理解していた。

クーランの要求を飲んだ自分が悪いと考えた。

クヨクヨせずに、開き直す事を決意した。

生き延びたいのならば、ラルクを倒せばいいだけの話だと。

考え方次第で、単純に事が運ぶと信じて。

ニシアは表情を崩さないようにした。

【スイム・ドラנק】の周辺に、小魚の群れができた。

『水中に比べて格段に落ちるけど、目眩しには十分よね？』

群れの発生に騒音は付き物だった。

【ブラッドガンナー】が音を察知し、【スイム・ドラנק】が展開技を披露している姿を確認した。

ニードルガンは一旦、右手から消去した。

ヒスロの大暴れで、観衆はゼロに近い人数で減っていた。

思う存分、本気でやり合っても心配の必要はないだろう。

『飢えているのよね、あなた。いいわ。私が楽しませてあげる。踊りましょう？』

【スイム・ドラंक】の小魚の群れが一斉に【ブラッドガンナー】へ飛んでいった。

5・遭遇の日



うう…と弱気ながらも唸っていたマルロ。

その後すぐに、両目が開かれた。

薄暗くて狭い場所で眠っていたのか…と思っていた。

同時に、疑問を抱いた。

『薄暗くて狭い場所で、どうして眠っていたのか』を。

謎を放置したくないマルロは、自身の行動を振り返ってみた。

クーランがラルクとの戦闘の用意を計画した時、マルロは彼に交渉をしていた。

『地球産ロボと【ラストコア】を滅ぼして手柄を取る』約束をしたのだ。

部隊の仲間達と共に、地球へ猛進していた。

太平洋へ降下後、愛嬌湾を伝って【ラストコア】に侵入する予定を立てていたのだった。

正面突破のような進撃をした為か、流石に敵側に察知されて足止めをくらった。一部の部隊を海中に潜り込ませて、陰で仕留める算段も取っていたが。

【パステュー・フラワー】と地球産のAⅠロボ達が仲間を次々と落としていった。

もう少し作戦を練る必要があったと、失念した。

【チタン・キュレン】という小型の和装の着用マントをした白きHRの形態で挑んでいたマルロにも、最大の敵が。

【天海号】。地球人が最新鋭の宇宙船だと豪語していた船だった。

すごい宇宙船と自慢しても、所詮はサポート役。

ミサイルのような飛び道具の武器しかないマルロは決めつけた。

固定観念に縛られ続けるのは、自身にとってマイナスの価値を見いだす事になる。

【天海号】と交戦したHRのマルロがその経験をした。

汎用型の宇宙船「スイルシルバー」が、保有する宇宙船の中で最高のスペックを持つと信じるマルロが、それを上回るハイスpek宇宙船なんて知る筈がない。

結果、マルロは嵌められた。

「天海号」から触手みたいな綱を吐かれ、それに【チタン・キュレン】が雁字搦めにされた。

おまけに電撃ショックも追加で。

さらに、「天海号」を操縦した宗太郎の、『爆弾か劇薬を使用する』と脅す発言も受けて。

マルロは心身ともにやつれてしまった。

宗太郎に唆されて、マルロは部隊の撤退を命じた。

事実上の敗北を、味わった。

今までの経緯をマルロは振り返った後、急に気分が悪くなった。

吐き気を促すレベルではないが、めまいを起こしそうな気分ではあった。

「焦りすぎたな、俺は。とんだ失態を犯してしまった…。」

マルロは急いで取った侵攻に対して猛省していた。

だが、今更後悔しても遅かった。

「せめて…同志達が逃げていれば…ん？」

マルロは違和感を覚えた。彼は今、首元を触ろうとした。

天王星圏スイル出身のマルロだが、見た目は白髪に染めた地球人の子供にそっくりである。

薄い肌色の首元の感触を、普通は感じ取る筈だが。

マルロが感じたのは、人肌の温かさではなく、冷たい物だった。

しかも、柔らかい人肌と違って、弾力のない硬い物に触れている感じがした。

「何だ…これは？」

『随分と早めの目覚めか?』

男の声が、自分の耳に入ってきた。

誰かいるのかと疑ったマル口は、すぐに閉じ込められた部屋中を調べた。身体は重いので、頭部だけランダムに動かした。

部屋の中には誰もいない。

薄暗い部屋の灯りの代替えになる、壁面のモニターに誰かが映っていた。

マル口はこの人物について、誰かは知らない。確認だけはあった。

対峙した最新鋭の宇宙船を保有する組織の一員、という事だけは。

モニター越しの童顔の男性研究者はマル口と目を合わせると、話を続けた。

『機能は停止させていないから、回復すれば十分に戦えるだろう。』

「…。」

『俺はアレックス・ヘイリー。ここ [ラストコア] の技術局長だ。』

モニター越しの男・アレックスは別の部屋で、堂々と椅子にもたれていた。

余裕を見せているかのようで、笑みを欠かさなかった。

『天王星圏の星々の情報も入手はしているが、小人族を目にしたのは初めてだよ。宇宙の種族って、奥深いな。』

「…よくロボ形態から元に戻せたな。」

捕らわれた状態のマル口にとって、少しでも疑問を解決したかった。

アレックスに探りを入れようと、彼も口を開いた。

アレックスは平然としていた。

『昔重用していたHRがいたからな。誰なのかは言わない。…すぐに予想はつくだろう?』

彼は誰の世話をしていたのかは、名前を言わなかった。

マル口は見当がついていた。それでも、名前をあげなかった。

「こんな芝居をして…。結局何のつもりだ?」

『仲間に引き入れたいと、俺の上司が言っただろう？』

「仲間に対する扱いじゃないだろう！」

マル口は首元に何かつけられていると感じていたので、それを外そうとした。

アレックスはおっと、と声を出してマル口の咄嗟の行動を止めた。

『その鎖は簡単に外れないぞ？無理矢理外したら、首元で爆発する。些末な事で、身を滅ぼしたくないだろう？』

「やはり捕縛装置だったか！」

『悪いが1度装着すれば、もう解除はできない。一生、装置は外れないさ。』

モニター越しの童顔の研究者からとんでもない装置をつけたと告げられ、マル口は表情を引き攣らせた。

『他にも起爆設定が作動する仕掛けを講じている。…俺の言葉による、音声認識だ。』

そのカラクリを実際に観てもらおうとするか。』

アレックスは椅子から降りて、離れて行った。

カメラはアレックスが映るように、視点を変更していた。

大人が数人収容できるスペースのカプセルがあった。

ビルのエレベーターと同サイズと想像すればいい位のだ。

カプセルの隣にアレックスが立った。

『この中には、お前に科せられている装置と同機種のタイプが真ん中に固定されている。』

アレックスが笑みを浮かべた状態で説明しているが、モニターに釘付けのマル口は映像だけでも把握できた。

確かに、自分の首元につけられた装置と同じ黒色だと認識した。

『今から俺がある言葉を使う。カプセル内の装置を粉々にする。安心しろ。お前につけた物のコードとは異なるから。』

そりゃそうだろうとツツコミたくなるが、自身に危険が及びかねないマル口は黙っていた。

粉砕する為の言葉を使うのに、前振りとかはなかった。

急に、アレックスの口から発せられた。

『《It's a pity. (残念だ)》』

ドーン！と轟音がモニター越しに聞いたのはほぼ同時だった。

アレックスと該当カプセルとは至近距離だが、彼に被害はない。

カプセルのガラスが非常に強固なのだろう。

爆散した装置の破片も、ガラスで跳ね返って下に落ちた。

爆発の炎は、一瞬にして消えていった。

『中の部品も炸裂して拡散する。硬い無機質でもこうだから、お前の首も吹っ飛ぶだろう。』

アレックスの表情は一切変えず、淡々と装置の説明を続けたままだ。

対するマル口の顔は般若のようになっていた。

地球人のアレックスと違い、HRという強力な特殊能力持ちのマル口。それでも、装置の秘密を知って怯えてしまった。

言葉だけではどうにかして、マル口は紡いだ。

「引き抜くのに、手段は問わずか…。地球人も卑劣な行動に及ぶんだな。」

『俺達も生物の1種だ。生き残りの術を身につけていると評価してほしいものだ。』

「称賛されたい欲がなさそうに見えるがな。」

マル口が言うように、アレックスには称賛を期待するワクワクした表情はしていない。

指摘されても、アレックスは気にせずに行進する。

研究者の彼の目的は、ただ1つだけ。

『俺達の仲間に加わるか、俺の言葉で首元を破壊されるか。安心しろ。遠隔でも音声を通ればセンサーは感知する。選択権はお前に委ねる。』

この時点で、マルロに逃げ道はなかった。

罠の仕掛けを作成できるHRのマルロなら、うまく誤魔化して脱出する事は困難ではない。

だが脱出を目の前の研究者が読み取った時点で、装置の起爆は作動するだろう。

脱出に相当の策を練らないといけない状況に陥った。

宇宙へ逃亡するよう指示した仲間達とは、合流の機会を得たい。

今は折れるべきだと、マルロは判断した。

「…わかった。お前達と共に行動しよう。」

『そうか。ならば歓迎するよ。天王星圏スイル出身の、マルロ・ヒーストンさん。』

名前を呼ばれたが、心地いい感じはしなかった。

歓迎の意味合いも、どこまで本気なのかはわからなかった。

だが、不利な状況を嘆いていても仕方がない。

今は堪えるべきなのだ。

隙を伺ってコソコソ動き回るしかないマルロは思った。

なので彼はアレックスに聞いた。

「これからどうするのか、もう計画は立てているのか？」

アレックスはそうだな…と間に言葉を挟んでから答えた。

『実は俺は研究者気質で、好奇心旺盛なんだ。』

HRの身体構造に興味を示している。当分の間は、検査に協力してもらいたい。』

「なるほど、拷問か。」

マルロは呆れた様子で解釈した。ほとんど開き直っている。

『拷問よりは生ぬるいさ。君に何度言っても無駄だろうがな。』

アレックスもマルロの半ば諦めモードを把握しているため、極端な否定発言はしなかった。

『実施は明日だ。地球のサイクルは十分承知しているだろう？時間換算ならば、あと12時間後だ。』

「好きにすればいいさ。時が来るまで俺は眠ればいいのだろう。」

『理解が早くて助かるよ。』

☆☆☆

マルロ戦後に【ラストコア】に戻ってきってから、いろんな情報が入ってきた。

当然、マルロに突っかった私は怒られた。

司令じゃなくて、ジェームズさんにだけど。

司令はマルロの捕獲で疲労が溜まり、今のところ休養期間で面会が困難になっていた。まあ、あの拘束技は凄かったよ。

話を進めていくと、【ラストコア】に引っ張り込んだのはマルロ1体のみで、他は逃したみたい。

実際、【バスティーユ・フラワー】のcockピットで手下達が撤退する様を見たから、完全に逃げたんだけど。

マルロについては今も拘束されていて、アレックスさんが説得しているらしい。マルロの件に関わるもの以外は、以前からの【ラストコア】の状況は変わらなかった。

もちろん、私達も今までと全く変わった様子はなかった。

【バスターコ】のパイロット期間の3ヶ月が経過するまで、私達兄妹は【ラストコ】に通い続けていた。

今も私は…【ラストコ】に毎日来ている。

武人兄ちゃんがいなくなって1週間程落ち込んで。

当てがわれた個室で引きこもっていた時期が懐かしいと思える位に、私の行動は様変わりしていた。

頑張って勉強と訓練に励んで、武人兄ちゃんを救いたいと強く願っていた。

パイロットの期間満了まであと1ヶ月程まで、月日が経っていた。

この週の土日も【ラストコ】に寝泊まりして、勉強と訓練に時間を費やした。

曜日は土曜日。金曜日の夕方に訪れて、そのまま寝泊まりして基地内で過ごしていた。

昼食時は皆、ランチを食べに食堂に集まる。

私も栄養満点のランチを食べにやってきた。

ある女性と会ったのはこの時だった。

【ラストコ】の女性スタッフさんなのはわかっていた。

基本【ラストコ】は地球人でも部外者は入れない仕組みだから。

ポニーテールのしていた、ごく普通の優しそうで、責任感がありそうなキリッとした一面もある女性。

たまたま彼女が、私に声を掛けてきたんだ。

「今週も寝泊まりなの？」

臨時のパイロットである私達兄妹は基地内では有名なので、タイムスケジュールは周知のはずなんだけど。

あえて聞いてきたのは、私とお話ししようと来たのかな？

邪険せず、私は普通に対応した。

「はい。今週もですよ。」

「大変ねえ。疲れたりしないの？」

私は、心外な事を聞かれた気がした。

「疲れませんよ。体力的にはもう慣れましたし。」

「体力は訓練受けているから心配はないけど…私が聞きたいのは」

「精神面でも異常はありませんよ？私、そんな不安そうな顔していますか？」

食堂で頼んだランチがカウンターの隣に置かれた。

私の注文分なのでトレーごと運ぼうとした。

スタッフのお姉さんは引き下がらなかった。

通行の邪魔はしていないけど、

「ちょっとお話しませんか？」

と付き合う機会を設けられた。

自分のルーティン的には昼食時間は1時間を目安にしているので、女性スタッフとの会話に付き合った。

食堂のテーブルで向かい合わせで座って。

会話をするんだけど、私から話を始めようとしなかった。

特に話のネタとかなかったから。

女性スタッフさんの方が話のネタを持っていた。

ネタ…というより相談に近かったんだ、内容が。

だって、お姉さんの話は私に関する事柄だらけだったから。

割合だと100%に近い位には。

「黒川さんの件、まだ気にしてるの？」

「当たり前ではないですか？さもないと毎日通いませぬよ。」

「あれは君達じゃなくて、[ラストコア]全体の責任よ。君達は子供ながらよく乗っているわ。」

広い視野でみれば、私達ばかりが責められるわけではないのは、すでに知っている。

武人兄ちゃんの判断ミスの指摘もあるし、十分な戦力を配備しなかったのも原因と議論されているみたい。

私の暴走も原因の1つとする意見もあったけど。

「でも、武人兄ちゃんを助けたい気持ちが強いんです。」

「うーん、わかるんだけど。黒川さんが宇宙にいるとしたら、どう助けるの？」

「それは…勉強して…」

「勉強は必要だけど、色々対策を練らないといけないのよ？元々地球人の『宇宙進出』って、ここ半世紀内でもそうそうないんだしね。」

何だろう、この人。私に対して、説教でもしに来たのかなあ？

ちょっと、いやかなりの不信感を抱いてしまった。

私はこの蟠りを解消すべく、説教じみた発言をする女性に聞いた。

「何が、言いたいんですか？」

問いはシンプルだった。

女性は戸惑う素振りもなく、きっぱりと答えた。

「君って確か日本の中学生だよな？義務教育期間よね？学校はちゃんと通っているの？毎日ここに来てるけど。」

随分と…失礼な物言いするよね、この人。

彼女と私の隣は空席だし、彼女も友達いないんじゃないの？

物言いだけで性格が見えるから。

なのでこの質問も、私は正直に答えた。

「ちゃんと学校に通ってます。平日は学校が終わってからここに来ていますよ。それで問題ないですよね？」

私はいじめられた時から、学校が嫌いだった。

それを理由にして不登校になってもおかしくはない。

兄が2人いて、気遣ってくれるからまだ頑張ってる。

だからこの人に、そこまでズケズケつけ込まれる程ダメな私じゃない。

でも…彼女は引き下がろうとしなかった。

「この基地よりも、学校の方が楽しいと思うんだけどねえ。何不自由なく勉強も運動も遊びもできるし、自由にはばたけるじゃない。」

「中学生だから規制はありますよ？」

「違う違う。私の言う『はばたける』は別の意味合いよ。」

私は少し考えた。他の意味合いについて、大方見当がついた。

私はなんとなく、こう察してしまった。

「お姉さん、外に…？」

「そうね。[ラストコア]の規約もあるんだけど…実は私、《犯罪者》だったの。」

お姉さんが、犯罪者…？

ポニーテールの清楚な姿からは、想像がつかなかった。

こんな人が凶悪な人物だと、普通は思わないよ。

困惑気味の私に、お姉さんは話を続けた。

「サイバー犯罪で引っかかってね。機密情報を勝手に入手しちゃった過去があったの。」

「それだけで？」

「特定の人物以外は知っちゃいけない情報でね…。初犯だった事で罪自体は軽かったけど、トラウマを抱え込んで…立ち直れなかったの。」

このお姉さんはハッキングとかの工作が得意だったんだなあ、と想像がついた。

私より年上だけど若く見えるし、もしかしたら私か和希兄ちゃんと同じ歳ぐらいの時にやらかしてしまったんだろうな。

何も知らない時期にアウトです、て警告されたら、そりゃあひどく落ち込んでしまうよ。

「数年程服役で入っていた時に、[ラストコア]のスタッフさんが下見に来ていただいてね…。罪を犯した経緯を洗いざらい話したら、オペレーター等の通信士に採用してもらって。もう5年は[ラストコア]でしか勤務していないわ。」

すごい。[ラストコア]の活動ってここまでしてるんだ…。

武人兄ちゃんが拉致される前に、敵のHRに説得を試みたんじゃないか？って噂があった。

実際の映像も操縦士さんに見せてもらった。

賛否両論だったけど、私は兄ちゃんが仲間に引き入れようとしていた方を信じた。

兄ちゃんの行動が、スタッフさん達に影響を及んでいるんだ。

「私以外にも、元《犯罪者》が沢山働いているわ。例を挙げたらキリがないけどね。

だから、自由に出入りできるあなた達が羨ましいの。」

ただ単に嫉妬ね、と彼女は言った。

そう…なんだよね。

お姉さんの言うように、私や兄達は恵まれているんだね。

自由に動き回れるから。

武人兄ちゃんを追いかけてなくても、自分の人生を楽しんでもいいんだ。自由に飛び回れるから。

この女性は自分の翼を失ってしまった為に、翼を持つ私に広い視野を持てと言っているんだ。

私はそう解釈している。

時間が迫ってきたのか、お姉さんがトレーを持って立ち上がった。

「じゃあ、私は仕事に戻るから。今日言った事は頭の片隅に留めておいてほしいわよ。すぐに気が変わるわけじゃないしね。」

そう言って、お姉さんは私の前から去っていった。

気が変わらないのは、本当だ。

どうしても、私には武人兄ちゃんが忘れられない、諦められないんだ。

あの女性が私の個人情報をどこまで知ってるかはわからない。

私の見る《夢》についても、詳しく聞かされてないかもしれない。

夜は毎日訪れる。目蓋を閉じる時も来る。

そうすれば、私は毎日同じ男の人…武人兄ちゃんと確信してる人物の《夢》を見るように固定されてくる。

忘れたい気は更々ないけど、記憶を消したくても消せない状態が毎日続いている。

武人兄ちゃんが《夢》に出る限り、私は兄ちゃんから離れられないだろう。

ごめんなさい。

お姉さんに伝え忘れがあったよ。

私は正直、自由に飛び回れないの。

出て行ったから、今更告げる事は叶わなかった。

☆☆☆

ジェームズは今、アレックスの研究室に立ち寄っていた。

宗太郎から様子を伺って来て欲しいと頼まれたからである。

「全く…逐一報告しているんだが。」

「あれでも心配性な面もあるからな。俺達の総司令官は。」

アレックスが面倒くさそうに言うと、ジェームズは仕方なさそうに返した。

アレックスは報告業務を怠っていない。

簡単なレポートに纏めて、宗太郎に提出している。

おそらくジェームズの今の行動は、アレックス本人の安否確認目的だろう。

アレックスはそれを感じ取っているの、これに対して反感を持たなかった。

むしろ気遣いがあるだけでも、内心喜んでいた。

『嬉しさ』を表には出さなかったが。

「技術局長で、仕事の量も増えただろう。営業まわりの俺とは違ってな。」

「営業も相当な苦労だろう。お前の相手は日本の正規軍なり、白井家のご家族なりと、一筋縄ではいかない相手ばかり対応しているじゃないか。」

「…感謝しているんだな？」

「そう取りたいなら、取ったらいいぞ。おもてなしの品は何もないけどな。」

「研究成果だけでも十分おもてなしだろう。」

すると、ジェームズはアレックスの側にギリギリまで近づいた。

本音を聞きたいとなったのだろう。

やられた側のアレックスはびっくりしたが、反応はそれだけだった。

何か意図があると、彼は推測していたからだ。

ジェームズは声を小さくして、アレックスに聞いた。

「結局のところ、大丈夫か、お前。」

「…研究が超詰めだからか？」

「マル口って奴の件も引き受けたらろう？」

アレックスは近くのモニター画面にチラッと視線を向けた。

「俺は適材適所、を常に考えてやっている。

だから自分の役割分担の量は少なめだよ。」

アレックスがそう言うと、ジェームズはそうか…と内心ホッとしていた。

安堵したのは束の間で、ジェームズは目の前の研究者に他の質問をした。

「奴の監視は、カメラだけで十分なのか？」

するとアレックスは、モニター下で横向きになっているパネルを操作した。

立ったままのスーツ姿の男に、言葉での説明を始めた。

「特殊な装置でな…。今は俺のマニュアル操作で視点を360度切り替えが可能だが、命令をインプットすれば自動的に動かすのもできる。移行の作業の最中さ、今は。」

モニターの映像は1画面につき16分割構成になっている。

一部がパッとスムーズに映像を切り替えていく。

その場面に関して、アレックスは何も手を添えていない。

「オートの視点切り替えも万能じゃない。何人かの別部隊のスタッフにも頼んでいる。基地内全域に何らかのカメラは設置している。」

これだけで足りると思ってないが、とアレックスは付け足した。

ジェームズはしばらくは驚きを隠せず、言葉を発さなかった。

張り巡らされたモニター画面全体を目で追った後に、彼は肝心の問題を聞いた。

「奴は、マル口はどこにいるんだ？量が多くて探しきれないんだが…。」

対象者を探せないジェームズに対し、アレックスはパネル操作を3回行って、すぐに居場所を特定した。

「探索エンジンも積んだ。今は通路をキョロキョロしながら歩いているよ。…脱出計画を企てているだろうな。口先では誤魔化せても、日常の行動を観察していけば本音も見抜ける。」

アレックスがマル口のいる場所の場面を拡大したおかげで、ジェームズの探す手間が省けた。

「計画企てているんだろう？最悪の事態の備えはあるのか？」

「ある。奴の首にかけられた黒い装置が見えるだろう？」

言われたジェームズは、通路を歩くマル口の首元をチェックした。

「今の奴の姿は子供と変わらない筈だ。頭部よりも直径が大きくないか？」

「実際の範囲は首回りの太さでしっかりはまる設計にしてある。重量については懸念はあるが、奴の手で外す事は不可能だ。」

常に疑問を抱いて仮定や予想しか話さないアレックスだが、今回の件は断言した。

ジェームズは彼を見て、少し驚いた。

「…自信があるのか？お前。」

「あの装置はな、一言で言えば《爆弾》だよ。」

「《爆弾》…！？」

「俺の声が引き金になる音声認識のシステムを採用している。俺がある言葉を発すれば、いつでも《爆弾》を作動する事が可能なんだ。」

ジェームズはへえ…と言葉を発せる状態ではなかった。

目の前の研究者も碌でもない思考をしている人間と捉えたからだ。

彼は気を持ち直した後に、アレックスとの話を再開した。

「お前がうまくいってるらしき事はよくわかった。司令に伝えておくよ。」

「司令には報告したと言ったが？」

「気持ちの話だよ。普通に研究業務をこなしているから心配するなと声をかけるだけさ。」

じゃ、またな、と言ってジェームズは研究室から立ち去った。

1人モニターの前でイスに座っていたアレックスは、何事もなくモニターと向き合った。

「この仕事を続けてると、周りが見え辛くなるんだな…。」

★★★

「…おかしい。コイツらのやり方は奇妙だぞ…。」

〔ラストコア〕内の一般的な通路で、マルロは呟いていた。

人通りが少なかったためか、彼の独り言は誰も聞いていなかった。

「捕虜扱いだったら、普通は1人でウロウロできない筈だ。なのに俺は、行動できている。」

そういう疑問を抱きながら、マルロは通路をひたすら歩いていた。

彼の体力は回復傾向であり、スタスタと歩行できる速度まで戻った。

だが彼は、〔レッド研究所〕でクーランと取引話に応じた時と比べ、衣装や装備は極端に変更されていた。

変わらないのは、白い袴のような上着を羽織る所だ。

中の服装も普段の和装風の衣装ではなく、病院の患者が着用する簡素な寝衣だった。

さらにロッドの底を突きながら歩く彼は、今の手ぶらな歩き方に慣れていなかった。

どうしても左手が寂しくなり、たまに壁に手をつけたり、手すりを握ったりして歩き回った。

ロッドがないのは、辛かった。

HRという特殊な生命体故、体力自体はある。

ただ単にマルロが、『ロッド無しで歩く事』に不慣れなだけだった。

同時に彼の首元には、黒くて極太な円形の装置が装着されていた。

装置の正体は、アレックスから聞かされていた。

アレックスのひと声で、装置は吹き飛んでいく。

爆発用の電気も混じった装置は、僅かでも重みを感じていた。

余計に、歩行のしんどさを体感していた。

「だが…ここで根をあげてはいけない。同志達が待っているんだ。まずはロッドだ。ロッドの奪還から手始めに…！？」

ずっと独り言で口を閉じないマル口だが、黙る時が来たのだった。

地上の空港の3倍以上の規模を誇る「ラストコア」でも、通路には突き当たりの箇所がある。

方向的には、右に曲がるしかないのだが。

曲りきった後の通路の幅は少し広がっていた。

カメラ映像で映し出された海底の景色を眺める事ができるベンチが設置されているからだろう。

ベンチに座っている者が、「ラストコア」のスタッフのような大人だったら、マル口は絶句などしなかっただろう。

監視の目がついている、と捉えればいいと済むから。

現在ベンチにいるのは、ピンクの髪色をした、自分より背丈が少し低い少女だった。

マル口の故郷に、色のついた女の子はいない。

天王星圏スイルは、白や銀が輝く星だった。

星の民も肌以外、白か銀に染められた者達だらけ。

ピンク髪の少女は、初めて見た。

彼女はストローのついた飲み物を一口飲んでいた。

人影…自分に気づいたのか、マルロがやって来る通路の突き当たりの方へ顔を向けた。

この時、2人の目が合った。

☆☆☆

夕食を済ませた後、私はこの時、ちょっと休憩したい気分だった。

個室に戻ってすぐに眠ってしまってサボらないように、持ち運びできる勉強道具を持って。

自然に触れたい気分でもあったけど、アレックスさんの部屋は今取り込み中で、入室できなかった。

植物が置かれた場所なのね。

武人兄ちゃんがいなくなってからゴタゴタが続いていたから、技術局長のアレックスさんが忙しいのは仕方がない。

なので、別の場所で気分転換できる所を探した。

辿り着いた所が、部屋じゃなくて通路だった。

ちょっと窓際寄りの位置にベンチがあったので、私はそこに座った。

ジュースは近くの自販機で手に入れた。

ストローとフタ付きだったらこぼれにくいから、私はジュースを購入した。

必要経費分は支給されているので、ジュース1本くらいは買える。

通路のベンチに座った私の行動は、様々だった。

軽く勉強したり、海底の魚達を眺めたり、ジュース飲んだり。

暇つぶしをする休日の学生やサラリーマンみたいな事をしていた。

そんな時に、誰かの足音が聞こえた。

いや、誰か来たんだ。

足音は大きくなっているし。

だけど、私はあまり気にしなかった。

この通路も頻繁にはないけど、スタッフさん達が利用する道だ。

知ってる人間しか通らない。

そう信じて疑わなかったんだ。

曲がり角までやってきた人を見るまでは。

スタッフさんについても全員は知らない。

でも、あの人達は胸元に名札をつけたり、名札をぶら下げたりと徹底している。

なにより、中学生である私より年上の、背の高い大人しかいない。

子供が来るわけないんだ。

勇希兄ちゃんはどうなのって？

確かに勇希兄ちゃんは1つ歳上の中学生だ。

でも曲がり角の所で立っている人は…勇希兄ちゃんじゃない。

兄ちゃんは白髪じゃないし、格闘技大好き人間の兄ちゃんが動きにくい袴のような和服を着こなさない。

それに兄ちゃんは元気だ、壁にもたれて歩かない。

おそらく[ラストコア]内で身内以外の子供に出会っただろう。

なので私は衝撃を受けた顔をしている少年を見て、こう言ったんだ。

「あれ？私達以外に子供がいたんだ。」

「子供じゃない！」

すぐに反応が返ってきた。

引っかかるキーワードでも含んでたのかなあ…。

でもどう見ても少年だしなあ。

私は中学1年で、身長は140センチ台…と健康診断では測定されたんだけど。あまり顔をあげなくても、目線は合いそうだから…。

この子は私と変わらない背丈の少年かなあ、と思うのに。

強く否定されたからには、何らかの事情があるのかな？

少年の格好も変だしね。病院の患者さんが着るような寝巻きに、七五三でしか最近見かけない袴みたいな上着。

なぜか首元には黒い物がついていて。

黒い物の正面には緑の小さな光が3つ、ついたり消えたりしている。

格好でわかる、意味不明な変わった子。

変わってるから、保護されたんだね。

「そんなに吠えなくてもいいよ？大丈夫。私も変わってるから。何かに巻き込まれて保護されたんでしょ？」

『《犯罪者》だって受け入れる程、困り果てた人を匿う所なんだ、[ラストコア]は。

だから、同じ年で来ている子には優しくしようと誓ったんだ。

お姉さんに言われてから。

私は少年の彼に笑顔で対応しようと試みた。

拒絶反応が解けて、仲良くなれるようにと思って。

それは誤解だった。

彼の警戒心は解くどころか、増していた。

私に対して睨みつけてきたし。

…初対面でニコニコしながらお喋りは、無謀だったかな。

私はちょっぴり反省していた。

それでも、私と彼の間にズレが生じていた。

私はもっと、根本的な問題を見落としていた。

少年の彼から、告げられた。

「…俺の年齢を、いくつだと思っている？」

「年齢？私は13だから、あまり変わらないんじゃない？」

「その位のガキに見えるってのか？やはり俺は。」

じゃあ…私より歳上？和希兄ちゃんと同じ位かなあ？

「16歳以上なの？」

「そりゃそうだ。」

「そうなんだ。でも私、気にしてないからね！

男子高校生でも背の低い人はいるんだし。」

「いやちょっと待て。」

少年が私の発言を遮ろうとした。

おかしいなあ。私は事実を言ってるし。

私が中学生になる前、和希兄ちゃんは電子工作好きの仲間を家に招待した事があるんだ。その時、今の私と変わらない背丈の人もいて…。

だから、男の人には背丈の高い人、低い人がいるんだなあ、と知っていた。女の人も背丈は様々だけでも、はっきりしているのは男の人の方だと思ってる。

この人が止めに入るのは、他の理由かな？

高校生ではないとか？もしくは…。

「余計な想像をするな！俺はそこまでガキじゃない！」

少年の睨みつけは強くなった。

「…何なのよ。子供をガキとか呼んじゃって。痛い目にあったの？」

「あの屈辱の戦闘に遭遇してないから、こう言えるんだな。」

戦闘…？

その熟語を聞いた私は、[ラストコア]に来てからの戦闘を振り返った。【ホルプレス】達の戦闘では彼らを倒している。

武人兄ちゃんが連れ去られた時、[ラストコア]は大負けして何の利益もなかった。

3度目の大戦。

マルロ・ヒーストン率いる天王星圏スイルの大部隊の降下。

私達兄妹は【バステューユ】でマルロの手下達を蹴散らしていた。

その最中に、西条司令が宇宙船[天海号]で、マルロのHR形態【チタン・キュレン】を捕縛した。

マルロは仲間達に降参を命じて、自ら捕虜になったらしい…。

捕虜？まさか…。

「あなた、マルロ・ヒーストンなの？」

一瞬で、少年…いやマルロの顔が凶変した。

誰かに危害を加えそうな、そんな感じだった。

マルロはズカズカと私の前へ向かっていき、至近距離で私を睨んだ。

「お前、何で俺の名前を知っている？」

彼の怒りの圧は凄かった。

けど、同じ体格の人に凄まれてると考えたら、怯える必要はなかった。

そもそも私は短期間でも【バステューユ】のパイロットなんだ。

この程度の厳しい視線に怯んでたら務まらないよ。

「私は[ラストコア]の大人の人から、色々学んでいるから。」

「お前みたいなガキが、ここから何を学ぶ？」

「何だっていいでしょ？好きで学びに来ているんだから。」

「好きで？『戦闘に勝利する為の術』を知るのが？」

…何だろう。

リュート王子も食堂と一緒に食べたお姉さんも、このマルロって人も…。私の頭がおかしい、って言いたげじゃない。

先の2人はまだわかるよ。

王子は真面目そうな人柄だったから、悪知恵を働かなさそうだし。

お姉さんは《犯罪者》と語ったけど、今は改心して地球防衛への支援をしている。思考がまともだと思ってる。

マル口は《宇宙犯罪者》だと聞かされている。

武人兄ちゃんを拉致したHR達に、マル口の部隊の者もいたんだ。

極悪人が、私がパイロット業務に専念するのは馬鹿だと考えるの？

「あなたが言える義理あるの？現在の基地内で極悪なあなたが。」

「周りが勝手に言いふらしているだけだ。星を1つ潰しただけでも汚い箔がつくんだよ。」

へえ。《宇宙犯罪者》の定義って曖昧なのね。

星を1つ滅ぼすと、数多の生命が失われるからだろうね。

でも、私は誤解を解きたかった。

私は別に戦闘狂になりたい訳じゃない。戦闘も本当は怖いし。

必要な知識だから学んでいるだけなんだ。

「私には目的があって今も毎日来ているんだよ。」

「目的？」

マル口は私の心の内を読めなかったようだ。

それでいいの。

どストレートに、私のやりたい事を答えたらいいだけだから。

「今はね、武人兄ちゃんを助けたいんだ。」

「武人…？」

「あなた達が拉致した黒いHRだよ。だから、あなたが憎かったんだよ！」

私の表情から、笑みは消えていた。前の戦闘とは違って手は出さなかった。

だけど眉間に皺寄せて、口で怒りをぶつけたんだ。

効果はないのを知ってても。

「…なるほど。誰の話かは大まかな推測ができた。あんな奴のどこがいいのか。」

「武人兄ちゃんはそんな…！」

「アイツも〔宇宙犯罪者〕だ。11の星を潰した男だ。数比べっぼくなるが、俺の8つよりも多い。奴のがよっぽど極悪人だよ。」

マル口はとんでもない事をしれっと言った。

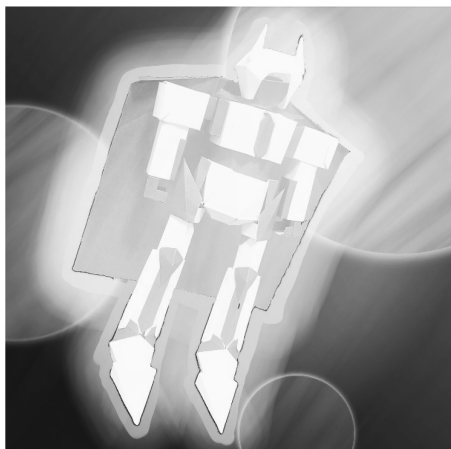
…まさか、武人兄ちゃんが「敵に回ったらどうする」と言ったのは…。

「ガキはお前だな。鏡をしてみろ。お前の驚愕した表情は笑えるぞ。」

マル口はその後、部屋側の壁に右手をつけながら私の横を通り過ぎさった。

私はしばらく、動かなかった。

6・招待の日



とうとう自分にも限界が訪れたなあ、とニシアは思った。

もうすぐ意識がなくなっていく感覚がして。

多くの野次馬観衆が前のラルクvsヒスロ戦で逃げ出し、競技場のスタンドは寂れていた。

強力なバリアでスタンドに被害があまり及ばなくても、ヒスロの破壊力は観衆達に恐怖を与えた。

だが、当の戦闘を繰り広げるHR達にとっては、観衆が減った方が好都合だった。

関係ない者への気配りなど考慮しなくていいからだ。

HR形態【スイム・ドラंक】の姿で小魚達を飛ばすニシア。

競技場には、水辺のフロアは存在しない。

【スイム・ドラंक】に群がる小魚達が特殊だった。

金魚のような見た目に、左右のヒレ部分から小さな羽がついていた。

ニシアの命令範囲内で、水気のない場所でも小魚達は自由に飛び回れる。

【スイム・ドラंक】の周りに大量の小魚達が出現した。

バリアの内側のリングでは、小魚達が群がりすぎて戦闘状況が把握し辛くなっていた。

まるで朱色の墨汁で染め上げた液体を彷彿とさせていた。

これでは【ブラッドガンナー】も群れによって視界不良になり、身動きがとれなくなるだろう。

ところが、歴戦のHRであるラルクは、大量発生現象に遭遇しても気にならなかった。

むしろ、自分に纏わりつく小魚達を、利用した。

小魚達は【ブラッドガンナー】の装甲にくっつき、齧り付こうとした。凶暴な牙を持っており、硬い機械の装甲を噛み砕くのが可能な小魚達。

【ブラッドガンナー】の黒い装甲が見えなくなるまで小魚達はしがみついた。

隙間があれば、そこを埋め尽くした。

完全に朱色の口ボになった時だった。

パン！と風船が割れる大きな音がした。

同時に【ブラッドガンナー】に群がった小魚達は弾かれた。

急所に当たったのか、直近の小魚達は破裂した。

紫色の液体があちこちに飛び散る。

他の小魚達は液体を避けるよう、後ろへ下がった。

逆に【ブラッドガンナー】は未だ定位置にいたままだ。

液体は【ブラッドガンナー】にも浴びせられた。

紫色のペンキがついた状態へと変貌していった。

ラルクは付着した液体をチラッと見たが、すぐに視点を切り替えた。

【ブラッドガンナー】は両手にショットガンを手にした。

銃口を奥に退いた小魚達に向けて、弾を連射し始めた。

ショットガンの照準は正確に定まっていない。

弾はみるみる消費していく。

【ブラッドガンナー】に近い位置にいた小魚達が、また破裂していく。紫色の液体が、紫色の濃い煙のように広がった。

【スィム・ドランク】は小魚達に守られるようにして、スタンドとリングの境目の所に鎮座している。

『好戦的で気持ちいいわ…。でも私の魚達を落としても、私が成長するだけ…』

ニシアはこれ以上、喋らなかつた。

喋らせてくれる暇などなかつた。

【ブラッドガンナー】の突進。

【スイム・ドラंक】の顔面スレスレまで、わずかに数秒で近づいた。

彼の右手は、ニードルガンに変わっていた。

銃弾とされる針は、【スイム・ドラंक】の頭部に命中しかかった。

ギリギリで、【スイム・ドラंक】は右にずらして回避した。

針はバリアを貫通せず、弾かれた。

パトンの高速回転のように針は飛んでいき、地面に刺さった後は止まった。

また…近くの小魚達が刺さって破裂した。

『…随分と大胆ね。普段から、これくらい刺激的であって欲しいわ！』

突如、【スイム・ドラंक】が形態を変えた。

ロボから生物姿へと変身、ではなかった。

ロボ形態はそのまま維持している。

変化したのは、形だった。

人型で動き回ったロボが、細長い龍のロボになっていたのだ。

尾ひれが長く伸びているせいか、他のHRよりも華奢な体型の人型よりも大きく感じられた。

重さも感じてしまうのか、龍形態の【スイム・ドラंक】は尾ひれ部分から胴体下の脚までを地面につけた。

自分の姿を、再び小魚達で丸々隠した。

『飛んできたのはいいのだけど、身体は持つかしら？』

ニシアは追い込まれていそうな今でも、ウフフと笑っていた。

実は【スイム・ドラंक】の小魚達の体液には、毒が混じっている。

体液を浴びると、HRのロボ形態の場合、装甲が腐食し、部分破壊を促す作用がある。

先程の突進も含め、【ブラッドガンナー】は小魚達の体液を浴びていた。

無茶な行動を起こしたのだから、壊れるのは時間の問題だとニシアは読んでいた。

読みは、外れる事になる。

【スイム・ドラंक】のカメラアイは、小魚達の群れの隙間から、【ブラッドガンナー】の状態を確認した。

じっくり眺めるつもりだったニシアだが、ある変化に気づいて愕然とする。

【ブラッドガンナー】の黒い装甲は、溶けなかった。

むしろ、車の外装に弾かれた水の様に、浴びた体液が下に流れていく現象を目撃した。

これはまずいかもと、ニシアは直感した。

物理的に攻撃しようと、彼は判断した。

小魚達にはまた、齧りつけるのよと命令を下していた。

同じ手は効かないのは、ニシアもわかっている。

これは時間稼ぎだった。

今出現している小魚達の半数を【ブラッドガンナー】に押し寄せた。

残りの分は、【スイム・ドラंक】の周りに止まらせた。

ニシアは1つの秘策を考えた。

彼に纏わりつく小魚達が、地面へ降りた。

小魚達は地面に齧り付いた。

競技場の地面は整備されており、硬度は硬めに設定されている。

華奢なHRの【スイム・ドラंक】のみでは、地面を破って潜るのは厳しかった。

【スイム・ドラंक】が地面に潜り込むのは、比較的早かった。

小魚達の牙は鋭く、硬い地面でも折れなかった。

小魚達が大量発生する事で、牙も大量に備わっている。

【スイム・ドラंक】は競技場の地下への潜り込みに成功した。

小魚達の一部が先陣を行くので、この龍のHRは地下に収まっていた。

【ブラッドガンナー】のバリアで、別の小魚達が弾かれた。

前の行動と同じパターンを取った。

自由に動ける状態になってある程度の小魚達をさらに落とした時、ラルクは気づいた。

【スイム・ドラंक】の存在が、丸々いなくなっている。

目印だけはついた。競技場の地面に、砂場のように盛り上がった小さな山が確認できた。

この辺りで地下に潜ったのか、とラルクは察した。

まだ残った小魚達が追いかけてくるので、左手のショットガンで軽く撃ち落とした。

いちいち振り向かなくても、銃口だけ方向を固定しておけば、簡単に落とせる。

ラルクが気掛かりなのは、ニシアの行方だ。

生物やロボより優れたHRでも、潜んでいるHRや他の敵を感知する距離には限界がある。

ラルクはニシアがよく潜り込めたと評価した。

ヒスロ戦で地表が崩壊している箇所はあったとしても、ニシア、ひいては【スイム・ドラंक】は非力であるのは知っている。

感知できない程深く潜り込めるとは思わなかった。

ニシアの周りに群がる小魚達が尽力してくれていると想定した。

【ブラッドガンナー】周りの小魚達はほとんど散っていった。

それ故に、彼は今何不自由なく動き回れる状態だった。

競技場のリングのど真ん中で浮いたまま、固定した。

…地下から這い上がってきた【スイム・ドラंक】を迎え撃つ為に。

浮遊状態で地面の揺れは感じなかった。

代わりに、地割れを促すような騒音は耳に入ってきた。

案の定、好戦的なニシアは逃げなかった。

【ブラッドガンナー】の背後に【スイム・ドラंक】が地下から飛び上がっても、驚きはしなかった。

むしろテンポよくニードルガンで仕留める動作を行った。

秒で振り向き、引き金を引いた。

瞬発的な動作により、照準定め準備はしていない。

ニードルガンから発射された針は、【スイム・ドラंक】の…首元に刺さった。

ニシアはラルクに、近づく事ができなかった。

針の行く方向に、身体全体が引っ張られていった。

リングとスタンドの境目であるバリアと衝突し、滑るように降りた。

《心臓部分》がHRの生命維持の要ではあるが、《首》も担っている部分もあった。

HRは半分、生物である。

《首》をやられるというのは、呼吸困難に陥るという事。

ニシアの息は絶え絶えになっていた。

喉の痛みで挑発的な発言もできなかった。

（いつまでも寡黙ね。あなた。）

ギリギリの境目で、ニシアは意識を保っていた。

喉までやられてしまい、彼は声を出せなくなっていた。

言葉は発せないが、彼の心の内は笑っていた。

（あなたも今は、喋れないのよね。お揃いだわ…。だからこのまま、朽ち果て…。）

小魚達がヨロヨロしながらも、彼の周りに集まった。

小魚達を【ブラッドガンナー】へと、真っ直ぐに向かう手立てをニシアは取った。

小魚達は【ブラッドガンナー】の周りに、行かなかった。

行けなかったと明言するのが正しいだろう。

方向を向いてまもなく、小魚達もパタパタと地面に落ちていった。

【スイム・ドラंक】が機能停止したからだ。

今のラルクに、情けや容赦などの許しはなかった。

《首》の次は《心臓》。

【ブラッドガンナー】のニードルガンの発射時間に間隔は設けなかった。

【スイム・ドラंक】にはニードルガンの針が2本刺さった。

メイが故障すれば、サブも機能不全に陥るのはよくある。

小魚達も生气を失った。

ニシアが落ちたと知ったラルクは、競技場の地面に着地した。

地面が炸裂しまくったせいで足場は不安定だが、比較的安定した足場に【ブラッドガンナー】は立っていた。

『見応えないなあ、HRだってのに情けねえ。』

静まり返った競技場に男の声が響く。

寂れたスタンドにクーランが立っていた。

今回のHR同士の乱闘はクーランが仕組んだ事。

競技場のどこかに隠れて戦闘を見ていたのを、ラルクはわかっていた。

ひょっこりとスタンド内に現れても、ラルクは驚かなかった。

『しかしまあ、リングが狭かったんだろうなあ。施設、滅茶苦茶にしゃがってよ。ま、しばらく使わねえがな。』

へへッ、とクーランは笑っていた。

『これで俺は、ラルクだけ集中してればいいって話だな。下手な雑魚を寄せ集めるよりも、楽だわ。』

彼は右手の甲を【ブラッドガンナー】に向けた。

こっちへ来い、と呼び寄せる素振りを見せた。

ラルクはロボ形態から生物形態へ戻した。

地割れの酷い地面に難なく着地するラルク。

ボサボサの黒髪に赤い宝石のような瞳。

上半身のみ裸で、黒のズボンを履いていた。

瞳の色以外は…地球の東洋人と変わらない容姿だった。

クーランがリングを背に、競技場の出入り口へ歩いた。

その後ろを、離れた所でラルクがついて行く。

出入り口の寸前で、クーランが歩みを止めた。

ふと思い出した事があった。

『そういや、1匹忘れてたなあ。小さいからって別の用事に出かけた奴。…音沙汰ねえし、どうでもいいか。』

ハハッ、とクーランは笑いだして、歩みを再開した。

後ろのラルクが刺す視線は、冷やかだった。

☆☆☆

マルロに武人兄ちゃんの悪い話を聞いた日の夜は、眠れなかった。

目を閉じて夢の中のいつもの男の人に出会えたのは、多分3時回ってからかな。

夜中の2時に時計を見た記憶があるから。

当然、寝起きは怠かった。

休日で本当によかった。平日だったら学校があるし。

学校は嫌いだけど、行かなきゃいけないってうるさく言われてるし。

「ラストコア」でも訓練とか勉強とかあるから、全然気は抜けない。

起床時刻にはとりあえず起きて、朝食をしっかり取ろうとした。

ご飯を食べたら、気分の悪さも回復するかなあ、と思って。

私は食堂へ足を運んだ。

2人の兄達も一緒に寝泊まりしてくれたので、私を見つけると共に食堂へ向かった。

顔色がおかしいと気づいたのは、和希兄ちゃんだった。

「未衣子、元気がなさそうだけど、どうした？」

それは食堂で朝食のメニューを席に運んだ後で。

座って食べ物や飲み物を口に入れようとした時に。

思い切ってパンを食べた勇希兄ちゃんも、牛乳で押し込んで私を見てきた。そこまで豪快にしなくてもいいのに。

「そうだよなあ。朝全然喋ってねえじゃん。」

「いつも口うるさくないけど。私。」

「あーうん、それだよ。」

え？毎日そんな風に言って欲しかったの？兄ちゃんは。

「心外だわ。変わってるね。」

「俺は普通だろ！妹の調子がおかしいんだったら心配するだろ！」

「…怒らなくてもいいじゃない。ごめん、言いすぎたわ。」

私が本音を言うと勇希兄ちゃんが急に立って、私に向かって怒鳴り始めた。

騒がしくなると不安になったのか、和希兄ちゃんが止めに入る。

「落ち着け勇希。朝からうるさいと怒られるぞ。未衣子も、もう少し勇希の気持ちを含んでやってくれ。」

「…わかってるわ。」

「いやわかってねえだろ！」

「もう座るんだ勇希。」

和希兄ちゃんに抑えられて、勇希兄ちゃんはおとなしく座った。

ムスツとした表情で、朝食を食べ始めた。

私達兄妹は固まってご飯を食べているのに、不穏な空気が漂っていた。

フォークやスプーンを動かす音と、牛乳の入ったグラスを置く音のみが、私達の間のみ流れるBGMだった。

視野を広げたら、スタッフさん達の話し声も含まれるんだけど。

3人とも黙々と朝食を摂る最中に、誰かがやってきた。

私達はアレックスさんがやって来たと認識した。

彼が他の誰かの腕を引っ張っていた。

「やめろ！強引にやるな！」

「特殊な生命体の癖によく言うよ。」

「怪我人なんだぞ！」

「大方回復してきている。それに、普通の捕虜ならもっと扱いが酷いからな。」

引っ張られた人が言い負かされていた。

「子供が引っ張られてる…？」

「何してんだよ…。」

兄達がこの有り様についての感想を述べていた。

ああ。2人とも会ってないから知らないんだな。

病院用の寝巻きの上に袴のような着物を羽織った、少年っぽい男の人。

私は昨夜、通路のベンチで休息中に出会していた。

マルロ・ヒーストン。

天王星圏スイル出身のHR。

ロボ形態は【チタン・キュレン】。

この人物が、アレックスさんに強引に連れてこられている。

昨夜の、自慢げに私を見下していた態度はどこへいったのやら。

そう考えてしまうと、今の技術局長に無理矢理される彼の姿は、滑稽だった。

私達兄妹の食堂の席は隅の方に決めていた。

アレックスさんがわざわざ、マルロを連れてやって来たのである。

アレックスさんは席の前で止まり、私達に話しかけてきた。

「今日のスケジュールの前に、俺とコイツから、どうしても伝えたい事があるんだ。」

「待て！俺は何もないぞ！」

今度はアレックスさんがマルロの顔を強引に引き寄せた。

耳元で何かを囁いていた。

今回のアレックスさん、なんか強気だなあ。

2人の距離にちょっと間隔を空けると、マルロは大人しくなった。

マルロが子供体型だからか、2人の身長差は頭1つ分の差があった。

アレックスさんも低身長だけど。

「訓練時にでも紹介しようとは考えたが、緊張するかもしれんからな。今やっておくよ。」

アレックスさんはマルロの肩をポンポンと叩いた。

ジッとマルロを横目で見ていた。

キツイ視線を浴びた当の本人は、ウツと声に出すほど怯えていた。

今のアレックスさん、なんかカッコいいなあ。

「彼の名前はマルロ・ヒーストン。ご存知の通り、集団で襲ってきたHRだ。」

「え！子供じゃねえか！俺と変わらねえの！？」

「ガキじゃない！俺は地球の年齢に換算すれば32年は生きている！」

「…へ？」

生物形態の姿で初対面の勇希兄ちゃんは驚いていたので、すぐに吠えた。

『子供』のワードに引っかかったのか、マルロはすぐに反論してきた。昨夜私に対しても、否定的な発言はしていたけど。

32歳…。

武人兄ちゃんは30歳って聞いたから、彼よりも年上なのはかなりの衝撃になるよ。

年齢については、私以外の兄2人も同じ反応を見せていた。

すると、アレックスさんが解説を始めた。

「天王星圏スイルは小人族なんだ。成人年齢の生物だと、マルロぐらいの背丈の奴らがうじゃうじゃいるんだ。」

なるほど…宇宙には様々な生物が存在しているんだね。

武人兄ちゃんがたまたま、地球人と変わらない見ただけなんだ。

宇宙の種族についての知識は、[ラストコア]でも勉強していた。

今まで見てきた異星人達は、武人兄ちゃんやニコン星の王子達のみ。どちらも地球人並みの姿をしていた。

マルロの姿も、地球の子供として見れば、そこまで変わり映えはないんだけど。

本人がかなり否定しているし。

「で、昨夜の事が…。」

私の心がドキッとした。

マルロ（生物形態）との接点なんて、ベンチが設置された幅の広めの通路での会話しかなかったし。

2人の兄なんて、マルロとは初対面だし。

もうアレックスさんの耳に届いているんだ…。

そう思うと、私は焦りの気持ちでいっぱいだった。

勝手に口論になったし、謝らないといけないのかなぁと懸念していた。

ところが、アレックスさんの行動は予想を裏切った。

マルロの白髪を生えた頭部を強く掴んで、私達に笑顔を向けた。

「彼が酷い事言ったようだから、謝罪させるよ。」

多分心底では怒ってるな、と想像した。

観念したのか、痛みが激しかったのか。

マルロの謝罪は、素直でスムーズだった。

「…誠に、申し訳ない。」

アレックスさんの後押しもあっただろうけど、彼は頭まで下げた。

その行為に、身に覚えのない兄達は、互いに顔を見合わせた。

ここは、詳細を知る私が前に出ないと。

「私も子供だって勘違いしてごめんね。勇希兄ちゃん以外、同世代の子供がいなかったし。」

実際事実だから、何も間違っていないよね。

マルロはすぐ顔をあげたけど、私達から目を逸らした。

おそらく、アレックスさんに強制された謝罪だから、反省の色はないかもしれないね。

別にいいけど。

むしろ逆に吹っ切れた気がするから。

起床後間もない時は全身が重く感じたのだけど、吹っ切れた今の体調は良くなった感覚がする。

まだ朝食のパンやスープやサラダは、残っている。

デザートに至っては、まだ手をつけてない。

話の後は、まずは完食しよう。

★★★

最初は警戒していたマルロだったけど、段々とそれは和らいでいった。

アレックスさんの意向により、私達兄妹とマルロは共に行動する事になった。

訓練の時も、日常生活でも。

平日は私達の学校があるから、共に行動はできないけど。

マルロは外に出れないって聞いたから。

結構マルロが【ラストコア】内でウロウロしているけど大丈夫ですか？と和希兄ちゃんは聞いた。

アレックスさんは「問題ない。」ときっぱり答えた。

「奴の首元には特殊な装置を取り付けた。問題行動を起こせば、装置が爆発する仕組みになっている。」

「近くにいたら…巻き込まれるんじゃないか…。」

勇希兄ちゃんの心配ももっともだ。

爆発だったら装置が拡散するから、近くにいたら怪我をする可能性がある。

でもアレックスさんの表情に変わる様子はなかった。

「奴はな、命が恋しいんだ。俺がちょっと耳打ちしただけで青ざめる始末だしな。情けない、と君達は思うかもな。」

情けない。それはそうかもしれないね。

H Rなのに地球人の私達に怯えているんだから。

呆れと同時に…わからなくもないかなあとも同情していた。

【パスティーユ】に守られているといっても、私達はパイロットとして務める身。

いつ落ちるかわからない恐怖に怯えてもおかしくないよ。

マルロ本人が【ラストコア】に自分から協力を申し出るようになるまで、私達兄妹が側につけと指示が出た。

平日のいない間は、アレックスさんが代わりにマルロの側につく状況になるけど。

とにかく、1人にはさせないようにしてくれとは言われた。

何か策略を立てないか心配だからって。

なので、私達兄妹とマルロの半共同生活が始まったのだ。

訓練も勉強も日常生活でも。

【ラストコア】にいる時はマルロという事を強いられた。

強制的で苦痛になるかと思えば、そうでもなかった。

むしろ、マルロに関しては…新たな発見をしたんだ。

これは貴重な経験だった。

特に面白いと思わせたのは、マルロが熱に弱って特徴を知った時だった。

愛嬌市は6月の梅雨が明けると、本格的な夏が始まる。

海底の【ラストコア】内では、冷房が効いていた。

マルロの特徴を初めて知った時、ちょうど昼食のランチでメニューを運んで食べようとしていた。

ランチメニューには毎回、スープか味噌汁が付くんだ。

でも、マルロが運んできた昼食のランチメニューに…スープ類は存在しなかった。

喉が詰まらないように、冷たい水やお茶類は提供されていたけど。

この状態が1回、2回程度の稀な頻度で見かけたなら、私は特に気にしなかった。

スープや味噌汁にも、個人によっては好き嫌いはあるから。

マルロの場合、スープや味噌汁がトレーの上に乘せられていない事が毎日あったんだ。

自慢は行き過ぎかも知れど、[ラストコア]の食堂のスープや味噌汁は美味しい。他の献立ももちろん。

不味かったら提供できないはずだ。

マルロはスープや味噌汁を頑なに拒否しているように見えた。

食べる時も一緒なので、いい機会だから彼に聞いてみた。

「ねえマルロ。」「…なんだ。」

いつも不機嫌な顔をしているマルロだけど、[ラストコア]に来てからは大人しくなっていた。子供の私達に耳を傾けてくれた。

兄達は私とマルロの隣で食べている。

最初は警戒していたようだけど、段々と慣れていったみたいだ。

私は回りくどい言い方をせず、疑問を直接ぶつけた。

「何でスープや味噌汁を飲まないの？」

本当に何気ない、日常的な疑問である。

気に障らないのであれば、素直に答えられるだろう。

マルロの顔は、ますます陰しくなった。

元々ムツとした不機嫌な顔をしていた彼だけど、今の疑問で更に増しているんだ。

おかしいなあ、と私は気づいた。

「…ダメな事、私言ったかな？私…度々あるからね。」

これにはマル口が…ではなく。

私の隣で食べていた勇希兄ちゃんが答えた。

「え？普通じゃねえの？未衣子が変な事言うてくるのはいつもだけだよ。」

後ろの余計な発言はやめて欲しいな、勇希兄ちゃん。

言っても聞かなそうだけど。

和希兄ちゃんも反応した。

「うーん。捉え方は人それぞれだからなあ。ひょっとしたら、彼にとっては触れてはいけない内容だろうな。」

「あまり細かく気にしないぞ、俺は。」

和希兄ちゃんの隣でマル口が言った。

パンをちぎって口に含んでいた。

パンを喉に送った後、牛乳を一口飲んだ。

コップを置いたマル口は、私の疑問に答えた。

「…種族柄だ。天王星圏は極寒の星の集まりで、寒さや冷たさに慣れているんだ。」

なるほど。マル口の肌も色白いのはその傾向が強いからなのか…。

「でもよ、それとスープが嫌いなのと何の関係があるんだよ？」

「嫌いではない。味や匂いは好きだ。」

「じゃあ、飲めるんじゃないかねえの？味いけるんだったらよ…。」

勇希兄ちゃん、ぐいぐい行き過ぎ。

でも、気持ちはわかる。

私も味が苦手じゃないなら、飲める筈だと思うから。

マル口は素直に理由を吐いた。

「…熱が苦手なんだ。炎をトラウマに抱えていてな。調理場の奥の湯気に気づくと、あのカップに入った熱い液体に、唇が触れるのが怖くて。」

「…かなりの猫舌ですか？」

「猫舌ならまだマシな部類だ。」

つまり、猫舌なんかより酷いんだ…。

「じゃあさ、未衣子は料理してるから気づくけどよ…スープ以外にも熱いおかずとかあるよなあ？あれはいいのか？」

「スープよりすぐに冷えるからな。まだ許容範囲内だ。」

「うえ…。焼肉なんかを冷やして食うのかよ…。」

はしたないよ、勇希兄ちゃん。

まあ、冷たい焼肉なんて想像はできないな…。

でもスープならバリエーションが豊富なんだけどな。

例えば、

「逆に冷製スープとかなら食べられるんじゃないかな？冷製パスタとか冷やしラーメンとかも注目を浴びているんだけど。」

もうすぐ夏本番に入るし、このラインナップは盛り上がるんだ。

すると、マル口の両目が大きく開かれた。

視線はもちろん私に向けて。

「原始地球にも、冷製スープがあったのか？我らの母星よりも温暖なこの青い星に？」

「一昔前のドラマで、冷製スープが話題になったんだよ。今は市販の専用調味料も販売されているからね。」

私の説明に、マル口は驚いた。急に、私の肩に手を置いた。

「作ってくれる、のだろうか？」

「あー、そっか。リクエストして作ってもらえるのかしら…。」

「調理師さんも［ラストコア］のスタッフですしね。西条司令がジェームズさんの許可を出さないといけないでしょうね。」

「許可すだろ？え？ダメなのかよ？」

もう、全員が冷製スープを食べられるかどうかわからないじゃない。

空気読めないかなあ、勇希兄ちゃん。

「え？なんだよ、ため息ついてよ…。」

「別に。申告すればOKとか思っている人がいて呆れてるだけ。」

「それ、誰の事だよ！」

「やめるんだ勇希。未衣子も揶揄うな。」

立ち上がった勇希兄ちゃんを、和希兄ちゃんが手で合図を出して止めていた。

私も和希兄ちゃんに、はいと返事した。

「冷製スープ…。」

「もしくは、さっきの2人よりアレックスさんに申し込んでもらう方が、スムーズに行くんじゃないでしょうか？密接に関わっているんですし。」

「検査で隅々まで弄られるから、嫌なんだがな…。」

マル口は横目で逸らしていた。

アレックスさんが苦手らしく、困った表情になっていた。

ちぎったパンを食べて、飲み込んだ後にマル口は言った。

「奴とは話す機会がいくらでもある。要望が通るのならば、申し込んでみるさ。」

「私達も付き添いでお願いしようか？」

私が良い方向に持っていきやすくする為にマル口に聞いた。

彼はサラダの皿を平らにして、牛乳を一口飲んだ後に、こう返した。

「それぐらいの話で、奴は装置を動かそうとは思わないさ。」

「大袈裟よ。アレックスさんはまだ温和な人よ？」

「…俺の犯した罪が、いけないんだけどな。」

マル口はアレックスさんから受ける冷遇の意味を理解していた、ようだった。

これから訓練の予定が組まれている。

ダラダラとランチを食べる時間はない。

トレーの献立が全て空になった人から、次々と片付けに入り、食堂を後にした。

★★★

私達3兄妹の、[ラストコア]のパイロット期間は3ヶ月である。

6月が終わって7月になると、自動的に《期間満了》になる。

なので期間が終わると、普通の生活に戻る。

何事もなかった、という状態になるんだから、それはそれでいいのだけど。

本来、命に関わる業務だったし。

兄達はともかく、私の心の中は…武人兄ちゃんの行方の不安でいっぱいだった。

最初のマル口の部隊と交戦した時にいなくなってから、余計に。

アレックスさんが間に入ったおかげで、マル口への警戒心は和らいでいったけど。

武人兄ちゃんを連れ去ったのは、許せなかったんだ。

これもマル口には面と向かってはっきり言った事もあった。

当の本人は「任務でやらされただけ」と主張していたよ。

逃げてみたいで納得いかないんだけど、この人の年齢を考慮して、

(大人だから、誤魔化しもするんだね。)

と割り切った。

マル口との仲は…この時以降は普通の仲だった。

当然親密になる事もなく、かといって頻繁にケンカを起こす程でもない。

マルロも皮肉屋で、反応しやすい勇希兄ちゃんとは口論になっていたけど。

ただ、《期間満了》まで同じルーティンをこなしていった。

訓練も勉強も続けていた。

時は、《期間満了》まであと1週間くらいの所まで進んでいた。

統制制御室に用事があり、私達3兄妹は訪れていた。

無事に終わって、外の通路に出ようとした時だった。

女性のスタッフさんが、声を掛けてきた。

その人は以前、私とランチと一緒に食べた付き合いがあった人物である。

私はお姉さんの元へ歩いていった。兄達もついて来た。

「久しぶり、未衣子ちゃん。」

「私の名前…。」

「そりゃあ覚えるわよ。専属パイロットの名前なんて。」

そうだね。お姉さん達を含め、スタッフさん達は仕事として私達に付き合ってくれているんだし。

「もちろん、和希君も勇希君もご存知よ。」

「あ、ありがとうございます。」

和希兄ちゃんはペコリと頭を下げた。

「そんな畏まらなくてもいいわよ。私が用事あって、君達に声を掛けたからさ。」

「それで、用事って何ですか？」

「ぶっちゃけ、大したもんじゃないんだけど…。」

お姉さんが上着の内ポケットから横長の封筒を取り出し、はいコレと言って差し出した。

「…これは？」

私は封筒を受け取って、お姉さんに中身を尋ねた。

お姉さんが開けていいよ、と言ってくれたので、すぐに封筒を開けた。

テープやのり付けはされてないので、開封には1秒もかからなかった。

中身は、2枚のチケットだった。

娯楽施設の入場券だと、チケットの文字でわかった。

…場所が他の地域だったら、ここまで驚かなかっただろう。

それほどチケットの内容に、私達は目玉をくらった。

「[天海山ユートピア]!？」

大声を出したのは、ご覧のとおり勇希兄ちゃんである。

和希兄ちゃんと私は施設名を言わないけど、反応は勇希兄ちゃんと似たような仕草をしていた。

「暇な時に懸賞に応募したら、当選しちゃってね。これが家電とかだったら自分で使ったんだけど…。私達スタッフは特別な事情がない限り、外に出れないからねえ。だから、君達にあげようと思って。…2枚だけだから、1人は料金いるかもね…。」

お姉さんが経緯を話してくれた。

チケットを持っていた私は両脇の兄達をそれぞれ確認した。

和希兄ちゃんは…。

「俺は遊園地はちょっと…苦手だから、勇希と2人で行ってきてもいいぞ？」

勇希兄ちゃんは…。

「うーん。どうも乗り気になんねえんだよなあ…。[天海山ユートピア]って、あの[天海山ユートピア]だよなあ？」

2人とも困惑していた。

和希兄ちゃんはこういう娯楽施設より、博物館や美術館の方が好みなのは知っているから、断られても気にしない。

勇希兄ちゃんも…空手やっている割にはビビりな所あるからなあ。

今話題にしている〔天海山ユートピア〕は、１０年前の事件の現場とは違う場所で行っている。

襲撃事件の起きた旧地の地下、海底に〔ラストコア〕を構えている。

なので、今絶賛開園中の〔天海山ユートピア〕は全くの別物と捉えたらいいのである。

１０年前の、宇宙人の新略的な大規模な襲撃事件であれば、人々の記憶に残る。

当然、娯楽施設の名前で恐怖で震える人も存在する。

移設当初は改名運動が起きていたと、アレックスさんから聞いた。

あえて改名しなかったのは、膨大な費用がかかるのもあったが…宇宙人、所謂他星人らに負けたくないという強い意志があったからだとも。

私もテレビとかで現在の娯楽施設の様子を観ているけど、凄い設備で守られているのは知った。

最近の〔ホルプレス〕の集団やマル口の部隊が襲ってきても、今の〔天海山ユートピア〕は無事だった。

ドーム型の半透明バリアが、ある程度の強度を保つ。

この技術は、アレックスさん達が〔ラストコア〕内で開発された防衛設備だ。

つまり〔ラストコア〕は、単に敵の討伐ばかりやっていないんだ。

周りの人達は〔ラストコア〕の活動を、誤解している。

司令達も実情を隠しているのも原因なんだけど。

話は逸れたので。

お姉さんに渡されたチケットなんだけど…。

「乗り気じゃないなら、誰かにあげてもいいわよ？懸賞品だから、お金かかってないし。行ってみて欲しいからあげたけど。」

お姉さんのセリフである。

彼女は本当は優しいんだろう。

世話焼きすぎるよ、と私が不安になるくらいには。

予期せぬ出来事で悪人のレッテルを貼られたのに恨んでなくて、逆に前向きに目先の仕事をこなしている。

私相手じゃなかったら、道を外した人を更生していたかもしれない。

レールがレールじゃなかったら、今頃お母さんにでもなっているかもしれない。

景品扱いのチケットと言っても、私にはお姉さんからの頂き物には変わりはない。

だったら、私がチケットを使おう。

「ありがとうございます。私は行きます。」

「そう。乗り気でいてくれて嬉しいわ。」

お姉さんは笑顔を見せてくれた。

これで1枚のチケットの消費は確定した。

残りの1枚を、どうするべきかだけど…。

「未衣子、行って大丈夫なのかよ？」

「外出には、1人で出て行ってはいけないとお婆ちゃんに言われているだろう…？」

「相手は見つかってるのかよ？」

「え？どういう意味？」

ちょっと2人共。お姉さんが困惑しているじゃない。

「相手は探すわ。兄ちゃん達は行く気ないでしょ？」

「ちょっと怖いだけだろうが！未衣子が行くなら俺も行くって！」

「たかだか遊園地なんだよ？施設内は安全対策しているわ。」

「今襲撃が頻繁に来てるだろ！」

私と勇希兄ちゃんはその場で口論になった。

あちゃー、と言わんばかりの表情をお姉さんがしていた。

「期限に縛りはないのよ。気になるなら、期間満了後に自由に行ったらいいだけよ。あと半月すれば、日本の学校は長期休暇に入るじゃない。その時に仲良く行ったらどう？」

お姉さんの提案は的を得ていた。

期間が満了したら、【パスティユ】のパイロットをしなくていいどころか、
[ラストコア] にも行かなくていいんだ。

ごく一般の、学生の身分として生活していける。

それだったら、何も怪しまれる事なく、普通に娯楽施設を楽しんでいけるだろう。

楽な方向をとる事が可能なんだけど、私は嫌だった。

《期間満了》。この言葉を耳にただけで、私の心が痛む。

まだ、武人兄ちゃんが戻ってきていない。

それどころか、私達は兄ちゃんと再度会ってもいないんだ。

このまま何の進展もなく、終わってしまうのは嫌なんだ。

私は決心した。《期間満了》までに、思い出を作ろうと。

この行動が武人兄ちゃんの救出に全く意味がなくとも。

私は自然と、お姉さんに聞いていた。

「[ラストコア] のスタッフさん達の中で、外出できる人はいませんか？」
と。

結末は知っていたけど、お姉さんは戸惑った反応をした。

「いや…そもそも許可がいるし、外出方法は限定されてるし…」

「ジェームズさんは頻繁に出てますよね？」

「あの人は特別よ。調査がメインだし。それでも仕事以外は外出してないわ。」

やっぱり、厳しいんだね。[ラストコア]の規則が。

「もういいだろ未衣子。夏休みに俺と行こうぜ。」

「嫌よ。」

「ワガママ言うんじゃないよ！遊びに行くんだったら落ち着いてからの方がいいじゃないか！」

「こればかりは勇希の肩を持つよ未衣子。スタッフさん達だって大変なんだ。」

そうだよ。和希兄ちゃんの言うとおり。

何でもかんでも要望を言ったらダメだ。

スタッフさん達は無理だ。

そうになると、おのずと範囲は絞られていく。

他には…。他？

そうだ。可能性はありそうだ。

私は統制制御室を出ていく為に、お姉さんに別れの挨拶をした。

「ご迷惑をおかけしました。解決しましたので、私達はここで失礼します。」

「え？いいの？」

お姉さんは終始混乱していた。

「大丈夫です。行こう、兄ちゃん達。私、用事があるから。」

「ちょ、用事って何だよ！」

私は振り向いて、先に歩き出した。勇希兄ちゃんが慌ててついてくる。

和希兄ちゃんもお姉さんに一礼してから、私の後を追った。

通路に出ると、私は早歩きである部屋に向かっていった。

「勝手に動いてよお、どこに行くんだよ！」

と勇希兄ちゃんがうるさく吠えるので、私は正直に行き場所を伝えた。

「アレックスさんの研究室よ。」

「アレックスさんも【ラストコア】の一員だぞ？【ユートピア】は後日にしろってあれ程…。」

「違うわ。」

私は急に歩みを止めた。

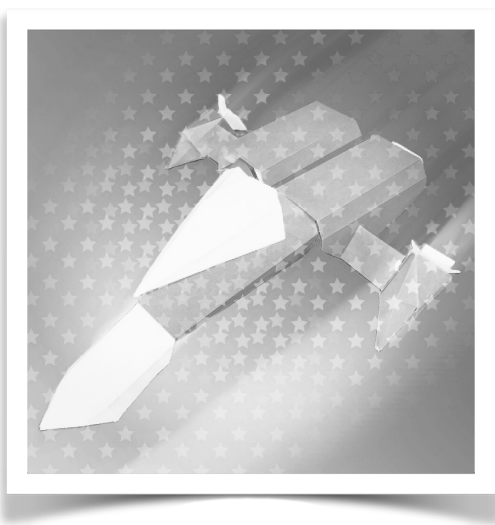
兄達も同調して、間隔を空けて止まった。

私は顔だけ兄達に向けて、誘う人物を告げた。

「【ラストコア】のスタッフさん達は誘わないわ。私が誘うのは、

マルロ・ヒーストンよ。」

7・供述の日



※警告※

この章は主だった年齢制限はかけませんが、性的描写を匂わせるシーンがあります。

こちらの警告を留めた上で読む事をお願いします。

なお、性的描写に関する苦情は受け付けませんので、ご了承ください。

☆☆☆

お姉さんから2枚のチケットをもらった私は、思考の末にある人物を訪ねようとした。

それは兄達に告げたHR、マルロ・ヒーストンである。

彼は私達兄妹と共に行動する以外は、アレックスさんの研究室に籠る事が多い。

だからマルロに会う為にはまず、研究室の訪問は欠かせないのだ。

目的はただ1つだけ。

マルロを〔天海山ユートピア〕に連れて行く事だ。

〔天海山ユートピア〕は娯楽施設であって、ただの遊園地ではない。

大浴場などのやすらぎの空間の場もある。

なので、わざわざ施設内の遊具に振り回される必要はない。

施設内を歩くだけでもいいんだ。

急足で研究室へ向かう。

統制制御室からそう遠くないので、時間は掛からなかった。

研究室の自動ドアの前。

ロックが掛かっているので、先に隣のインターホンでアレックスさんと相談しようとした。

アレックスさんは室内にいたので、私達は入室許可をもらい、入っていった。

客室用に行ってくれと言われたので、私達はその場所で待機した。

アレックスさんの研究室は広い。

3階建てのビル1棟分はあるんじゃないかと想像させる程には。

室内にエレベーターもあるみたいだし。

ソファーに座ったまま待っていると、アレックスさんが誰かを連れてやってきた。

マルロが憂鬱な表情で連れてこられた。

何だろう。労働をさせられてヘトヘトになった感じをマルロから匂うんだけど。

「大丈夫ですか？彼。」

原因はアレックスさんかな？と大方察していたので、私は聞いた。

アレックスさんは営業スマイルの対応で答えた。

「寝たら回復するさ。」

回復するのだろうか？と疑問に思ったけど、アレックスさんがの笑顔に隙がないので何もつまらなかった。

研究室へ来た目的を、私ははっきりと伝えた。

断られる場合もあるかもしれない事も、頭の片隅には入っていた。

これで無理だったら、[天海山ユートピア]には満了後に計画するしかない。

反対も覚悟して、アレックスさんの反応を伺った。

ところが…彼の返答は意外にもあっさりだった。

「いいぞ。許可を貰っておこう。」

「え…いいんですか？」

「ジェームズだったらうるさかっただろうな。コイツの責任者は俺に押し付けられている。俺も監視として見張っておくよ。」

「ありがとう…ございます…」

私はお礼を述べたが、歯切れが悪かった。

側にいた兄達も動揺しながらも、お礼をした時は一緒に下げてくれた。

当の連れて行かれる本人は。

「ちょっと待て。勝手に予定を入れるな！」

案の定、アレックスさんに怒っていた。

怒られた人は全く気にしてない。

逆にアレックスさんはマル口に、説得していた。

「ちょうどいい機会だ。観光でもして気分を晴らしてきたらどうだ？こっ酷くやられていてボロボロだぞ、お前。」

「貴様が検査の名目で、身体を弄るからだろうが！」

マル口の怒声は大きくなっていた。

HRなのに、なんか威厳が小さいなあ。

アレックスさんは人の管理にも長けているんだろうな。

20代半ばという若さなのに、大人な対応ですごいよ。

「…検査はまだまだやり足りないのだが、今日は中止にしよう。施設の場所は近いから、明日でも遊びに行けるだろう。外出用の輸送車は選べんかもしれないが、それでもいいな？」

条件は色々つけられた。

私が急に誘ったんだし、これぐらいの辛抱は仕方がない。

「で、チケットはあるのか？」

「2枚貰いました。」

「足りないだろう？」

「行くのは、私とマル口だけです。兄達は乗り気じゃないらしいので。」

「…愛嬌市民なら、名前だけで怯える者もいるからな。」

兄達の拒否の意思の背景を、アレックスさんは知っていた。

嫌がるのも無理はない、と思っていた。

「遊びに行くといっても、体調管理は必要だ。未衣子、君は十分な睡眠と適切な食事をするように。特に愛嬌市はこれから暑くなっていく。熱中症にはなるべく気をつけろよ？」

「わかりました。」

アレックスさんは心配してくれた。

その期待に応えるよう、私はすぐに返事をした。

ここで、異議を唱えた人が1人いた。

ご対面の時からずっとげっそりして暗かったマル口だった。

「お前達！捕虜扱いだからって、勝手にポンポン物事を決めるな！」

噛み付くように言ってくるので、アレックスさんがマル口の胸倉を掴んだ。病院着のようなインナーは、生地伸びがあった。

マル口はアレックスさんより頭1つ分は小柄なので、物理的には丸め込まれやすかった。

HRでも、生物形態だと大した事がない他星人もいるんだね。

油断は禁物だけど。

食堂での謝罪の時同様、アレックスさんはマル口に耳打ちしていた。

マル口は終始苦い表情をしているので、アレックスさんは脅しをかけているのだろうと見て取れた。

ほんのちょっとだけ、同情はする。

〔ラストコア〕及び愛嬌市を襲撃してきたのはマル口だし、同情の酌量は小さいけど。

観念したマル口は、わかったと小さな声で言った。

これで、お姉さんから頂いたチケットの使用が決定した。

明日、マルロと新しい〔天海山ユートピア〕に行く。

遊園地のアトラクション系は苦手だけど、『娯楽施設』と名前を売ってるし、他にも楽しめるフロアがある筈。

そこ中心で回ろう。

★★★

アレックスさんとの打ち合わせから翌日。

〔天海山ユートピア〕に遊びに行く日。

たった半日以下の時間で、輸送車を呼び寄せたなぁと感心していた朝。

〔ユートピア〕に行く私と送り迎えする兄達は、駐車場の黒塗りの車の前にやってきた。

アレックスさん達は遅れて来た。

マルロはアレックスさんに手を引っ張られるようにして歩いていた。

本当は、よっぽど嫌だったんだろうな。

〔ユートピア〕は総合的な娯楽施設だし、マルロも今日でストレス発散できれば問題ないけど。

アレックスさんには絡まれるので、ストレスの解放は難しいかもしれないね。

メンバー2人揃ったところで、私とマルロはすぐに黒塗りの輸送車に乗った。

窓は完全に真っ黒で、外は見えない。

これは〔ラストコア〕の場所を特定されない為の対策である。

H/Rが乗ると見破られる可能性はあるだろうとアレックスさんは言ったが。

《最終兵器》の一言で、私達は納得させられた。

ドアが閉められると、輸送車は動き出した。

窓が黒塗りなので、送り迎えの兄達が手を振る姿は見れなかった。

微かに、勇希兄ちゃんの「気をつけろよ！」の声だけは聞こえた。

音も大分シャットアウトされている。

運転席と後方座席はみっちり壁で仕切られており、運転席は拝めない。

「天海山ユートピア」の駐車場に停めると言ったので、それまでは車内でゆっくりしていた。

マル口はまだ、不服な様子だった。

強制的に連れてこられたもんだし、仕方ないか。

「こんな所に入れられて、楽しいか地球人。」

「[ラストコア] だけよ。普通の車はちゃんと窓つけてるわ。」

「書物の通り、か…。」

「あなたも、勉強するのね。」

「当然だろう。目的達成の為に戦略を練らないと厳しいからな。」

苦勞はしているんだね。

私はなんとなくそう思った。

輸送車のスピードは快適で、速くも遅くもない。

揺れも少ないし、これなら酔わずに済みそうだな。

★★★

「天海山ユートピア」に到着した。

駐車場は建物型の立体的な駐車場だった。

運転手さんも1人いるんだけど、この人は車の中で待機するらしい。

ちょっとの間、仮眠を取るとの事で大丈夫だとアレックスさんは言った。

ドアを開けて駐車場の敷地内に降りて、案内に従って歩いた。

駐車場から入場口までの距離は、案内に沿って行けば近かった。

開園時刻は《10:00》であり、入場口は人集りが出来ていた。

私より幼い子供から大の大人まで、いろんな人が〔ユートピア〕へ遊びに来ていた。

マル口は熱気を感じる、とか言って軽い目眩を起こしかけたようだった。

入場口のゲートは建物内に設置されているし、私達の順番は前の方。

建物内は冷房が効いているし、暑くはないんだけど。

この人集りかな…。

まだ夏休みはおろか、7月も突入していない時期に、建物内は満員状態。

人間の熱は微々たるものだけど、集まればそれなりの熱はひしひしと伝わる。

私は1つ、マル口に案を出した。

「まずはゲートを通して、休憩所を目指しましょう？丸1日時間をくれたから、遊ぶのは調子良くなってからにしよう？」

「…そんな場所があるのか。わかった。お前に任せる。」

マル口は気力を失いつつあるのか、〔ユートピア〕内の行動を私に一任した。

時間は私のブラウスの中に忍ばせた《転送装置》のペンダントでチェックできる。

開けてみると、デジタル時計は《10:00》を示すようになった。

〔ユートピア〕側にも時計は存在する。

開園の案内の開始時期は、あちら側の時計で判断される。

数秒程度のズレが生じるのは、仕方ない。

やっぱりか、というような感じで。

建物内に開園のアナウンスが流れた。

ゲートの通過が可能になると、並んでいた人々が前へ前へと歩み始めた。

私とマル口もそれに倣って、ゲートまでゆっくり歩く。

ゲートの手前で、チケットを通した。

バーコードをかざすタイプの改札口だった。

【パスティーユ】の操縦もこなせる私は、ちょっとした機械を利用した作業は苦じゃなかった。

ゲートを通過すれば、開放感があった。

入園者の皆が行く場所は、個々によって異なっている。

早速遊園地サイドに行って遊びに行く家族。

温泉などのリラクゼーションの施設に行く大人。

多種多様で、いろんな人が楽しめる娯楽施設だと、改めて実感した。

ややクラクラしているマル口の為に、私は休憩所らしき施設を探さなくては行けない。

簡易的な案内図は、昨夜に閲覧室から紙でコピーして持参していた。

どこか、冷房が効いているベンチのある場所を、私は探していた。

★★★

探し回って見つけたのは、飲食店の市場の出入り口付近であった。

大企業の会社の敷地ぐらいの規模の建物の中に、市場が収まっている仕組みとなっていた。

遊園地サイドでも似たような休憩所があったんだけど、乗り物の音が気に障るのを心配した。こっちも騒がしいのは騒がしいけど。

人が行う集客の為の呼びかけ程度だったら、比較的マシ。

それでも出入り口から離れた方のベンチに、私とマル口は座った。

【天海山ユートピア】のチケットは入場料と他のおまけ分の金額しか含まれていない。

それ以外の支出は用意しなくては行けない。

アレックスさんがお金を持たせてくれた。

持参のお金で、自販機のお茶を2本購入した。

苦味の少ないほうじ茶だったら、マル口でも飲めるかな。

チョイスは私が決めた。

ベンチに座ったマル口の調子は、入園前と比べれば良くなっていた。

深く座ったので、それでも疲れは残ってたみたいだ。

断れないから、一緒に来てくれた。

ほんのちょっとだけ、申し訳ない気持ちはあった。

「[ユートピア] 内をぐるぐる回りたかったけど、今はマル口の体調を気遣いたい。」

彼の隣に、私は座った。

「具合はどう？ マシになったの？」

「…若干な。」

「良かった。アレックスさんにも言われているからね、あなたについては。」

「だったら、引っ張って行く必要はなかっただろう。」

「そうね。《期間満了》後に兄達と一緒に行けば、もっと楽しめたかもね。」

「なぜ俺を誘った。楽しくないんだろう？」

マル口はベンチにもたれたまま、ペットボトルのお茶を飲んだ。

私の突発的な行動に呆れているんだろう。

私は特にやましい事は考えていないので、はっきりと言った。

「思い出づくりだよ。[ラストコア] での。」

「お前達を戦場に駆り出した悪魔の基地だろう？ 何故奴らにそこまで肩入れする？」

「[ラストコア] じゃないよ。武人兄ちゃんだよ。」

「俺は言った筈だ。奴は立派な《犯罪者》だと。」

しつこく返答してくるマル口。

別にドン引きはしてないけど、対応に困るなあ。

アレックスさんの尽力で、大分話しやすくなったのに。

鬱陶しくなりがちなので、私は自分の秘密を告白した。

「…武人兄ちゃんの、『夢』しか見れないから。」

「ああ。研究者からその異常は聞いている。」

「そう。ならわかるよね？」

「わからんな。奴はいない。固執しすぎではないか？それ以前に貴様の年齢では、学校という学び舎にも通っているだろう？誰でも学べる平等な環境らしいと、研究者は述べていたが？一体、何が不満なんだ？」

アレックスさんから色々聞いてるのね、マル口。

そこまで言うなら、もういいや。

私は自分の過去を、洗いざらい話そう。

「じゃあ、教えてあげる。私の小学生時代の辛かった過去を。どうして私が学校嫌いになったのか、その経緯を話すよ。」

「…自分の内側を暴露して大丈夫か？」

「あなたがそれを言うの？」

「…悪かった。続けろ。」

★★★

小学生になる直前の頃、私の母はいなくなってしまった。

父や祖父母に聞くと、もう会えないと言われた。

和希兄ちゃんは大泣きしていたが、勇希兄ちゃんと私は下に俯いただけだった。

母との思い出は、旧〔ユートピア〕で家族と遊びに行った時しか、なかったのだから。

元々から、同じ男の人、おそらく《武人兄ちゃん》の夢しか見れなかった。

母がいなくなってから、鮮烈にこびりつくようになった。

そのまま、私は小学生へ上がった。

入学式は、お婆ちゃんと兄達と一緒に来てくれた。

最初は学校が楽しみだった。

私は好奇心が強いタイプだ。

未知なる事柄についての勉強に期待を寄せていた。

幼稚園とは違う新しい仲間とのふれあいにも、ワクワクしていた。

友達はできた。親密になれたのは3人ぐらいだった。

最初から私は、《武人兄ちゃんの夢》を語っていた。

その時は3人とも、『面白いね』と笑ってくれた。

それで私はつけ上がってしまったのだ、と後悔すればよかった。

小学校低学年の頃は、そんな道徳を持ち合わせていなかった。

ほぼ毎日、学校で友達の輪に入っている時に、《武人兄ちゃんの夢》を話す。

最初は笑ってくれた友達も、次第に苦い顔をするようになった。

飽きてきたのだろう。

苦渋の表情を見せた友達の1人が、私に『他に好きなものないの？』と聞いてきた。

私は首を傾げた。

《好きなもの》は既に読書とか、料理とかあったし、彼女達には紹介しているから。

何故今更それを聞いてくるのか、私には不可解だった。

でも私は再び、《好きなもの》の説明をした。

そしたら他の友達の1人が、漫画やファッション雑誌を貸してくれた。

ついでに男性アイドルやアニメの映像ディスクも。

『これで興味持ってくれると嬉しいなあ。』と彼女は言った。

家に持ち帰った私は、漫画や雑誌を読んだ。

アイドルのライブやアニメの視聴も行ったんだ。

私の心には、響かなかった。

漫画やアニメの出来も、男性アイドルや俳優さんも綺麗だった。

不満点は一切なかった。

私にはピンと来なかったのだ。

やっぱり《武人兄ちゃん》と比較してしまう。

一度だけ全体を通して見た後は、すぐに友達に返した。

気を遣って、良かったねと言っておいた。

当時のトレンドに夢になる友達に合わせる為に、最低限の努力はした。《武人兄ちゃん》の夢以外に、教養や知識を溜め込んで、人に合わせようと頑張った。

ちょっと口を出す事もあれば、友達の意見に相槌を打っているだけの時もあった。

こうして、小学校低学年の頃は難なく過ごしたんだ。

中学年、3年生に上がってから、状況が一変した。

友達の1人が、私を軽蔑し出したんだ。

残りの2人も、彼女に同調していた。

何で？と私は聞いたんだ。

彼女は理由を話した。

『あんた、楽しいかと思った事ないでしょ？』と。

ここで、バレたんだなと私は気づいた。

心底つまんないと考えている流行り物を、私は一生懸命に誤魔化して『面白い』と言い続けていた。

嘘をついているのを、彼女達は知っていたんだ。

この時、かけがえのない友達を失いたくない一心で、否定していた。

私がそう言っただけで、この場はなんとか凌げた。

気まずかったけど平気だった。

友達に不快感を与えないように、私は流行り物の知識の定着を強化した。

もっと念入りに勉強しないといけないと、自分に言い続けた。

《武人兄ちゃん》の代わりに、私の抛り所になれなかったとしても。

3年生の、年が変わるまでは、頑張って友達と波長を合わせる事に積極的だった。

暦が変わるのは、日本だと決まって寒い時期だった。

友達の1人が、私を呼んだんだ。

初めてその友達を詳しく紹介するんだけど、実はお金持ちの子で、豪邸に住んでいたんだ。親が議員や高官で相当稼いでるらしくて。

その友達は私だけ呼んだ。他の友達は、来なかった。

友達は自分の豪邸に私を案内したんだ。

学校以外で遊ぶ事が少なかった私にとっては、新たな楽しみに内心興奮していた。

ところが。私の期待は、裏切られてしまった。

それも、とてつもなく悪い方向に。

友達の豪邸に私はお邪魔した。

廊下を歩いてる時までは、私はウキウキしていた。

豪邸は上の階も広々とした部屋があった。

友達から私はそこに入らされた。

あやしい空気を感じたんだ。

部屋のつくりはまだいい。装飾品が派手だけど、ドラマとかに出る豪邸の居間ってこんな感じなんだなぁ、って想像できるから。

人が、怖かったんだ。何故、男の人が3人いたのか？

「私の兄と、兄の仲間よ。」

友達はしれっと答えた。

そうなんだ、と納得は…できなかった。

友達にお兄さんがいた事は、前から知っていた。

対面で改めて紹介してもらえたのはよかったと思った。

友達と私はうまく合わせているだけの、薄っぺらい友情関係を維持していたから。

友達のお兄さんも、仲間？と呼ばれた人達も、目が怖かった。

口角を上げて、ニヤニヤ笑っている。両目がギラついている。

ゆっくりと、1歩ずつ、私に歩み寄ってくる。

私は得体の知れない恐怖を、人生で初めて感じた。

ここから逃げないと、と脳内でわかっていた。

それが、できなかった。せっかく友達の秘密を知ったんだ。

それを拒んだら、今度こそ嫌われる。

だから私は部屋のつくりだけ豪勢な空間で、じっとしていた。

友達のお兄さん達の両手が伸びてきた。

1人が私の腕を、強引に引っ張った。お兄さん達の間近に寄せていた。

彼らの腕力は、強かった。6本の腕と6本の脚に絡まれて、抵抗しても逃げられない状態にされた。

私は友達の名前を、力強く叫んだ。

友達はまだ、自宅の外に出ていたらしい。

お兄さん達は私の動きを封じ込めるように、太めの手で私の体を触った。頬に、肩に、腹に、脚に…恥ずかしい所にも触られた。

彼らは触るだけでなく、舐める行為も始めた。

服を少しずつめくって、肌に直接、舌で舐めてきた。

お兄さんは主犯格で、私の唇をこじ開けて、無理矢理汚い唾液を含ませてきた。

私は今までに味わった事のない、変な感覚にゾワッとした。

自分の目には、涙の粒も溢れていた。

涙の跡も、お兄さんは下から上へと舌で舐め取っていた。

私は彼に、耳元でこう囁かれた。

『今から気持ちいい事をするんだよ。』と。

気持ちいい？

違う。『気持ち悪い』の間違いだよ。

私の身体が、手汗と唾液で汚れてきているのに。

おかしい、この人達本当におかしい。

友達がどこかに行った以上、私はどうにか抜け出したいと願った。

はっきりと、拒む意志を伝えた。

お兄さんの表情が冷たくなった。

微笑みも稀かったけど、変化後は一層怖さが増した。

私の目を見て、冷徹に告げてきた。

『君を《普通》にさせる教育を施せと釘刺されたんだ。大人しくしろ。』

この発言以降、お兄さん達の表情に気迫さが加わった。

乱暴に扱われるようになった。

服を脱ぎ捨てられて。変な所を触られて。痛い所を、突かれて…。

私は最中、ずっと泣き叫んでいた。

でも、お兄さん達は乱暴な振る舞いをやめない。

むしろ、暴走は加速していく。

ほらほら、と言いながら、私の身体を乱雑に扱った。

抵抗しようにも無力な私に対して、ヘラヘラと笑っていた。

怖い、そして気持ち悪い。これが、大人の人達の、《普通》…？

もう嫌だ。私は《普通》なんて、求めたくない。

こんな惨めな思いを、毎日続けていくならば…！

時間の経過なんて、酷い扱いを受けている私にはわからなかった。

3人の年上の男性と不平等な関係になっているだけだ。

部屋の中は大層豪華なのに、時計の1つ2つも見当たらない。

私の体力がすり減っていく。

泣き叫ぶ声が弱くなっていたのが、自分でも感じ取っていた。

男の人達の『気持ち悪い』手つきも、『痛い』行為も慣れてしまった。

嫌と泣き叫んでいた声も、ハアハアと息を伴う声に変わっていった。

計画を企てていたかのように、お兄さん達は最後にニタリと笑っていた。

私は未だに涙を目元に溜まったまま、彼らの勝ち誇った表情を前にして、瞳を閉じた。

不幸中の幸いだったのが、当日中に2人の兄達に助けられた事だった。

時間の経過を教えてくれたのが、救われた後だった。

あのままお兄さん達にいじめられていたら、私の生命にも支障がきたしていたかもしれない。これも後から聞かされた。

しばらくは無気力で、感情表現はできなかった。

私が無事に復帰できるように、兄達がお兄さん達を怒鳴った。

「2度と会うんじゃない！」と勇希兄ちゃんが全員を殴った話も聞かされた。

祖父母と今成区にいた父が、友達『だった』人の親族と交渉に挑んだ。

結果は…多額の慰謝料を一括で渡されたままで終了されてしまった。

父は裁判起こそう、と祖父母に提案していたが。

こちらは一般の住民、相手は権力持ちの偉い人。

あの手この手で言いくめられてしまって損するので、お金を渡されて以来の出来事はなかった。

一応、主犯格のお兄さん達はどっかへ移り住んだ話は、和希兄ちゃんから聞いたけど。

家族に保護されて、10日程経った頃。

私は久しぶりに学校に行く事を決意した。

早すぎると兄達は驚いていたが、事の端末を逐一聞いて、解決の施しはないなぁと感じたから。

真冬だったし、普段から厚着で出歩いていただけ。

行為で肌を晒された私は、更に冷えに敏感になった。

下着をもう1枚重ね着したり、マフラーを外さないよう心掛けた。

登校時の兄達は困惑しながらも、私についてくれていた。

和希兄ちゃんはまだ中学生だったし、分岐点の小中学校の近くまでは一緒に歩いてくれた。私の両手に、兄達が繋いでくれた。

学校までは20分あれば到着できた。

何事もなかった登校時と違い、下駄箱で靴を履き替えて教室へ向かった時は、周りの生徒から動揺の面で見られた。

え？早くない？いじめられたんだよね？

名前を知らない生徒達のヒソヒソ話が耳に入る。

隣の勇希兄ちゃんが、特に丸聞こえの生徒に対して、睨みつけて黙らせていた。

1歳年上の勇希兄ちゃんとは、私の教室の前で一旦別れた。

教室の中に1歩踏み入れただけで、周りのクラスメイトがざわついた。

え？嘘？何で？早くない？大丈夫？

クラスメイトの声は驚きの反応で一致していた。

その中でも1番、驚愕の表情を見せた女子達が、必ずいたんだ。

私がずっと、《友達》だって信じていた女子達。

特に真ん中に立っている、両親が官僚クラスの地位についていた、富裕層の娘。

彼女の顔は、ものすごくぐちゃぐちゃになっていた。

あと数秒待てば、泣き出しそうになるくらいには。

とりあえず、私はいつも通り、自分の席についた。

何の言葉も発さず、授業の準備に取り掛かっていた。

顔面蒼白な女子達は、無視していた。

彼女達と話を始めたきっかけは、娘が恐る恐る私に声を掛けてきたから。

娘はあの…と弱々しい小さな声で、私を振り向かせようとしていた。

近くで固まると鬱陶しいから、振り向いてキッパリと告げた。

それも、爽やかな笑顔で。

「これからは、ただの通過点で同じ地点にいた人だった、という認識でいこう？残念だけど、私にはあなた達の趣向がわからないわ。同じ趣向でないと、付き合えないんでしょ？だったら、赤の他人でいきましょ？」

娘はしゃがみ込み、泣き崩れた。

★★★

「あれからずっと、私は同級生の友達を作らなかった。流行り物も、さらに理解不能になってしまったんだ。あの時の『気持ち悪さ』が先行してね。」

私が自分の忌々しい過去を話している時、マル口はずっと黙って聞いていた。

多少感じてくる暑さに耐えながらも。

自販機で購入したお茶は、私もマル口も半分くらいは残っている。

午後からはご飯を食べて遊ぶつもりでいるなら、多少の水分は確保すればいいだろう。

まだアレックスさんからの支給金の残額に余裕があるから、もう1本くらいは買えるけどね。

私はまだ、自分の話を続けていた。

「私は同級生との距離を自ら取った。再び自分に被害が及ばないように。はっきり言って、共感できなくても、私は合わせるように努力したつもりなんだ。何もわかってくれないなら、もう付き合わなくてもいいの。」

マル口の目が、若干私の頭のてっぺんに行っているのは感じていた。

ドリンクホルダー付きの手すりのみ、私達の間に挟まれたただだった。

視界に入ってなくても、マル口の視線を感じるのはわかっていた。

次の彼の行動が、突発的だった。私はずっと、自分だけ喋っていた。

「お婆ちゃんの言いついで、私は外出時は1人で出ないようにいわれたんだけど…。」

私の首が曲がる感覚がした。頭部の、目の焦点がズれていた。

私は相変わらずベンチと反対側の、エントランス用のドアの窓の外を見続けていた。

まっすぐから、斜めの角度から眺める形へと変わっただけ。

これだけでも、私は咄嗟の動きに驚いた。

私は何も動いたつもりがないから。

私の頭の上に、誰かの手のひらが乗っているのが伝わってきた。

私の長話を聞いてくれた、マル口の手だった。

頭上で手のひらを丸ごと当てたり、指だけ離れたりしていた。

この仕草も私自身に伝わっている。

彼は私の耳の近くで、こう言った。

「気持ち悪くないか？俺の手は。」

…ああ、そっか。

もしかして、私の話に共感してくれたのかな？

「終わった事だし、あなたが気にしないでいいのよ？」

「洗いざらい話す奴が、心配するなと言えるわけがないだろう？」

「…そうね。」

マル口の手は、私の頭を包み込んでいた。

HRという、地球人より強い生命体なのに。

今の、ポンポンと軽く当たってきている感覚は、『気持ち良かった』。

『気持ち悪い』と、私の過去の回想で繰り返したから、逆の温もりをあげようとしたんだろうな。

でも、急すぎるよ。えらそうな態度はなりを潜めたけど、どうしていきなり優しくなったの？

私は気になった。

マル口に疑問をぶつけた。

かえって怒るそぶりもなく、素直に答えてくれた。

「俺も昔、女に出会った。それだけだ。」

「女の人に会っただけでそうはならないでしょ？」

「その女も、いわく付きの奴だったんだよ。」

「じゃあ、私も『いわく付きの女』って事？」

「似ていると思っただけだ。」

マルロの手は、ポンポンから撫でる方向に変わっていた。

上から下へ、スッと優しく。

彼は私の過去の回想を話した後の、自分の発言に戻った。

「どうだ？俺の手も、『気持ち悪い』か？」

私は自分の今の気持ちに、素直になった。

「…うん。意外に『気持ち良い』わよ。あなたの手。」

★★★

時刻は正午を過ぎて、午前から午後へと切り替わった。

マルロの体調も少しずつ回復し、ベンチから立ちあがろうと決めた。

アトラクションで遊ぶのは難しいが、ご飯を食べて散歩するぐらいなら支障はないだろう。

通常は料金高めの〔天海山ユートピア〕の、勿体無い使い道だけでも。

私自身も、遊園地で思いきって派手に遊ぶタイプじゃないから、これはこれでよかった。

マルロがベンチから立ち上がれるか、確認した。

アレックスさんに見繕ってもらった、簡素なブラウス姿の少年としか、知らない人からは判断できない。

首元の黒い装置が、異質さを極めてるけど。

「お茶は、まだ残ってるのね？」

「ああ。このボトルは溢れないんだな。」

「昔よりは柔らかくなったみたいだから、持ち運びにはちょっと不安だけだね。」

「そうか。」

ペットボトルは、30度近くの暑さでは溶けない。

2人で肌身離さず持ち歩けば夕方まで保つと思った。

持って来た肩から下げる鞆も小さかったので、ペットボトル2本は入らない。

仕方なく、自分の分は自分の手で持ち歩く事に決まった。

ベンチから間隔を空けると、私はマル口以案内図を見せた。

「グルメのエリアは歩いてすぐよ。」

何か、気になる食べ物とかある？ないなら勝手に決めるよ？」

マル口は黙って案内図に目を通した。

印刷した案内図ともう1つ、入場時のゲート通過後に挨拶してくれたお姉さんからくれたパンフレットも所持している。

食べ物に関する情報は、こちらの方が詳しくかった。

小冊子の縦型パンフレットを小さな鞆から取り出して、これもマル口に読ませた。

こちら食べ物ジャンルの写真しか載っておらず、迷う人は迷うだろう。

今展開できる情報が限られているから、我慢してもらうしかない。

相手はアレックスさんに抑えられているHRだったから、クヨクヨ悩む必要はなかったが。

正直、私も文字と写真だけでは判断しにくかった。

それで私は、せっかく近くまで来てるから巡回しよう、と提案した。

施設内自体は冷房完備なので、屋外よりは涼しいだろうし。

これにマル口は了承した。

早速、ベンチから遠のいて、近くの飲食店が並ぶ市場内に入ろうと動いた。

ところが、ここで問題が発生した。マル口が、動かなかった。

やっぱり熱中症気味だろうか、と心配になった。

でも立った姿を確認すると、熱にやられてフラフラしている不安定さはなかった。

むしろ…ベンチの前に訪れた時の方が、マル口の具合が悪かった。

健康状態に、異常はなかった。

「どうしたの？早く行かないと混んじゃうよ？」

私は立ち止まるマル口に同行を促した。

彼はどこか腑に落ちないような顔をして、私に言った。

「…何か、感じ取れないか？」

「何かって？」

「…気のせいかな？」

マル口はそう言うと、彼は私の隣に来るように前進を始めた。

マル口の感じた『何か』の正体は、すぐに判明した。

施設内は屋外と比べると、狭い空間である。

警報のサイレンとなれば、耳を塞ぎたくなる程のやかましさとなる。

マル口が歩きだした直後に、突如鳴り出した。

短めの4往復のサイレンの後、男性の声による警報アナウンスが全域に響き渡った。[ユートピア]のスタッフさんだろう。

『たった今、愛嬌湾上空に3隻の宇宙船を確認しました。安全最優先で、ご来園の皆様は至急、設置された地下シェルターに避難して下さい。繰り返します…。』

やはり仕事柄、スタッフさんはこの緊急時でも冷静に対応していた。

私達のいたベンチの周りにも、他の来園者は多数いた。

皆さんが騒ぎ出したのは、アナウンスが流れてからだった。

「宇宙船？」

「また愛嬌湾上空？」

「待ってくれ、真っ先にここが被害受けるぞ！」

「昔の、再来？」

『再来』。

その言葉だけで、人間達の雪崩が起きるのは容易かった。

わああああ、と皆が声を荒げていた。

徒競走以上の速さで、皆が走り出すから、押されて、押されて…。

雪崩からうまく脱出できたのは、マルロが強引に私の手を引いたからだ。その時は、施設の外に出てしまっていた。

「外も騒がしくなっているな…。」

「そうね…。」

呑気にしてる暇はないけど、私が立ち上がるのに手間取った。

マルロが逃げずに待っていたのは、私の為なのだろうか。

ちょっとそう思ったけど、彼の口から吐かれた内容で違うと感じた。

「ここから愛嬌湾は、何処へ行ける？」

「案内図だったら、ここから200メートル先に堤防があると書いてるわ。」

「そうか。」

マルロが私を置いて、走り出した。

彼に届くよう、大きな声で止めようとした。

「待って！」

「お前は早く避難しろ。あれには俺が…。」

私はシャツの中からペンダントをスッと出した。

「私には《転送装置》があるわ。これでコックピットまで送ってもらえるの。

あなた、今ロボ形態に変身できないよね？」

ぐっ…とマル口は苦虫を噛んだような表情をした。

マル口は前を向いて、私に頼んだ。

「案内しろ。俺は現地の詳しい地理には慣れていないんだ。」

「わかったわ。ついてきてね。」

私はマル口の隣にさっさと移動した。

200メートル先の堤防まで、2人で真剣に走って行った。

★★★

200メートル先の堤防まで走るのに、時間はかからなかった。

特にトラブルは、不思議と起きなかった。

勇希兄ちゃんの通信はあったけど、後で連絡すると言って、今は切った。

本来堤防は、津波などの水害から守る為に作られている。

柵の高さは、私の背丈の5倍はあった。

でも、私達が興味あるのは、愛嬌湾上空の今の状態であり、海面が拝めないのはどうでもよかった。

2人して、見上げていた。

上空に宇宙船が本当にあるのか、確認する為に。

気づくのは早かった。

銀色の宇宙船が3隻、肉眼では石ぐらいの大きさと視認できた。

マル口の顔が凶変した。

「あれは、[スイルシルバー] か…？」

「[スイルシルバー] ？」

「俺達が所持していた宇宙船だ。今は彼方へ飛んだはずだが…！？」

「マルロ？私より顔色が…。」

「違う、あれは〔スイルシルバー〕ではない！あの文字は…金星の文字だ！名前前は…〔トールメイス・サウ〕！」

8・力説の日



未衣子とマルロが新「天海山ユートピア」へ遊びに行っている最中。

「ラストコア」の統制制御室には、宗太郎とジェームズと専属オペレーター達
がいた。

この日は特に、「ラストコア」内外で重大な会議や打ち合わせはなかった。

オペレーター達は通常業務の簡易的なチェックをしているだけだ。

気を引き締めて作業に取り掛かっている者は少なく、ほとんどがリラックスし
ていた。

コーヒーやお茶を飲んだり、お菓子を摘んだりしている者までいた。

彼らのまとめ役存在である宗太郎とジェームズも、今の時間に注意をする事は
なかった。

2人もまた、リラックスしていた。

イスを2脚用意して、壁面モニターと反対側の位置に座っていた。

ジェームズが自販機で購入した缶コーヒーを、2人は飲んでいた。

「呑気に観光に行ったけど、大丈夫か？」

ジェームズは心配性であり、未衣子達の当日の外出が気になった。

宗太郎は何の事が理解していたので聞き直さなかった。

その代わり、事務局長が安心できるように答えを述べた。

「ただの観光だ。パイロットの経験でも、彼女達には記憶に残る出来事がな
かったんだろうからな。」

「末っ子だけしか行ってないだろう？」

「兄達は乗り気ではなかったんだろう。忌々しさは、そう簡単には消えないか
らな。」

まだまだジェームズの悩みは拭えなかった。

「チケットはスタッフの者が入手したが、日付をずらしても良かっただろう
に。」

「ずらせない理由でもあるのだろうか？一番最後に出会ったHRとの触れ合いを、今度こそ身に染みたいとかかな。」

「…あの子、マル口に惚れたんじゃないか…」

「まだいがみ合っている仲らしいが…両者共に不器用らしいな。」

宗太郎は缶コーヒーを1口、グイッと飲み干した。

「アレックスの開発力を信じるしかないか…」

「例の装置のおかげで、マル口は口ボ形態に変身できないからな。それだけでも安心は保障されていると考えるしかない。」

「そうだな…」

ジェームズはコーヒーを飲まず、横目を逸らしていた。

もう1口飲み干した宗太郎が、別の話題を切り出した。

「ジェームズ。志願兵達の到着は決まったのか？」

「…ああ、それを俺が急がないといけない業務なんだがな…」

「まだ、時間を要するのか？」

ジェームズは首の後ろを、空いた左手でポリポリと掻いていた。

間を置くために、コーヒーを1口飲み干す。

「やはり正規軍の目は厳しい。早急に調整はしたものの、規律だけはガチガチに縛りつけてあるしな…。正攻法で交渉失敗に終わったのは、やはりしんどいぞ。」

「…凌ぐしかないな。」

2人とも、[ラストコア]の現状を憂いていた。

【パスティーユ】の期間限定パイロットである白井3兄妹が7月初めに満了を迎え、彼らを退任させなくてはならない。

【パスティーユ】が抜けた穴は大きい。

ジェームズが率いる予定の『志願兵』達が来るまで、兵士不足で挑まなくてはならない。

「ギリギリマル口の奴を引き抜いたし、実質的に活動してもらうしかないな。志願兵達の希望になれるのが1番だな。」

「マル口と志願兵達…。気が合うといいのだが…。」

壁面モニター前で寛ぎながらも、オペレーター達は外の様子を観察していた。内の1人が、報告をし始めた。

「司令、今よろしいですか？」

「どうした。」

宗太郎が報告しているオペレーターの近くに寄って行った。

缶コーヒーマシナはまだまだ残っていたので、左手で持ったままにした。

ジェームズも彼の後ろにつく。

「上空の様子をカメラで偵察していたのですが…。」

モニターの映像が瞬時に切り替わる。

オペレーターがパネルで操作を繰り返している間に。

数視点のカメラ映像の中から、1視点だけ拡大表示させた。

7月に入る日本の気温は徐々に高くなっており、すでに真夏と変わらない暑さの場所もある。

夏に入る前の時期に『梅雨』の季節があり、その時期は雨を多く降らせる。

雨は雲から降らせる。天気が雨の時の空模様は、決まって雲が広がりを見せている時である。

上空には、積み積みもった雲達が、青空一面に敷き詰められていった。

雲の隙間に…丸みを帯びた光る物体があった。

白っぽいので、オペレーターの錯覚なのかもしれないと見過ごそうと判断した。判断は、宗太郎の頭の中だけで済んだ。

オペレーターに直接、伝えなかった。

白っぽいものの中に、何かが紛れているのを発見した。

地球人から見れば、変な記号の一部が、雲の隙間から現れた。

あの横1列の並び方は、『文字』の配列だろう。

変な記号の外縁の色だけは…黄色っぽく見えた。

外宇宙からの襲撃対策について本気で取り組む者達は、これが何の意味か察した。

「宇宙船！？」

「すぐに警報を鳴らせ！一般人を避難させろ！襲撃の予知だ！」

「わかりました！」

宗太郎が指示を出した。報告者のみならず、他のオペレーター達も気を引き締めて、緊急事態に取り掛かった。

「着陸地点は予測できるか？」

「調べてます！」

ジェームズがどこに落ちるか聞いていたが、オペレーターの手は素早いタッチ操作で行われていた。

映像の次は地球上の地図が表示された。

太平洋がメインの世界地図から、少しずつ縮小を重ねていった。

焦点が、愛嬌湾に移った。

「あの宇宙船が、愛嬌湾に…！？」

「って事は、もしかすると…！」

「[ホルプレス] よりも脅威なる襲撃が、再び[天海山ユートピア] に…！」

宗太郎は嘆いていた。

悲劇は繰り返すのかと。

マルコの襲撃でも、やっとの思いで防げたのに。

〔天海号〕は何度も出せる物ではない。

「宗太郎…くっ。」

ジェームズも司令の落胆する姿に共感していた。

だからこそ悔しいのだ。

何か〔ラストコア〕側から手を出さないと、再び愛嬌市が破滅する。

ジェームズは宗太郎の代わりに指示を出した。

「【パスティユ】をまず出せ！未衣子は飛ばした時に拾うんだ！いいな！」

☆☆☆

「とーるめいす？」

「金星圏の汎用型の宇宙船だ。俺の部隊で所持していた〔スイルシルバー〕と性能は変わらない。」

私の疑問に、マルコが説明してくれた。

〔天海号〕が強いイメージがあったから、いまいち性能がわからない。

「性能は普通だ。だが、『メイス』の名称が気掛かりだ。」

「何で？」

「金星圏メイスには、HR集団の筆頭が存在するんだ。彼の名は『ビウス・エクスセラ』。猪突猛進な騎士だが、攻撃力は圧倒的なんだ。」

マルコが新たなHRの紹介をしていると、上空から音が聞こえた。

いや、声が私達の耳に届く。

だって公衆放送ぐらい響いてくるから、敵の音が。

『天王星圏スイル、マルコ・ヒーストン！貴様の姿を確認した！』

え？ あんなに遠く離れた上空から捉えられるの？

こちらは堤防まで張られているのに。

「クッ、ロボ形態でないから、返答すらもできない…！」

マルロが敵に対して何もできずに、歯痒い感情を抱いていた。

敵の部隊の宇宙船は、少しずつ下に降りていく。

HRと思しき銀色のロボも、そろそろと出撃する姿も目撃した。

もしかしたら、最初に突撃する部隊は事前に外で待機していたかもしれない。

「俺を見つけたなら、ここを攻撃されるのは必須だな…。」

「まさか、今の〔天海山ユートピア〕も？」

「俺をここに連れてきたのが失態なのかもしれん。俺を置いておけ。あのHR
集団ならば、〔ラストコア〕で倒せるだろう。」

マルロはこの付近で止まるつもりでいくようだ。

それは逆に、一部でも〔天海山ユートピア〕の施設を破壊するようなものだ。
どうせなら。

「マルロ、【パスティーユ】のcockピットと一緒に乗ろう！ どのみちここは
攻撃してくるんでしょ？ 手を繋いでよ、そしたら飛べるかもしれないから。」

「何を言っている。俺は属してるとは言え、仮にも『敵』だぞ！」

「こんな所でもたついてたら、アレックスさんにいびられるよ！」

『アレックスさん』の名前だけで、マルロは黙った。

相当弱みを握られてるね、ちょっぴり同情しなくなった。

「…わかった。お前の手を握る。すぐに飛ばせ。敵の攻撃にやられるぞ？」

「今連絡取るわ。…和希兄ちゃん、勇希兄ちゃん！ 今そっちに行くよ！」

私は《転送装置》で兄達に連絡した。

『未衣子！ 今切羽詰まってるんだよ！』

「一方的に回線切ってごめんね。もう大丈夫だから。マルロも一緒に連れて行くから！」

『はあ、ソイツ置いとけ…。』

否定の意見が出たので、回線を切った。

「いいのか？今切っただろう。」

マルロは私が即座にボタンを押した事に、戸惑いを感じていた。

一方的に回線を切ったから、私と兄弟との絆にヒビが入らないか心配してるんだろう。

「大丈夫。後で話すれば納得するわ。理解者がいるからね。」

「理解者？」

「コックピットにいればわかるわ。さあ、早く手を繋いで。絶対に離しちゃダメだよ？」

「ガキじゃあるまいし、暴れるもんか。」

アレックスさんに対してかなりの拒絶感はあるのに。

マルロじゃなくても、変わった研究者にはドン引きする気持ちはわからなくもないけど。

マルロは私の左手を繋いだ。

私は《転送装置》を発動させた。

私達の周りを流星みたいな光線が包み込み、堤防近くの場所から姿を消した。

★★★

《転送装置》の行く末は、【パステージュ】のコックピットの中だった。飛ばされてすぐ、私とマルロは席の上でぎゅうぎゅう詰めになっていた。

挟まれている感覚がして、身動きが取れなかった。

ジェット機は飛ばされているようで。今はオート操縦で固定されている。
合体するまでには、マニュアル操縦の解除をしなければならない。
コックピットは《剛力ガラススフィア》の性質で、操縦席部分は球体になっている。

席の後ろに、人間1人分がギリギリ収まるスペースがある。

マル口は小さいから、ここに居座ってもらうしかない。

「後ろ行って、マル口。」

「う、わ、わかった。」

マル口は返事をしたが、思うように後ろにいけないようだ。

モタモタしていると、勝手に通信回線が開いた。

勇希兄ちゃんの怒鳴り声だった。

『何やってんだよ未衣子！そいつなんか置いとけよ！』

「敵のターゲットはマル口っぽいの？あのままだとやられるわ。」

『何でそうなるんだよ？』

「だって、敵の宇宙船の方から直々に申し出てきたからよ。」

私は直近の出来事を正直に話した。

まだマル口は後ろに行けず、コックピットのシートの角に挟まった状態と化している。

和希兄ちゃんも通信に割ってきた。

『未衣子？彼を後ろに座らせたらどうだ？』

和希兄ちゃんはマル口を否定せず、現状の打開策をあげた。

そっか。2人乗りにすれば良いんだ。

マル口はHRだし、衝撃なんてどうって事はなさそう。

私は打開策を受け入れた。

「マル口。後ろ行かなくていいから座って。」

「操縦者は、お前ではないのか？…って、痛い！」

マルロは軽く頭を打った。

その時に、マルロがうまく後ろへ潜り込めない理由がわかった。

首元の装置が硬い。

当たり前だ。アレックスさんの報告からあれは一応機械の類いなんだから。

私が無茶な方法を示したから、マルロも苦しいんだ。

今回だけ、マルロをシートに座らせて、私は彼の上に乗るんだ。

急がないと、飛ばされたジェット機のまま、敵の攻撃を受けてしまう。それだけは、絶対に回避しなきゃ。

マルロは頭を軽く押さえながら、シートに深々と座った。

彼の膝の上に、無理矢理スーツに着替えた私に乗った。

「うっ。」

マルロの声が漏れた。私の体重が重いのかなあ？

「マルロ？」

私は不安になり、後ろのマルロの顔を見た。

どこか焦ってるような、少し顔が赤いような…そんな表情だった。

「いや、お前は重くない。短時間の辛抱はするさ。」

「体勢が辛いなら言ってね？」

まあ、構っている余裕はないけど。

敵側もずっと待機しているわけじゃないから。

私はコックピット内のモニターに目を凝らした。

「トールメイス・サウ」って言ってた宇宙船から、次々とHRらしきロボが降りてくる。

戦闘を仕掛けてくる気だ。

『逃げたか！マルロ・ヒーストン！どこまでも卑怯な奴め！』

敵の大声だった。ジェット機内でもはっきり聞こえる。

こちらは【パスティユ】と背後の輸送機が数台。

他の輸送機から射出されたアレックスさんのA I ロボで対抗しなくてはならなかった。

とうとうアレックスさんの通信が入った。

回線を開いてすぐにお見えになった彼は、寝起きらしく服装がよれていた。

『状況は聞いている。災難だな。』

「しれっと言える立場なのか？お前達は。」

アレックスさんに返答したのはマルロだった。

『他人事じゃないのはそうだ。[天海山ユートピア]という名称の娯楽施設は、10年前にクーランに襲撃されている。』

「やはり！非常に深刻ではないか！」

マルロが後ろで狼狽えた。

『場所が違うがな。愛嬌市民には歴史に深く刻んでいる。忌わしい記憶として。だから、お前と未衣子だけがあの施設に行ったんだ。』

「そうか。」

マルロはしばらく黙った。

戦闘の体制を取らないといけないので、お喋りに余計な時間を消費するのをやめた。

アレックスさんは、私達に指示を下す。

『敵の数はHRを含めると多いようだ。頭角を表していそうな者がいなさそうな雰囲気だが…。』

「【パスティユ】は【フラワー】でいきますか？」

『対策が見えない以上は、それが安全だろうな。宇宙船相手に【スカイ】の剣か【サニー】の拳にチェンジすると良さそうだ。今は。』

さて、とアレックスさんは話の相手を変えた。

黙る事に徹していたマルロに。

随分早く口を開けたね、と思った。

でも、話を聞いたらなるほどと納得できたから、どうでもよかった。

『敵の正体、特定できるよな？マルロ・ヒーストン。』

「…金星圏メイスの、ピウス・エクステラ。」

『【宇宙犯罪者】か。』

「本人は否定してるがな。だが、奴が降りてきた可能性は低いだろう。」

『何故だ？』

「奴は黄金の宇宙船、【トールメイス】そのものに乗ってやってくる。ところが、上空の3隻は、全てが白銀の宇宙船だ。」

ほう…、とアレックスさんは感心していた。

私と兄達で【パスティユ・フラワー】に合体している時に。

マルロは私の後ろに座ってるだけだし、感じるのはシートに伝わる圧だけだろうな。

有力な情報は他にもあった。

「もう1つ。堤防付近で宇宙船から隊長らしき者の声を聞いた。ピウスの声ではない。奴の声を、俺は聞き分けられる。」

『わかった。金星圏の奴らが襲撃してきたとすればいいな。』

「その認識で助かる。あとは…。」

『【パスティユ】は最新鋭の機体だ。頑丈に出来ている。故にお前達の猛攻を受けても無事で済んだだろう。』

「このガキが言った意味が、よくわかるよ。」

フッ、とマルロは軽く笑った。

☆☆☆

【トールメイス・サウ】の内部は、かなり大騒ぎになっていた。

端正な顔立ちの男性が、船内をうろちょろしている。

ブリッジでは、マルロに向けて宣戦布告をしたであろう人物が、他に数人を近寄らせていた。

彼らは皆、金星圏メイスの【エクステラ隊】の隊員である。

隊長であるピウス・エクステラは、火星圏タレスのクーラン・レッドが仕掛けた戦によって散った。

戦の場であった競技場で、彼らは自分達の隊長の惨敗を、この目に焼き付いていた。

クーランの《自慢の息子》、ラルク・トゥエラーに短時間でコテンパンにされる有様に、彼らは怯えた。

競技場を真っ先に脱出し、その足で地球に向かった。

ピウスと同じく、クーランと契約した【宇宙犯罪者】のマルロ・ヒーストンの部隊が地球に降りている。

ラルクというHRを落とすのに比べたら、【ラストコア】ぐらいしかない地球の勢力は、宇宙人達にとっては侵攻しやすかった。

【宇宙犯罪者】のHRの中でも博識者のマルロなら、地球を落としている筈。

マルロの支配下とされた地球を自分達で落として、今度は金星圏メイスの支配下にしようと企んでいたのだが。

マルロを【天海山ユートピア】の堤防付近で発見したのは、【エクステラ隊】の全員で共有されている。

彼の服装が全然異なっていた。

【エクステラ隊】の者達の想像するマルロの服装は、白い和装姿である。

それが…洋式のスーツを着て、首元に頭部ぐらい大きな物体が付けられていた姿を目撃した。

彼の隣に、〔ヒーストン〕部隊の天王星圏の宇宙人はいなかった。

H Rには珍しい、《メス》がいた。

ブラウスとスカート姿の、ピンク髪の女の子。

消える前のマル口の隣にいたのは、地球人であった。

〔エクステラ隊〕のピウスに代わる幹部達は、マル口の行動を疑った。

奴は本当に、地球を、〔ラストコア〕を墮としたのか？

幹部達数人、ブリッジの中で討論が繰り広げられていた。

前線部隊として配置するH R達には、宇宙船の外に出して。

「どういう事だ。奴は、マル口・ヒーストンは地球を墮としてないのか？」

「まさか。あの広大な敷地には生物が消えたではないか。」

「いや、私はこの目で見たぞ？原始地球の民の、ちっぽけな姿をだ。あんなに自由になれるものか。」

「そうか…。奴の支配下になっておれば、民は怯えるだろうな。」

討論は長時間には及ばなかったが、部隊の判断を鈍らせる羽目になってしまった。

結論としては、『マル口は地球人を支配していない』と憶測された。

原始地球人、《ラルク》と手を組んだ〔ラストコア〕がのうのう生きている。

自分達の隊長を《ラルク》の手で潰された〔エクステラ隊〕の者達には、今の地球から屈辱感を味わった。

《ラルク》なら簡単に握り潰せそうな弱き星が、今でも健在なのだ。

同じ金星圏のフェルホーンの隷属にされ、同志の『輝き』としての象徴だった隊長のピウスを倒された者達は、地球が許せない。

《ラルク》と育ての親・クーランの魔の手から逃げるのも兼ねて、[エクステラ隊]は地球にやってきた。

悔しさを胸に抱える彼ら。

だが今の状況は、視点を変えれば好気とも言えよう。

消えるまで地球の地面に立っていたマル口ごと、この惑星への侵攻が出来るのだ。手柄は、彼らの手に入る。

「制圧しよう。我々が。マル口の奴が成し得なかった地球侵攻を、我々が成果を修めるのだ。」

この決断に、大多数の幹部達は頷いた。

手をあげて反対意見を述べる幹部もいた。

「しかし、あの施設と[ラストコア]に関連性はあるのか？闇雲に壊すのは、ビウス様の意志にそぐわないだろう。」

「《ラルク》と手を組んでも、か？」

「はっ！？」

反対意見を述べた幹部は、ある1つの事実気付かされた。

憎き《ラルク》と手を結んでいたならば、その地球人も《悪》の存在となる。

そう考えた反対側の幹部も、賛同の意見に回った。

これにて、[エクステラ隊]の地球侵攻が決まった。

「全部隊に告げる！[エクステラ隊]は[ラストコア]の制圧及び、地球侵攻を開始する。

各員は配置につきたまえ！前線部隊は直ちに降下！刃向かう勢力は撃ち落とせ！真下の施設が破壊されても、幹部達は黙認する！」

幹部のリーダー格たる者が、ブリッジ全域に伝わるように発した。

この宣言はオペレーターから、艦内放送として流された。

3隻の[トールメイス・サウ]全域に広まった。

「《ラルク》が抜けた今、[ラストコア]の戦力は脆い。強行突破でも、我々が勝利するには容易い。」

幹部達はブリッジの前面モニターを眺めた。

外に出たHR達が、次々と地上へ降りた。

☆☆☆

宇宙船とHRが上空に止まった状態が気になっていた。

その際に【パステージュ・フラワー】に合体できたけど。

攻撃を全然仕掛けてこないの、私達はアレックスさんのAIロボと肩を並べて飛行していた。

ロッドを右手に構えながら、待機していた。

「おかしいなあ…？」

「どうした？」

後ろに座るマルロが聞いてきた。

私は今感じている疑問点を話した。

「あのね。敵の金星圏？の人達だけど…何で攻撃してこないの？」

『…そう言えば。』

兄達との回線は開けていた。和希兄ちゃんは話の続きをした。

『HR達も上空に点在しているのに…。』

『今がチャンスじゃねえの？俺達から仕掛けようぜ！』

勇希兄ちゃんが唆してきた。

これにはアレックスさんが反論した。

『ダメだ。今の場所では無謀な攻撃は避けたい。』

『今の場所？』

『勇希、地図データだ。』

和希兄ちゃんに指摘された勇希兄ちゃんが、顔を動かしていた。

おそらく、地図データが表示された箇所を探しているんだろう。

どこか目の付く所に、固定できるのに。

彼のコックピット内の地図データを見つけた時、勇希兄ちゃんは両目を大きく開いた。

『…愛嬌湾？』

『しかも今回は、[天海山ユートピア]のご近所なんだ。これがな。』

『嘘…だろ？』

「事実じゃない。私とマルロは今日、遊びに行ってたのに。」

『以前も[ホルブレス]らの襲撃があったが、あの時は南部の方角でほんの数機のみだった。【パステージュ】が仕留めたのは1機のみで、あとは黒川が上空で落としたよ。A I ロボの後始末で、被害は少なかった。』

アレックスさんが【ホルブレス】の襲撃、つまり私達兄妹の初めての戦闘について語った。

多分それは、私の後ろで見守るマルロに対してだろう。

だから彼は、こう言い放った。

「貴様は昨夜告げたな。10年前の襲撃事件と関わりのある施設だと。そこに、《ラルク》とクーランがいたのだと。」

私は即座に、マルロの座る後ろを振り向いてしまった。

それは…私が《夢》の中でしか見たことが無くて。

音声の無い《夢》からは…武人兄ちゃん以外の名前を知らない。

兄達2人に至っては、襲撃事件の詳細を初めて知ったばかりだ。

西条司令からは概要しか説明されていないから。

「本当に？アレックスさんが…？」

『…ああ。前知識として教えてただけだが？』

私はアレックスさんに問いただしたい事があって、視線を前面モニターに戻した。

「前から、ご存知だったんですね？」

『愛嬌市民の君達には知らせたくなかったが…黒川本人からの証言なんだ。』

『じゃあ、昔の【ユートピア】の襲撃事件に、武人兄ちゃん関わってたのかよ！』

『黒川はあくまで防衛に徹していた。奴の全責任ではないぞ。』

『では、司令が俺達に公開した…宇宙船の大群は…。』

「その主犯がクーランで、火星圏タレスの研究者だ。」

和希兄ちゃんの疑問にマルロが答えた。

「クーランと《ラルク》は、歪な育ての親子関係だった。《ラルク》を自分の従僕として改造・使役して、星々を滅ぼしては富を奪っていった。タレス内の経済が回る事で、クーランに申す者がいなかった。どの星でも、金目の物は必須だからな。」

マルロは途切れずに真実を話した。

《夢》の中で、武人兄ちゃんはおとなおじさんに虐げられている場面も見ていた。

嫌々でも仕事と割り切って、星を破滅に追いやっていた場面も。

武人兄ちゃんが絡む所は、《夢》と被る内容だらけだった。

ダメだ。私はまだ、武人兄ちゃんを忘れられない。

《期間満了》まであと僅かなのに。

モヤモヤしている暇はなかった。

私、兄達、マルロは今、【パスティーユ】のcockピットの中。

3機のジェット機からなる合体ロボに乗る時は、いつも緊急事態である。

敵のビーム攻撃だって、いつかはやって来るのだ。

白い閃光は、【パスティユ・フラワー】のすぐ横に飛んできた。

通り過ぎて、本当によかった。

【フラワー】に命中すれば、1発で故障に至ったかもしれない。

強固なバリアを張れるので、被害は最小限に抑えられる。

それも、気を配っている時だ。

危なかった。次はないだろう。引き締めないと、やられてしまう。

今のはアレックスさんも気づいている。

故に繋がっている回線から、アレックスさんの声が聞こえた。

『始まったな…！』

『どうします？このまま反撃に移りますか？』

『いや、太平洋に誘導する。未衣子、バリアは常に張っておけ。【フラワー】から一番遠いAⅠロボから順次移動させる。』

「わかりました。」

私はアレックスさんの指示に従い、【フラワー】の全身より5倍以上大きな円形バリアを張った。

予備のエネルギーのタンクも持ってきているので、今大幅に消費しても問題はない。

愛嬌湾から太平洋へ出る道は、近畿と四国の間の海洋を通過するだけ。余計な事しなければ、危険は大方回避できる。

予想外の事態も、起こってしまった。

【フラワー】から1番遠いAⅠロボが太平洋に向かう為、移動を開始した瞬間だった。

敵のビームの光は、後からどんどん放たれていった。

【フラワー】は1番最後に移動するので、バリアの半径を更に広げて猛攻を凌いだ。

のに、通過するビームもあった。

ビームの落ちた先が、問題だった。

新しい【天海山ユートピア】の敷地範囲内だった。

アレックスさんの開発した超巨大なバリアが展開されていたので、被弾による害はなかったから良かった。

でも、敵のHRの放った光の閃光は、私達が目を瞑りたくなる程強烈に輝いていた。

ひょっとしたら、閃光の威力も強大かもしれない。

今は1発だけだから良かったものの、数十発の猛攻がやってきたら…。

頑丈なバリアでも、いつかは穴が開くだろう。

『マルロ・ヒーストン！貴様が名乗り出なければ、地球の建造物も破壊するぞ！』

敵の宇宙船から流れてくる声だった。

この人達は、マルロと戦いたいんだ。私はそう捉えていた。

だけど…今の彼はロボ形態【チタン・キュレン】に変身ができない。

アレックスさんが装着させた首元の黒い装置が、変身行為をより制限させているから。

マルロがかなり怯えているので、相当能力を発揮できないだろう。

私はアレックスさんに提案した。

「太平洋上へ移動しつつ、敵の数を少し減らしましょう？」

『もちろんだぜ！』

『被害は心配だが、黙ってはいられないしね。』

2人の兄達は私に賛同した。

ところが…私の提案に異議を唱える者がいた。

アレックスさん、ではなく…後ろに座るマル口だった。

「…待て。早まるな。」

「え？」

『はあ！？お前が俺達を止める権利ねえだろ！？』

『変わったとは言え、かの〔天海山ユートピア〕に被害が及ぶんです。数を減らせば後の戦闘も楽になりますよ？』

「その施設が心配だったら、余計に戦闘を回避する行動を取れ！」

マル口が怒鳴った。

確かに、バリアがあったとしても、ゆかりのある娯楽施設の近くでの戦闘は控えた方がいい。

このまま、守りきるしかないのかな。

アレックスさんがマル口に尋ねた。

『ならば聞こう。何か案を考えているのか？こちらとしては被害は最小限に抑えたい。子供達が挑発に乗ったのは謝る。』

『アレックスさん！？向こうが仕掛けて来たんだろ！』

『よせ勇希。今はアレックスさんとマル口が話している。』

吠える勇希兄ちゃんを和希兄ちゃんが止めた。

外野の喧騒が小さくなったところで、マル口が発言した。

「奴らには、俺が説得を試みよう。」

『それは…もしや？』

「貴様が推測する通りだ。あの軍団を、こちら側に惹きつけるんだ。奴らは慕うリーダーが不在だ。現にピウス・エクステラの声を聞いていない。」

『それを認識できるんですか？』

「俺は奴と、[レッド研究所]で面識がある。声質もはっきり覚えているぞ。」

私達は口を開けたままだった。

「リーダー不在の奴らは今、右往左往して彷徨っている。いわば不安定な軍団だ。説得が成功すれば、簡単に乗ってくれるだろう。」

「うまく、聞き入れてくれるかしら？」

私はマル口になんかな？と聞いた。

彼はすんなりと返答した。

「やるしかないだろう。俺はそう考えている。」

「何で？」

「お前達は今、戦力を必要としているだろう？」

ここで潰すより、少しでも有効活用できるなら利用するんだ。…卑怯な手かもしれないが、切羽詰まっている筈だ。」

マル口…あなたは。私達兄妹より[ラストコア]にいる期間が少ないのに、そこまで把握できているなんて。

私の後ろに座るHRに対し、アレックスさんが下した決断は。

『…わかった。お前の動向を見守ろう。バリアは最大限の強度で守れるから、損傷はギリギリまで抑えられる。だが、これもエネルギーの限界がある。最悪の場合は中断してもらうが、それでもいいな？』

一応、許可の判断だった。

これに対してマル口は、

「構わん。無駄に戦闘を長引くのは効率も悪いからな。」

と了承した。

『…よし。説得を開始するには、マイクが必要だろうな。【パステージュ】の機能ならば、十分に届くだろう。距離問題だけは、調整してもらわないと厳しいが。』

「届きやすい機能はどれだ？」

『兄妹に操作してもらってから、ちょっと待ってろ…和希。』

アレックスさんは上の兄を名指した。

『えっと…音響調整機能ですね？』

『攻撃をもらに受けないよう、なるべく距離は離しておきたいんだ。ポリュームは最大値に設定しておけ。…未衣子。』

今度は私が呼ばれた。

「何ですか？」

『誠意を見せる為にも…敵の宇宙船やHRとの目線を合わせたい。上空付近まで高度を維持してもらうが、いけるか？』

「その操作は難しくないで、大丈夫です。」

私自身も、戦闘を回避できるなら、それがいいと思ってるし。

アレックスさんにはいけます、と言った。

『ならば上昇して行ってくれ。バリアの徹底は忘れずにな。A I ロボも幾らかは派遣させるが…判断が降りるまで攻撃するな。マルコの説得を優先させろ。わかったな。』

これは私達兄妹に対する指示であった。

全員、はい、わかりましたと答えた。

【フラワー】は上空へ急行した。

☆☆☆

【トールメイス・サウ】のブリッジに居座ったまま、【エクステラ隊】の幹部達は訝しんでいた。彼らは地球への攻撃命令を下した。

西洋風の剣を振り下ろす技を駆使するHR達。

自分達の搭乗する宇宙船だって、砲弾系の武装が備わっている。

猛攻撃を仕掛けるには十分な威力だ。

脅威的な【宇宙犯罪者】の前からすれば貧弱な武装である。

現在、【エクステラ隊】が襲撃しているのは…【天海山ユートピア】が存在する愛嬌湾周辺。

地球側の抵抗勢力も、【バステュー】やHRと変わらない背丈のロボも、多数出現していた。

彼らは反撃が来るのを、予想していた。

推測とかわざわざ立てなくても、先制攻撃をすれば反撃が来るのは当然、と誰しもが疑わなかった。

ところが。

地球側が見せた抵抗は、バリアによる地上の施設の保護のみである。

【バステュー】や他のロボ達も、バリアで凌いでるだけ。

ロボ達の一部は、太平洋上へと移動を開始している。

幹部達は思った。

「抵抗の意志が弱すぎる」と。

個々の能力差が顕著ではない平凡なHR集団だとも呼ばれる彼らでも、これは容易に落とせたのでは？と思った。

防御が頑丈なだけの敵は、持久戦で摩耗しければ、あとは勝手に自滅するだろう。

なぜ、マル口は落とせなかったのか？

幹部達の間では、

「これは地球の抵抗勢力の一部では？」と仄めかす者も現れた。

油断できんな…と彼らは冷や汗をかいた。

未知なる潜在力に畏怖した彼らは他の仲間達に、攻撃の手を緩めるなど指示した。

攻撃こそ最大の防御、と幹部達は信じきっていた。

今は様子見しかないと。

頑丈なバリアでも、何らかの拍子で破れる可能性がある。

そこも狙い目として視野に入れよう。

幹部達の間で取り決めが終わり、全部隊へ伝達する、その時だった。

ブリッジのモニターに、【パスティユ・フラワー】の全身像が映し出されたのだ。幹部達は咄嗟に声をあげた。

「何だ、あれは！？」

「地球にも、HRが存在していたのか！？」

彼らはこの戦場で初めて拝む【フラワー】に対して、オロオロしていた。

ただ、彼らの内の1人が、冷静さを取り戻してから発言した。

「偵察者の調査からの報告にあった、噂の地球産ロボなのか…？派手な武装だ…！」

「何だと！？」

「あんな機体は短期間では生産できまい。ラルクの奴、内部でコソコソと…！」

幹部達の打ち合わせは中断された。耳を塞ぎたくなる程のマイクのピッチ音が、ブリッジ内に流れてきたからだ。

もう少し音量下げろ！という叱責がオペレーター側で飛び交っていた。

音量調整に集中がいくブリッジ内のクルー達。

この作業の完了まで、間に合わなかった。

『金星圏メイス、[エクステラ隊]の者達よ！

俺の声が聞こえるならば、今すぐ侵攻を止めろ！』

【パスティユ・フラワー】から少年の声が流れてきた。

クルー達は調整の手を止めてしまった。

「誰だ…いや、この声は、」

「マルロだ！マルロ・ヒーストンだ！」

幹部達の1人が慌てるように言ったので、クルー達もざわめき 시작했다。

『まずは話がしたい！応答できるなら、通信回線を繋いでくれ！この地球産ロボには、武器を持たせていない！臆する事なく繋いでくれ！』

「いかがなさいますか？回線の準備はできております。」

モニター手前に座るオペレーターが幹部達に聞いた。

幹部達は一斉に顔をしかめた。

彼らが崇めるピウスと対等意識のある[宇宙犯罪者]からの要望。

何かを企てているのではないかと、怪しんだ。

計算高いとされる彼の要求を飲むのか？

幹部達は迷っていた。

しかし、決断を下すまでの猶予は、そんなに残されてはいない。

彼らの1人が、要求を飲む決意の表明を示した。

「ここは、話を聞こう。回線自体は途中で遮断できる。奴と、地球人の意図を探るのだ。」

「我々に、そのような真似事ができるのか？」

「できるできないではない。やらねばならんのだ。現在、我々はその境地に立たされている状況だ。宇宙へ再逃亡しても、クーランや他の権力者に捕らえられるかもしれないんだ。触りだけでも聞き取るんだ。」

進言者に長々と話されると、他の幹部やクルー達は同調せざるを得なかった。

命令や指示などの通達はなくても、手前のオペレーターは回線を開いた。
自分の背後で幹部達が要求の承認をしているのだから、指示待ちの必要はない
と悟ったのだ。

前面モニター上部に、マルロの頭部が映った。

【パスティーユ】のcockピットの壁一面もモニター構造となっている。
マルロの背景が淡い空と浮かんだ雲の空間で広がるのは、この為である。

「マルロ・ヒーストン…！」

『回線を開いていただき、誠に感謝する。』

「感謝など要らぬ！貴様、さてはクーランの手の内を読んでいたな！おかげで
ビウス様は…！」

『散ったのだろう。俺でも察しがついた。』

「天に召されたと申せ！」

『同じ事だろう。隊長が消えて、お前達の内部は混乱している。』

実際、俺の仲間達も健在なのか、気にしているからな。』

「澄ました表情の癖に、良き隊長気取りをするでないわ！」

撃て！と号令がかかった。

側面に位置するオペレーター達が、パネル操作を開始した。

宇宙船【トールメイス・サウ】の舷側から、砲弾型のミサイルが放たれた。
軌道を描けるミサイルは、マルロが乗せられている【パスティーユ・フラワー】
へと集中していた。

弾は破裂し、炎が上がる。

『ぎゃあっ！？』『うわっ！？』

マルロではなく、操縦する未衣子と勇希の声だった。

【フラワー】の強固なバリアのおかげで、【パスティーユ】全体は落ちなかつた。

衝撃で揺れを感じて、軽く悲鳴はあげた。

『やめろ！無駄玉を使うんじゃない！』

マル口が凶変した。

彼の表情には、悲しみも込められていた。

前面モニター側のオペレーターの目にはそう感じ取った。

「相当、追い詰められていますね…？」

「迫られている？それは我々も同じだ！いや、我々の方が過酷な状況に陥っている！貴様など、呑気に無能力な民達と戯れている貴様など…！」

全身をワナワナと震えさせていた1人の幹部は、マル口と面向かって、疑問をぶつけにかかった。

「なぜそこまで下等な原始地球人に固執する！

我々の《祖》であるからか！？もうその思想は古代産物だと、貴様の脳では理解しているだろう！」

言い切った幹部は声を荒げていた為、喉を痛めてしまった。

しばらくは、叫ぶ事はできないだろう。

隣にいた者達で、彼の背中をさすった。

目には目を、叫びには叫びを。

浴びせられたマル口本人も、幹部の期待に応えなければならなかった。

『こいつらは同志なんだ！《ラルク》を倒す共通の同志なんだ！今の奴はもはや、柔軟対策では倒せまい！クーランの手により、強化も洗脳もされているだろう！奴はもう、怪物と化したんだ！』

『え？』

これはマル口の前に座る未衣子の動揺だった。

彼女が漏らした声は、誰にも届かなかった。

幹部達には、まだ反論の場に立てる者が他にいた。

むせた男の代わりを務める輩が、今度は前に立った。

「《ラルク》と交戦しなかった者が、なぜか様な妄想を吐き出せるのだ!？」

『妄想ではない! 事実だ! クーランの隣で、養液に浸されて眠る奴を確認した! その時、俺にはおぞましい恐怖を感じたのだ! だから俺は《親》と取引した! 地球を落とす手柄を持って帰る事を約束した! だが、その責務を果たせなかった! 俺は[ラストコア]で捕虜となった!』

マル口の力説はまだ続いた。

『俺は悲しんだ。仲間達と離れ離れになり、研究者にこき使われた事もあった。だが、こいつらは今までの権力者達とは違う! 捕虜扱いの俺でも、特定の分野においては俺を慕ってくれる。策略家の俺だが、優しく接してくれる。今までの景色とは、大違いなんだ!』

幹部達はマル口に押され、黙って聞いていた。

そして、マル口にトドメの説得を突きつけられた。

『お前達は逃亡の真っ最中だろう! いつか、クーランの魔の手に落ちるかもしれない。もしくは新たな権力者の手が伸びてくるだろう? このまま逃げ切れるのか? ビウスのいないお前達に!』

自分達が危惧していた問題。

これをマル口に当てられてしまった。

絶句してしまった幹部達は、肩を落としてしまった。

もう、地球を支配しようとする気力が無くなったようだ。

幹部達の1人が、部隊全体に対して…戦闘を止める宣言を開始した。

『同志達よ、よく聞くんた。』

[エクステラ隊]の船内クルー、空中で飛ぶHR達の反応は、従順だった。

反抗の意志など、感じられなかった。

『我々はマル口と、地球人と同志になりたい。度重なる戦闘で、我々は疲弊してしまった。ピウス様はお認めにならないだろうが、我々はもう、平穩に生きていきたいのだ。メイスはフェルホーンに虐げられてきたから、我々は反逆の狼煙をあげた。だが、我々を優しい心で受け止める者がいる星ならば、もう不毛な争いをしなくてよいだろう。我々は、マル口と、[ラストコア]の者達と、共闘する意思表示をする。同志達よ、ついてきてくれたまえ。』

幹部の宣言は終わった。

[エクステラ隊]の誰しもが、大声を出さなかった。

H R達は静かに、宇宙船[トールメイス・サウ]に戻った。

全ての帰艦を完了した後、宇宙船3隻がゆっくりと愛嬌湾に降下してきた。

着水が地形で不可能な為、輸送機の操縦士達がストップをかけていた。

[ラストコア]から続々と輸送機がやってきた。

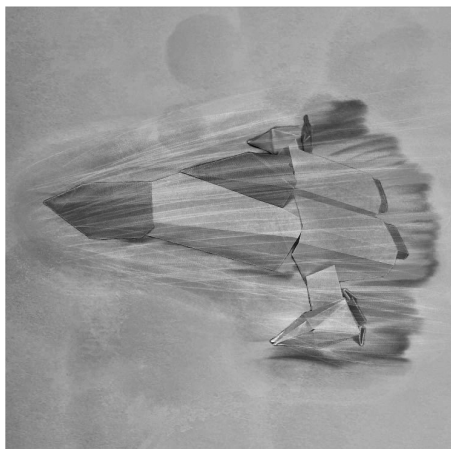
戦闘を中止する報告を聞いて。

[エクステラ隊]の者達を收容する為、彼らを宇宙船3隻から降ろした。

輸送機は愛嬌湾内に…潜らずに、日本列島を通り過ぎて行った。

後から宇宙船3隻も、アメリカ大陸へ飛んでいった。

9 ・ 立証の日



土星圈ニコンは、藍色に染まった星である。

この星の王家であるフレアランス家の領地である〔フレアランス城〕もまた、星全体と同色に近いもので染められていた。

派手さをなくす為である。

敵の侵略の目に入らないよう、ニコンは身分の差など関係なく、民達は質素に暮らしている。

〔フレアランス城〕もまた、お城の建造物にしては低い建物である。

高さだけに絞れば、3階建の戸建住宅と同じくらいしかない。

だが、お城の内部は地下へ拡張されているので、敷地全体の面積を考えると全然狭くはない。

一般的な地球上のお城と、内部はなんら変わらないのだ。

4代目のフレアランス王が常に佇む謁見の間も、地下に施工されていた。

元々の室内が暗い為、壁際にはロウソクの火が複数点されていた。

それでもまだ暗いので、玉座の両脇にも篝火のような器具が配置されていた。

ロウソクも篝火も、実際の熱を帯びた火ではなく、電灯である。

玉座に着く4代目王の真逆に、敷かれたカーペットの上で跪く者が2人いた。

5代目の王の候補とされた《息子》、リュート・フレアランス5th。

彼の側近である技術士官、サレン・D・フェルテ。

彼らは今、〔ラストコア〕が健在する地球から帰ってきた所である。

それも、蒼白な面持ちで。

リュートに至っては、どこか力も抜け落ちているようだった。

臍抜けな面をしていると知った4代目王は立ち上がり、リュートに近づいた。

彼の左頬に平手を1発かました。

初老で弱ってきた身体でも、《息子》を床に叩きつける力は残っていた。

「何をしているのだ！お前は！」

王の叱責だった。

《親子》の今の一連を、直近にいたサレンは驚いた。

彼女の身体は、自分が仕える王子を庇う態勢を取っていた。

「申し訳ございません！王！私の勝手な判断で全て行いました！」

「君のせいではない、サレン。むしろこの愚かな《息子》の世話を、精一杯してくれる事には感謝しておる。」

「そんな…リウト王子は愚息ではありません！」

「勝負に敗れて戦意を失い、のこのこ帰ってくる《オス》が、ニコンのこれからを背負えるのか！」

「は…！」

リウトは転んで倒れた時に、顔を右手のひらで被せていた。

4代目王の言葉を聞いて、《息子》の彼は現実を思い知らされた。

リウトは地球に旅立ってから今までの経緯を振り返った。

サレンや王家の側近兵と共に宇宙船【フレアランス5】に乗った。

地球降下時に、電波交信のやり取りを行った。

受け入れてくれた【ラストコア】に…己の因縁相手がいた。

因縁相手に戦闘を申し込み、挑みにかかった。

結果は敗北。

トドメを刺される所を、敵襲の警報が遮った。

彼の命だけは、救われた。

敗れた日から今まで…リウトの心は意気消沈状態だった。

敗北をきっかけに、彼は恐怖で意欲が湧かず、空虚な気持ちになっていた。

故に、戦意すらも消え失せていた。

追い討ちもくらっていた。

命を救われた時から、2度目の敵襲。

己の因縁相手だった黒川武人が、敵の集団に連れ去られていった。

これは〔ラストコア〕の特別隊員として在籍している時の名前。

正しくは…火星圏タレス出身のHR、最強の〔宇宙犯罪者〕としても知られている、ラルク・トゥエラーである。

ラルクとリュートの因縁関係には、深い事情があった。

「お前が望むから、賢者達の手も駆使して《ラルク》の行方の可能性を示したのだ。15年前、滅びゆく水星圏の星々から、お前を救い出した。本来ならば、新天地で第2の人生を歩むように専念すれば、良かったのだ…。」

4代目王が長々と話し出した。

「だがお前は、かつての故郷の忌まわしき過去を忘れられなかった。ずっと《犯罪者》に對しての執念が強かった。闘志に燃えるお前を見ていれば、その期待に《親》の我が応えなければならぬ。お前の報復の実現の為、奴に関する情報を集めたというのに…。」

4代目王は転がったままのリュートの目の前で、しゃがみ込んだ。

「賢者達や、支持する民達の気持ちを、もう少し考えよ。熱く、なり過ぎるな。猪突猛進の王はいつか、身も星も滅ぼす羽目になるだろう。」

リュートの返事はなかった。

王の言葉は身に沁みていたので、言い訳もしなかった。

王子の代弁者としての務めを果たしたいサレンが、王に尋ねた。

「…ならば王子は、どうすればいいのでしょうか？王子の心の傷は、深いままなのです。私達側近は、どこまで王子に尽くせばよいのでしょうか…？」

サレンは王と顔を合わせず、リュートの横顔を眺めるように、下を向いていた。

沈黙の間ができた。

《親子》の間にラインが引かれたように感じられた。

ラインを真っ先に踏み込んだのは、やはり4代目王だった。

「賢者達はいき先日まで、調査に徹しておった。お前の因縁相手は、奴の故郷に戻っているのだそうだ。衛星データに、疑わしき一部が残されておってな…。」

リュートはすぐさま上体を起こした。

サレンが彼の後ろを支えた。

「…それは、事実でしょうか？」

リュートはおそろおそろ4代目王に聞いた。

《親》である王は《息子》に、既知の範囲内で告げた。

「奴は火星圏タレスにいると推測されておる。奴を支配していたクーランの元だろうとな。」

リュートとサレンは、両目を大きく開いた。

口も少し開いていた。

王はリュートを戒めるため、ある契約を定めた。

「よいか？愚かな《息子》に、最後の猶予を与えよう。因縁相手への再戦に挑むのだ。この責務を果たすまで、帰るではないぞ？さもすれば、王位継承権は剥奪する。」

これに待ったをかけたのは、サレンだった。

「継承剥奪は、流石にやり過ぎではありませんか！？」

「苦難から逃亡する輩に、一星を背負えるものか。王の責務は生ぬるくは無い。民や資源を守る為、自らの命を差し出すぐらいの覚悟がないといかん。」

4代目王は彼女の非難を打ち消した。

一途に支える側近を、リュートが右手で遮った。

「もういい、サレン。」

「りゅ、王子…。あなたの精神状態は…？」

「父上に救われた時から、乗り越えるべき試練が待ち受けているのは気づいていた。

その時が来たのだ。

いつまでも泣いてはいられない。」

リュートはゆっくりと立ち上がった。

サレンも同様に彼の後ろに立った。

「…やります。必ず、《ラルク》の首を獲って参ります。」

「そこまではよいが…お前には必要かもしれんな。兵や武装の備えは十分にある。連れて行くがよい。クーランとやらの元は、要塞じみた研究所らしいと、賢者達から聞いたのでな。」

「となれば…！」

「帰郷しているのであれば、あの星の護りは堅いだろう。決意を固めているならば、増強も申し出てもよい。手助けくらいは、してやろう。」

4代目王は、リュートが挑む因縁相手の星の防衛力を見据えていた。

彼も一応、《親》として《息子》の帰りが気かりだった。

「お気遣い、ありがとうございます。…ですが、やはり私は、己の力を試したいのです。

最低限の援助さえ頂ければ、私はいつでも旅立てます。」

「リュート…。」

サレンは敬称を忘れるほど、リュートに対して哀しげな瞳で見つめていた。

王子の側近として、彼女も心配だった。

4代目王は両目を瞑った。

「ならば致し方あるまい。だが、契約を反故にするではないぞ？ 継承のみならず、『フレアランス』の姓を名乗る行為も許さぬぞ。」

「…承知、致しました。」

リュートは王に対して、深々と頭を下げた。

サレンも後に続いた。

ニコンの王子は数日後、宇宙へ旅立った。

★★★

〔ラストコア〕臨時支部との連携は、秘密裏でスムーズに行われた。

アメリカ東部、大西洋の海底内に潜むこの基地は、愛嬌湾内の本部と全く同じ規模の施設となっていた。

宇宙船〔トールメイス・サウ〕の降下に伴った、金星圏メイスの〔エクステラ隊〕の襲撃時に、当内部はひっ迫していた。

それは襲撃による被害拡大への懸念だけではなかった。

アレックスは敵の宇宙船の確認、マルロが【パスティーク】で未衣子と一緒に乗り込んだ時には、臨時支部との回線を開いていた。

彼と白井兄妹、マルロの会話の一部始終を、臨時支部側の在中スタッフはちゃんと聞いていた。

〔エクステラ隊〕降参時、隊員達を収容し運んだ輸送機は、臨時支部からの派遣であった。

臨時支部の輸送機の操縦士達も生粋の地球人であり、HR集団である〔エクステラ達〕の捕捉に不安が募っていた。

アレックスの依頼により実際に遂行すれば、驚くほど素直に従ってくれた。

事前に実施された、HRのマルロに説得されたのが効いたのだろう。

〔トールメイス・サウ〕3隻のみを一時的に浮遊させ、全員を臨時支部へ送った。

〔エクステラ隊〕の受け入れには反対の声で溢れかえった。

統制制御室で襲撃の様子を目撃したジェームズでさえ、アレックスに不満を述べた。

「なんで装置を爆発させなかった！」

とまで技術局長は事務局長に言われる始末だった。

これに対し、アレックスは、

「あれはマル口に一任し、万が一の際に武力で解決する約束で交わしている。HR同士で交渉するのが、より共感を持たせやすいとな。」と冷静に返した。他には、『[天海山ユートピア] 等愛嬌市内の被害の縮小』や、『戦力の強化』も掲げられていた。

流石にここまで意図を述べられてしまえば、ジェームズは黙るようになった。

[ラストコア] 内ではスタッフ達も含め、受け入れには納得の方針で向かっていった。

外部からはひっきりなしに苦情が来るが。

宗太郎とジェームズとアレックスの3人がかりで、どうにか騒ぎを鎮静化させた。

不服そうな表情で回線を切った他国の外交官もいたが…一応は決着をつけさせた。

宗太郎が、

「全責任は[ラストコア] に押し付けてください。」

と言申すと、外部の人間達は渋々引き下がった。

場の鎮静化にはうまくいった。

しかし、今はなんとか収まったとしても…今後は上手に切り抜けるとは思えない。

それをアレックスは、自分の研究室内のベッドルームで考えていた。

新しい[天海山ユートピア] への突然の襲撃。マル口の力説作戦。

後始末におけるクレーム等で、彼は疲れていた。

アレックスはベッドに仰向けで横になった。

右腕で両目を覆い隠して。

周りに観葉植物が配置されており、本来は癒しの空間の場所として機能している。

だが今の彼には、癒しを感じるのも、安らぎを感じるのもできなかった。

最悪の事態ばかり、クヨクヨ考える回数が増えたと思った。

やはり以前の【ラストコア】内で唯一のHRだった武人が連れて行かれた事が影響しているのだろう。

連れて行かれた？誰に？

アレックスも武人が地球にいた最後の日の映像は拝見させてもらっていた。

濃い紫色のHR 1体と戦闘中に、魔法のような罠に【ブラッドガンナー】は引っ掛かった。

その時から、敵のHRの数が少し増えていた。

どれも、左手に【バスターユ・フラワー】が手にするロッドの類いの武器を所持していた。

機体の色は、光沢のある白っぽい色でほぼ統一されていた。

明るめの銀色の光も放っていたかもしれない。

見せられた映像そのものは、数分しかなかった。

詳細を隈なく調べたくても、資料が少なすぎたのだ。

今ならば、いや、アレックスは映像から気づいていた。

マルロ・ヒーストンは太平洋上に降りてきた時、大量の『同志達』と一緒にあった。

『同志達』のロボ形態の格好と、武人を連れ出した数体のHRと、酷似していた。

それに加え、宗太郎がディム・カミング元中將から頂いたHRのリストを参照し…。

白井3兄妹にはマルロを『武人を連れ去った敵』と断言していた。

よって、武人を慕っていた未衣子の暴走が始まった。

マルロの大部隊の兵士達を落としていけと、アレックスは指示を出したのに。総司令官の宗太郎が宇宙船【天海号】で直々に浮上しなければ、今頃どうなっていたのか…。

地球産ロボでは頑丈が売りとされる【パスティユ】も、あの戦で沈んでいたかもしれない。

生物形態では小学生から中学生くらいの男の子としか判断できないマルロ。段々懐柔しつつも、安心はできない。

ジェームズには「なぜ無理矢理止めなかった！」と散々言われたアレックス。

合言葉で首元の黒い装置を爆発させる事も可能だった。

未衣子が近くにいて、うまく切り出せなかったのも事実だ。

しかし、アレックスは別の推測も立てていた。

「黒川武人は敵の手に落ちた。」という説。

マルロの力説の内容からそれが垣間見えていた。

アレックスの推測が、確信に変わりつつある。

その事までじっくり考えてしまい、彼は眠りにつけなかった。

少し休憩したいが為に、局の部下達に簡単な仕事を回してベッドにありつけたのに。

「ふう…。」彼は息を吐いた。

吐息を出したところで、何の解決もしなかった。

「ダメだ…。情報がごちゃ混ぜになっている。整理せんとな。」

口先だけは責任を抱えていると告げたアレックス。

そそくさにベッドに辿り着いた彼に、思考整理すら取れなかった。

居心地悪そうに寝転がっていると、部屋内に通信が入った。

ゴタゴタがあった後に連絡。

回していた仕事内容にトラブルでも起きたのか？

重い腰を上げる前に、アレックスは横になった姿勢のまま、ベッドの脇の壁面モニターを確認した。

相手側からの通信の場合は、余計な操作は必要なかった。

ただ、姿勢を仰向けから横向きに変えるだけでいい。

だらんとした姿でアレックスは壁面モニターを確認した。

映っていたのは、技術局の研究者やスタッフではなかった。

他の「ラストコア」のスタッフでもなかった。

いかにも「ラストコア」の基地内において、細かい操作を教わっていない人物が立っていた。

彼は当人物を既に知っている。

天王星圏スイルのHRで、「宇宙犯罪者」の1人であるマルロ・ヒーストン。

アレックスが今、悶々としていた男だ。

画面の男はよそ行きのスーツ姿から普段着の患者服の上に白っぽい袴を羽織った格好をしていた。

左右に開いて脱ぐタイプの服を着ている為、首元の黒い装置には何の影響はない。

「ラストコア」内で今でも捕虜扱いの男が、通信回線に登場した。

ムスッとした表情は変わらない。

何の用事が気になるアレックスはとうとう、頭部だけでも枕元から離れた。

「…よく回線を繋げたもんだ。いや、お前なら理解が早いかな。」

『苦戦したぞ。近辺の奴らから聞いて実行したまでだ。』

他のスタッフに聞いてまで回線を開く…。

わざわざそこまでするには、よっぽどの理由があるのだろう。

アレックスは体を起こし、ベッドの上で男座りをした。

身体だけでも寝起きなので、動作はゆっくりであった。

欠伸まではなかったが、だるそうに頭をボリボリ掻いていた。

「用件は何だ？なるべく手短にしろよ？」

『どうしても時間を要する。…聞きたい事があるんだ。』

ほお、とアレックスは声を漏らした。

「俺はくつろいでいるが、話ぐらいなら聞き流してやるよ。」

『…シークレットな内容を含んでいる。漏洩の可能性が低い場所がいいんだが。』

アレックスはポカンと口を開けた。

数秒後、ベッドの上で立ち上がって、そこから降りていった。

「俺の研究室でいいな？部屋を簡単に綺麗にしておくよ。」

そう言い放ったアレックスは、ベッドルーム内にかけられた白衣をハンガーごと手に取った。

ハンガーを外し、白衣を着用した。

『場所を指定してくれて助かるよ。』

白衣着用後、アレックスは壁面モニターに映る男を再度見た。

彼はマルコの発言から、意外性を発見したのである。

「驚いたな。お前の口から、感謝の言葉が出るとは。」

『感謝？お礼の定型文なんぞ言っていないぞ？』

「気づいてないなら、それでいいさ。」

アレックスはベッドルームを出る準備を終えた。

最後に、壁面モニターの通信回線を切断しようとしていた。

彼はモニター前に近づき、カメラ目線でマル口に聞いた。

「道順はわかるか？」

『道順？』

「今はどこにいる？」

『連行されて…今は別の研究室だ。近辺の奴らに聞く。』

マル口の後ろに、『近辺の奴ら』らしき人物が映り出した。

〔ラストコア〕の技術局の研究者で、アレックスも知っている人物だった。

『3Aの研究室だ。』

「エレベーターが近いな。降りて1階まで来るんだ。それ以降は、俺が案内してやる。」

『これはどうも、ご親切に。』

「やはり、この短期間で変わったよ、お前。」『…。』

マル口は無言だった。

心境の変化を指摘されたのは、アレックスとクーランぐらいなのだ。

マル口にとって、ほんの1、2ヵ月前は敵視していた地球人。

彼らに褒められたと感じて、少年の姿のHRの頬は真っ赤に染められていた。

「なんだ。俺より長く生きているのに…相当ウブな奴だな。」

『揶揄うな！研究者共はそうやって…。』

「はいはい。回線切るぞ。俺も時間が惜しいのでな。」

『おい！話を遮るな！』

ビッ、とモニターのパネルをタッチした。

画面は一面、真っ黒になっていた。

「文句は後で聞いてやるよ。」

アレックスはそう言うと、ベッドの上から退いた。

ベッド下に隠してあるシューズに履き替え、白衣着用の為のスリッパをベッド下に戻した。

各種、ルーム内の電気系統の電源が落とされてないか確認した。

一通り行くと、彼はよし、と呟いた。

自動ドアに手をかけて、ベッドルームを後にした。

★★★

1 階部分のアレックスの研究室に案内されたマル口は、不服そうな表情をしていた。

多分、応接室奥のキッチンにてお茶を淹れている男に、通信を切られた事に対する不満だろう。

アレックスは察しがついていたので、マル口の怒り顔をなんとも思わなかった。

2 人分のお茶が運ばれてくる。

アレックスが丸いトレーにお茶が汲まれたコップを乗せていた。

「酒じゃなくてお茶だが、飲むといいさ。」

「ノンアルコールで十分だ。酔いが入ると思考が働かなくなる。」

「そうさ。酒は休息時に嗜むのさ。常習化している奴らの気がしれないよ。」

アレックスはテーブルの上にコップを置いた。

自分とマル口それぞれにコップを置いた後に、ソファに座った。

マル口とは向かい合わせになって。

アレックスはなるべく早く終わらせたいのか、とっとと本題に入った。

「で、俺に会いに行くまでして、聞きたい事は何なんだ？」

彼は目の前のHRに尋ねた。

内容を知らないと先に進めないから。

彼の発言の一部が気に障ったのか、マル口は本題より先につっこんだ。

「会いに行きたいとは言っていないぞ。」

「深刻な問題を抱えているんだろう？ いいじゃないか。そのお茶も飲めよ。」

なかなか切り出さないかと思ったアレックスは、テーブルに置いた自分のコップを手にしていた。

急須で淹れた緑茶を飲む作法を真似て、お茶を一口飲んだ。

ついにマル口がわざわざ研究室までやって来た目的を述べた。

「《メス》のガキについてだ。」

「未衣子か？」

マル口はよろしくない表現で誰かを指していた。

アレックスは深く考えなくても、誰の事を指しているのかわかっていた。

マル口はこくりと頷く。

本題の内容はまだ不十分であり、彼は話を続けた。

「アイツ、同じオス…《ラルク》の過去や現在の夢しか見れないと宣ったな？」

「黒川の？」

「お前達が奴をそう呼ぶなら、それで構わん。」

マル口も未衣子を別称で指したので、《ラルク》の別名を気にしなくなった。

「未衣子の不思議な夢が気掛かりで、ここにやって来たと。」

「お前がそう解釈するなら、好きにすればいい。」

「もしや…同情したか？ 彼女に。」

「なっ！？」

マル口はアレックスの発言に対し、顔を赤く染めた。

真っ先に、意味のない否定の言葉を言い放った。

「違う！俺はそんな…！」

「個人の些細な感情なんか、誰しもが持っているから気にするな。…お前は未衣子が見続けている《夢》への謎が知りたいんだろう？」

「あれは深刻な被害ではないのか？他者に共感できず、拳句の果てには性を弄ばれるまでに至ってしまった。アイツが堂々と生きているのが不思議なんだ。」

マル口の発言にアレックスはポカンと口を開けた。

その静止時間は極端に短く、まだお茶の残っていたコップを置いた。

彼は右脚を左脚の上にクロスするように足を組んだ。

「これについては…俺達としても未だ信憑性がなくてだな…。彼女達に公表するのは難しいんだ。」

「信憑性？」

マル口はアレックスの言葉に反応した。

彼はまだコップに手をつけていない。

「生物と機械の間に産まれたお前なら、理解できるか？」

「何をだ？」

「血のつながりについて、な。」

「！？」

マル口は驚愕の声をあげていた。

彼はちょっとした言葉から、情報を推測していた。

「もしや、アイツの《夢》は…宇宙の世界に蔓延る能力の一種とでも…？」

「黒川の銃、お前の放つ立方体の光の弾…原始地球以外の他星人には特殊能力を持つ者が溢れている。子がHRだと尚更だ。ロボ達は簡単に生物共をねじ伏せる。…未衣子の母親も、まさに被害者の1人だろう。」

「母親？」

マルロがそう言うと、アレックスは自分の足元に添えてあったスーツケースをテーブルの上に移動した。

横置きのスーツケースを開くと、中には紺色のノートパソコンがピッタリと収まっていた。

彼はパソコンの電源を入れ、パスワードを入力した。

デスクトップから1つのフォルダを開く。

多数の画像の一覧がアイコン表示で出力された。

突然見せられた画像群について、マルロは尋ねた。

「何なんだ、コレは。」

「俺達の拠点の真上の地上に位置していた、旧〔天海山ユートピア〕の被害状況を示した写真群だよ。」

「初代の…！」

「開園日当日でボロボロになったからな。」

アレックスはキーボード手前のパットで指をなぞっていた。

フォルダ内の画像から、1枚をピックアップした。

ピックアップされた画像は、表示サイズを拡大された。

画像に写るのは…他の来場者と同じように逃げている母娘の姿だった。

配置的に右上だが、母親が娘を抱いているのは確認できた。

旧〔天海山ユートピア〕に襲撃事件が起きた事は、マルロは目の前の研究者から聞かされた。

だから、逃げまわる来場者達の心情も読めた。

やっぱり目についたのは、母娘であった。

正しくは、ピンク色の髪の子供に目が行った。

少しずらずだけで、赤髪の母親にも気がついた。

「ガキの方、見覚えがありそうだが…。」

「彼女が10年前の未衣子なんだ。」

「アイツの…？」

「幼児の頃だから、本来ならばこの頃の記憶は薄いだろうがな…。」

恐怖やトラウマは、記憶に残りやすいが。」

アレックスは一旦、瞳を閉じた。

瞬間だけ間を取って、目蓋が開かれた。

「植え付けられた人間でも、フラッシュバックする機会は頻繁にない。似たような状況下にでも陥らなければ、人は自然に生きられるんだ。」

「思い起こす原因をシャットアウトすれば、対処はできるな。」

「ところが、未衣子は旧〔ユートピア〕をよく知っているようだ。《夢》が起因して。」

アレックスは逃げまわる母娘の画像を残して、別のフォルダを開いた。

画像はデスクトップ上のフォルダの表示が少ない右下にずらされた。

別のフォルダ内には、多数の文書ファイルが保存されていた。

こちらもまた、1件のファイルを開く。

ファイル内の文書データが開示された。

文書データは数種類の戸籍データだった。

最上部には『愛嬌市』の地名。

右上には女性の顔写真が添えられていた。

先程の逃げまわる母娘の、母親の容姿に似ていた。

「これが未衣子の産みの母親だ。名前は『白井マリコ』。夫の『白井大希』とはあまり年齢は変わらないそうだ。」

「…そうだ？」

マル口はアレックスが最後に使った『推定』の語尾が気になった。

アレックスは説明を再開した。

「実は…彼女の戸籍データなんだが。スクロールしていくと、謎が見えてくるんだよ。マウスが無いから、キーボードの操作で申し訳ないが。」

トントン、と指定のキーを押していく。

操作を数回繰り返すだけで、文書データのページが捲られた。

マルロの目に焼き付いた、所々の空欄状態の項目。

中には真っ新な文書のページまで出現した。

「これは…情報が少なすぎると、解釈すべきなのか…？」

マルロは文書データの全体を通して、1つの疑問にぶつかった。

「その解釈で十分だ。実際に、彼女のデータはかなりの量で欠けている。記載上の内容も、ほとんどが夫の情報から拝借している状況だからな。」

アレックスは別の文書データを開く。

次の顔写真は、日本の男性だった。

名前は『白井大希』と表記されていた。

データを横一列に並べた。

「共通点が、多いぞ…！」

マルロが驚いた。

彼は2件の戸籍データの類似点を、即座に洗い出していたのだ。

「その通りだ。ここまで未衣子の母親の経歴が謎めいているのには、理由があっただな…。」

アレックスはまた、指を動かした。

同じフォルダ内から、別の文書データを表示させた。

2人の戸籍データよりも、膨大な量になっていた。

「極秘資料の類だ。黒川がいなくなってしまうってから、ゴタゴタ続きでな…。」

お前を引き入れてから、ゆっくり目を通したのさ。」

こちらの文書データも、アレックスはキー操作でページを進ませた。

あるページ番号で、指を止めた。

「『白井大希』は高校卒業後、家業である愛嬌市今成区内の宿泊施設を営んでいた。その売上では足りなかったらしく、彼は掛け持ちのバイトもしていた。バイクの帰り、通過する公園の中でたまたま見つけたんだ。赤髪の女性、『マリコ』を。」

「…ファミリーネームはどうした？」

「日本では名字だが…まあ同じか。そうだ。彼女は『マリコ』と名乗ったが、それだけしか発していない。名字が不明なのだから、家族の詳細も明らかにされないのだ。」

「得体の知れない《メス》を、連れ込んだのか。」

「得体の知れない…それで終わりにすれば、良かったのかもな…。」

アレックスはまだ隠された事実が残っていると言いたげだった。

マルロが見逃す筈がなかった。

「謎は謎のままにすればよかった、と？」

「今となっては無意味だがな…。俺は興味が湧いたんだ。髪の色も目の色も紅く染められた女性に。黒川に頼まれなかったら、ここまで追求しなかっただろう。」

アレックスがそう言い終わってすぐ、またもやパソコンの操作に移っていた。

現在開いているデータを一旦縮小して下げ、3度目のフォルダの展開を始めた。

今度は、文書データと画像データが入り混じった中身となっていた。

アルファベット順に並べられているが、乱雑な状態にも見て取れた。

「こちらのフォルダ内も、外部の者が閲覧するのは、お前が初めてになる。」

「また、秘密の資料か。今度は何だ？」

「宇宙の衛星データの画像と、それに纏わる考察の記録だな。」

「…偵察機は、飛ばせるのか…！」

「過去に《宇宙進出》も経験しているからな。初期のスタッフ達は。」

元々から「ラストコア」の躍進的な活動に目を見張っていたマル口だったが、それでもまだまだ驚きを隠せなかった。

「別に「ラストコア」でなくとも、宇宙に探知機を飛ばす機構は、地球上には存在している。宇宙そのものに、興味や関心のある者も増加してきているからな。不思議ではないよ。」

「そうか…。」

「で、本題に戻るが…。マル口、宇宙を飛び回った経験をお持ちならば、この画像群に映る星はわかるんじゃないかな？」

アレックスは今開かれているフォルダ内の画像データのみを拡大し、手動によるスライドショーを開始した。

黒っぽい星、時々赤橙の星の画像がちらついた。

たまに白っぽい建物群も…マル口の目で確認できた。

彼はもう、星の一部分だけで名前の特定ができていた。

見せられた画像群の星、特に黒っぽい星に至っては…彼は何度も訪れていた。

「…火星圏タレスに、「レッド研究所」…！もう1つの明るめの星は…同じ火星圏の、セレスか！」

「ご名答。」

アレックスはマル口の回答の合致を認めた。

「火星圏にはタレスとセレスの、2つの星が主流となっているのも、知っているな？」

「ああ。どちらも容姿が特徴的だとも言われている。」

アレックスは画像群の左上に別の画像を小さめに表示させた。

2名の人らしき者の顔写真だ。

「黒川…《ラルク》の母星であるタレスの民は、黒髪と赤眼の、人間型の種族。もう1つのセレスの民は…赤髪と金眼が特徴の、人間型の種族。先に出した『白井マリコ』の戸籍データを出そう。」

左上の小さな画像をさらに左にずらし、赤髪の者だけを表示した。

代わりに、戸籍データを拡大した。

赤髪の者の顔写真と、『白井マリコ』の顔写真。

比較用のサンプルに《メス》が選ばれたのも、今ならば納得できる。

アレックスはこの2つを、マルロに見比べようとしていた。

「癖毛の広がりとは違うが…種族による特徴は完全に一致している…！」

マルロはずっと、写真の2人を目で追った。

「決定的とされる証拠も見せよう。衛星データには星の内部を観察した情報も、僅かだが紛れ込んでいる。偵察機が偵察機を飛ばすような仕組みでな。火星は地球との距離が近い惑星。故に月の次に目指しやすい星とも名高い。」

サンプル画像と星の画像を閉じて、他の画像データをアレックスは出した。

わずか十数件の画像データ群のみ。

それには赤髪金眼の人々の生活の営みが垣間見れた。

「偶然、いい画像を発掘できたので特別に見せてやるよ。」

アレックスはその中の1件の画像データを拡大表示させた。

研磨された石で築き上げた墓と、上に設置された板状の写真のパネルがあった。

パネルには、2名の《メス》が微笑んで寄り添っていた。

『白井マリコ』やサンプルの赤髪の者と、似ていた。

「墓といえば勿論、故人の名前が石に刻まれているのだが…地球に限らず、これらは共通していたのだな。」

「…読めるのか？貴様。」

「古代の象形文字みたいな記号の羅列を？」

「宇宙の言語を、解読できるのか？」

「黒川にある程度は教わった。奴が共に行動をしていたエトラトル・フェルホーンが、宇宙語学者なのだな。」

「…金星圏フェルホーンの、王女が学者！？」

研究室を訪れてから、マル口は驚きの連続であった。

彼も元々、仲間達と宇宙を飛び回った身である。

宇宙の星々の権力者達の情報ぐらいいは入手していた。

「奴は火星圏の出だろう！？一体、何の巡り合わせが起きて…。」

「…《ラルク》曰く、」

アレックスは武人の名前を、今だけ別の呼び名に変えた。

「12個目の滅ぼす星の対象が、たまたま金星圏フェルホーンだったんだと。」

まあ、視察先で恋にでも落ちたんだろうな、とアレックスは続けて言った。

金星圏の話題は、ここで彼がストップをかけた。

「《ラルク》は王女に出会ったんだが、もう1人、奴は《メス》に遭遇していたんだ。もしかしたら…2人の予定になっていたかもしれない。」

「…まさか、それは。」

アレックスはパソコン上の画面に、1件の画像データのみを拡大表示させた。

他のデータは、小さくした。

「衛星データによる撮影だから、画質は粗いんだがな。象形文字のような表記で助かったよ。おかげで彼女達の名前がわかる。」

アレックスは墓石に刻まれた文字の所で、指をトントン叩いた。

マル口は誘導されるがままに、墓石の文字を読んだ。

「『親愛なる《夢伝（むでん）》の乙女、ラチェリー・ローン、レフェリー・ローン、ここに眠る。』」

認識できる範囲で読み上げたマル口の全身に、衝撃が走った。

「《夢伝》、だと…！」

「ほう。こちらも宇宙の常識とも言えるのか？」

「いいや、そんなに広まってはいるが…聞いた事があるだけだ。《夢伝》の能力は、遺伝するらしいとな。」

「それだけの知識を有するならば、話は早いな。この姉妹らしき2人の内の、左側と…『白井マリコ』を比べてみようか。」

アレックスは再び、戸籍データを取り出した。

「…瓜二つ、じゃないか！」

マル口は声を荒げて、立ち上がってしまった。

アレックスは大袈裟な反応をせず、説明を続けた。

「多少、衛星データの撮影画像はぼやけていて、判別はつきにくい。だが、赤髪で金眼の地球人も、広大な世界でもそうそういないだろう。確定してもおかしくないぞ。」

マル口は重力に任せてズシン、とソファにもたれた。

彼の身体から、脱力の気配を感じた。

「火星圏の者だったのは認めるよ。どちらがラチェリーか、レフェリーか…見分けがつかんだろう？地球人のお前は、見抜く事ができるのか？」

マル口はアレックスに、洞察力を試した。

ここまで高度な思考は働かないだろう、とマル口はたかを抱っていた。

目の前の研究者は、焦りを見せなかった。

全く焦らずに、平然と答えた。

「『白井マリコ』は、レフェリー・ローンだ。」 「何っ!？」

「ラチェリー・ローン、右の女だ。俺はそれが真実と信じている。」

何でもお見通し、なのか？

マルロはアレックスの事を、益々怖くなっていた。

せめて根拠だけでも知りたかった彼は、聞き出す方に行動を移した。

「何故、簡単に判断できる？」

「《ラルク》が相当、宇宙に関する知識を持ってきたからな。そこで奴はポロツと溢したのさ。…他の女の話。」

アレックスはそのまま、《ラルク》に纏わる秘話を続けた。

「王女との運命の出会いを果たす前、奴は《育ての親》クーランから女を当てがわれたと言った。その時に、奴は『姉のラチェリーの方と交わした。』と告げていた。レフェリーは妹らしく、逃したそう。《親》は悔しがったようだが。

《ラルク》はラチェリーとも、親密になれたそう。2人とも、大人達から弄ばされた存在だったからな…気が合ったのかもしれない。だから《ラルク》は、黒川は…ローン姉妹の特殊能力を知る事ができたのだらうな。」

「…同じ夢しか見れないのが、特殊能力に繋がるのか？」

マルロが未衣子の謎への結論を、導き出そうとした。

アレックスは否定をせず、ゆっくりと頷いた。

「墓石の《夢伝》は、『夢の共有』と言えば理解が早いかもしれない。同じ夢…《ラルク》に纏わる過去や現在。ラチェリーが《ラルク》と親しくなれたからこそ、『共有』したんだらうな。」

「どの星々でも、《メス》は《オス》に劣ってしまう。彼女達は己の可能な範囲で、能力を展開した…。ラチェリーからレフェリー、レフェリーから…あのガキへと記憶が受け継がれたのか…。」

「末衣子の夢は偶然的ではない。必然的だったんだ。1人でも、奴の側にいさせる為の、な。」

アレックスのこの発言の後、マル口は急に立ち上がった。

彼の中では…末衣子の謎を、自分なりに理解していた。

「おや？もういいのか？お茶はまだ残ってるぞ？なんならおかわりも…。」

「結構だ。それだけ謎が解ければ、十分スッキリしたよ。その飲料は、貴様が勝手に飲めばいいさ。」

マル口は研究室の出入り口を目指して、歩き始めた。

途中、足を止めて、アレックスに他の用件を聞いた。

「外が騒がしいが…何をしている？」

「引越しさ。同じ海底だけだな。場所がバレたようなもんだし、地上の国は何かしらうるさくてな。ま、俺もその内片付けに入るさ。」

アレックスの答えにマル口はフッ、と声を漏らすと、出入り口までまっすぐ歩いた。

ドアは自動で開かれて、彼は通路の床に靴裏をつけた。

常に袴の上着を離さずに着こなす《オス》は、アレックスの研究室から出ていった。

コップのお茶は、入室時から半分くらいしか減ってなかった。

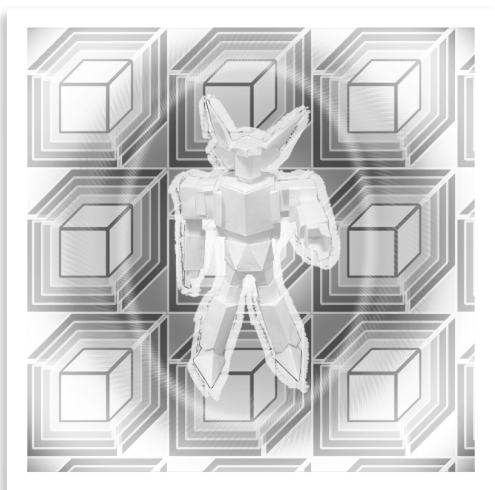
「…秘密を暴いた所で、何をする気なんだ？」

彼女、あの兄妹の《期間満了》はそろそろなんだ。彼女達は家に帰るよ。マル口、お前がそこまで心配しなくてもな。」

アレックスはパソコン上のデータを閉じて、電源を落とした。

ケースにしまった後、2個のコップをトレーに乗せた。

10・切替の日



（時間が経つのが早いなぁ。）

6月末。《期間満了》まであと1日。

今日まで、私達3兄妹は自分達の荷物を整理していた。

理由はその字の通り、《期間満了》で〔ラストコア〕自体から去らないといけないからだ。

たった3ヶ月の間に持ってきた私物を、スーツケースにまとめ上げた。

勉強道具やら、替えの洋服や下着やらがほとんどで、あとは〔ラストコア〕には持ち込んでいなかった。

自宅の部屋ではいつも汚い勇希兄ちゃんさえ、〔ラストコア〕の個室内は綺麗に使っていた。

頻繁に行き来していたのは私ぐらいだし。

兄達は用事がある時しか来ていないんだからなぁ。

〔エクステラ隊〕とかいう、金星圏の人達が愛嬌市（正しくは愛嬌湾上空）へ襲撃があってから、いろんな変更があった。

〔ラストコア〕では、拠点の移動が急遽決まった。

荷物を整理している私達同様、スタッフの皆さんも引越しの対応に追われていた。

本部内は、バタバタとしていた。

移動先はアメリカ東部の海底、とジェームズさんから聞かされていた。

バラさない方がいいのでは？と和希兄ちゃんはジェームズさんに言った。

場所を教えた当の本人曰く、「『普通の人間』に教えても何も問題はないしな。」だった。

《普通》…。

また、退屈な日々を過ごすのかな…。

私は《期間満了》の日程が迫る度に、モヤモヤ感が増していた。

退屈な日々だけど、平和な日常に戻るのはいい事なんだ。

自分達が傷つく事も、誰かが傷つく姿も、2度と目に焼き付けなくてもいいから。

《普通》に学校に行って勉強して、友達と仲良く過ごす。

戦の事なんて、気にしなくていい。

とても喜ばしい事で。

勇希兄ちゃんは空手教室の仲間と切磋琢磨できると言ってたし。

和希兄ちゃんは電子工作や絵画に没頭できると言っている。

兄達は解放されるのを、相当望んでいる。

それは1日乗り越えたら、叶うのに。

私はどうもこの事実を、素直に受け入れられないんだ。

私が家に帰った所で、何も変わらない。

勉強や読書の内容が変わるのと、家事手伝いができる事ぐらいだ。

学校も通うんだけど…正直、私は通い続けたい目的がない。

中学生で義務教育だから。

兄達が側にいてくれるから、通ってるだけ。

勉強なんて、自学自習で基礎と応用はできる。

定期テストの点数は、高得点だった。

このまま順調に進めば、高校の選択肢は増えるだろうと先生も言った。

私が学校で問題視しているのは、《勉強》じゃない。《友達》である。

私は小学校中学年の時に、熾烈ないじめを受けた。

それ以降、私は家族以外の人間が信用できなくなった。

兄達は、

「お前を理解してくれる友達ができるようになる。」

といつも励ましてはくれる。

でも、私は出来ないと思っている。

そもそも、私がほとんど、心を閉ざしているのに。

いつも優しい祖母が、《武人兄ちゃん》の夢の話を告げた途端、ヒステリックに怒り出してしまふ。

私が《同じ夢》しか見れないのをわかっている家族でさえ、この状態なんだ。

元々赤の他人である学校の先生や生徒達が、素直に聞き入れるとは思えない。

〔ラストコア〕の活動を、《武人兄ちゃん》の記憶を忘れて、退屈な日々を過ごしていく。

《期間満了》の4文字は、私を不愉快にさせた。

一時期、一緒に昼食を食べて、チケットまでくれたお姉さんは、

「よかったね。もうすぐ帰れるね。」とにこやかに言った。

他のスタッフさん達も引越し作業に追われながらも、私達の解放を祝福していた。

祝福なんて、わけがわからないわ。

自発的に脱出したいとか考えてないのに。

私達が利用していた個室は綺麗な空室になり、臨時の相部屋で3人で固まっていた。

和希兄ちゃんが私の顔を覗き込んだ。

「どうした未衣子？具合が悪いのか？」

「…何で？私はどこも悪くないわ。」

「そうか？遊びに行ってから、段々不機嫌な顔をするようになってきているみたいだしな…。」

和希兄ちゃん、長兄だから人の顔色を伺う術を持っている。

兄ちゃんも私の悩みをご存知の筈だけど、中身は何かをはっきりと言わない。

はっきり言うのはいつも、次兄であった。

「どうせ帰りたくない、とかじゃねえの？兄貴。」

短い言葉で述べただけでも、内容はよく伝わった。

勇希兄ちゃんはズバツと言っちゃう癖があるので、私とはよく口論になってしまう。

いつもなら、次兄に対してすぐに口で返すんだけど。

その気力が、今はない。

なので、顔を下に向けて、兄達と比べて短い両足をブラブラさせていた。

「…だんまりって、凶星かよ。」

勇希兄ちゃんが言った。

今回ストレートに言われたのは2度目だけど、それでも私は気にしなかった。

ここで和希兄ちゃんのフォローが入った。

「[ラストコア]の活動に1番取り組んでいたのは未衣子だからな…。寂しさも感じているんだろう。それに、未解決問題も、複数抱えている状況で帰るんだし。」

「でも、決まりは決まりだろ？今更変更も出来ねえんだしよ。」

勇希兄ちゃんは無理だと、諦めている。

元から連れてこられた感出していたし、別に気にしていない。

兄達2人が帰ろうと決心しても、私はここに残りたい。

そんな方法があればよかったのに、現実は残酷だった。

たった3ヶ月。武人兄ちゃんと一緒にいた期間は、1ヶ月もなかったかもしれない。

あの時助けてくれた人との思い出は、正直無さすぎて…記憶は薄い。

なのに、私がここまで武人兄ちゃんに固執するのは…まだ私から《夢》が離れないからだ。

《夢》と共にしながら、普通の生活を送る。

他の人と新たな楽しみを共有する事もできない。

ただ、《武人兄ちゃん》の記憶を引きずって生きていだけ。

友達とか面倒くさいと、1人ぼっちになってからずっと感じていたけど。

私の《夢》は、誰とも共感できずに孤独に残り続ける。

共感なんていない。《武人兄ちゃん》が欲しい。

《武人兄ちゃん》が、敵に回ったとマルロは〔エクステラ隊〕に告げていた。

《武人兄ちゃん》の敵である筈の彼は、私達〔ラストコア〕を《同志》と宣言した。

なんで？ どうして？

あの人は〔ラストコア〕の特別隊員なんだよ？

私達地球人の為に、共に戦ってくれる仲間なんだよ？

…いい事、考えた。

相部屋に最初からあった椅子から、私は立ち上がった。

急な行動なので、兄達は当然驚いた。

「未衣子？」

「え、どこ行くんだよ？」

私が変わった事を起こすんじゃないかな、と彼らは勘づいてるかもしれない。

だから、私はこう伝えた。

「ちょっと、気分転換だよ。」

★★★

兄達に『気分転換』と言って部屋を出た私は、〔ラストコア〕の基地内を歩き回る事にした。

何がどうあれ、決定事項は覆せないのだから。

特定の関係者以外の立ち入りを断っている場所を除いて、ほぼ全ての所を回っていた。

途中で呼びかけられても、時間がないですと言って、すぐに去った。

ただの散歩なのに急いでるの？と疑うかもしれないけど。

《期間満了》が迫っていなければ、ここまで焦らなかったと、私は思う。

正直、たった3ヶ月でも、どこかに空き時間を割く事ができたのに。まして、外宇宙からのHRの襲撃も、マル口が来てからはその気配を感じなくなった。

時間なんて、作ろうと思えばできたのに。

私も平和すぎて怠けていたなあ、とひどく後悔した。

でも、時間は巻き戻せない。

後悔は頭の片隅において、私は歩き回れる場所全てを訪れようとした。

スタッフの皆さんは、引越しの準備で慌ただしく動いている人もちらほら確認した。

呼び止めてくれた人はまだ、落ち着いていた方である。

チケットをくれたお姉さんは、キャリーバッグを持った他所行きスタイルで歩いていた。

私はお姉さんだと気づいていたが、向こうから声をかけてきた。

話をすると、お姉さんはもうすぐ、この基地を出発しなくてはならないそう。

行き先はアメリカ東部の海底にある、[ラストコア]臨時支部。

今在中の基地は日本に属しているから、離れ離れになっちゃうね、とお姉さんは言った。

私と接している時は終始微笑んでいたけど、どこか寂しそうに見えた。

罪の償いの後からずっと居続けた此処が、名残惜しいんだろうなあ。

お姉さんについては、過度に心配はしていない。

〔ラストコア〕には昔、武人兄ちゃんやジェームズさん達がうまい事、『犯罪者』の烙印を押された人達を受け入れていた。

彼女は彼女で、仲間と共に困難を乗り越えていけるだろう。

お姉さんとはすぐに別れて、私は再び歩き出した。

色んな施設を歩き回ると、多少の運動にはなる。

地上の愛嬌市は7月に変わろうとしていて、本格的な夏に突入する。

施設内に冷房が完備されていても、喉の渇きは他の季節よりも感じやすかった。

たまたま通路内の壁際に設置された自販機を発見した。

私はそこで小さいお茶を購入した。

お茶を手にした後、私は通路の曲がり角まで歩いた。

自販機付近からでも、海底で泳いでいる魚達の景色を拝めたけど。

ベンチで休憩して座りたい気分だったので、私はそれを探すのに専念した。

探す手間は省けた。

曲がり角、所謂突き当たりの所で通路の幅が拡張されていた。

窓際寄りの位置にあったベンチ。ひとまず私はそこに座った。

以前も、ここにやって来たなあ。

その時はジュースを飲んでいた。ストロー付きで。

勉強道具も持参していて、景色を眺める以外に色々やっていたなあ。

他にも、ここには誰かがやってきて…。

『誰か』？

ここに来た人物は、まだ忘れてはいない。

マルロ・ヒーストン。

H Rのロボ形態ではなく、私と同じくらいの少年の姿をした生物形態で登場していた。

あの時、彼とは初対面で。

名前を知るまでは同世代の子供がいたと、内心喜んでた。

大丈夫だよ、と優しく接するよう心がけた。

名前を告げられてから、彼に接する態度が一変してしまった。

怒りの衝動が抑えきれず、つい『あなたのせい』と決めつけてしまった。

実際に、武人兄ちゃんが連れて行かれた時に現れたロボは、【チタン・キュレン】

と似たような白っぽいHRと特定されてたし。

証拠の映像は後に観たけど。

マル口と初対面だったこの場所。

『あなたのせい』と私は彼に責めたのに、逆に罵られてしまった。

「ラルク（武人兄ちゃん）の方が《極悪人》だ」と言ったから。

それからは、彼は笑って去っていった。

笑い声が頭に残った私は、その夜に瞳を閉じてても、眠りにつけなかった。

不穏な空気のまま過ごすのかなあ、と悩み混んでしまって、《夢》の中になかなかダイブしなかった。

それは、杞憂に終わったんだ。

翌朝の朝食までに、アレックスさんがマル口を大分懲らしめたみたいだった。

以来、《期間満了》までの間、マル口と私達兄妹で共に行動するようになった。

反抗的な癖は抜けていないけど、物の言い方は柔らかくなっていった。

アレックスさん曰く、マル口はHRの中でも知的な生命体で、行動のあり方を考えるのも容易いらしい。

他にも、マル口は技術局長の立場の人間に弱みを握られている、という事実もある。

《満了》1週間前まで何もなかったんだ。

1週間前、私の気分は妙な不快感に追われるようになった。

その名の通り、マル口の《同志宣言》。

彼と〔エクステラ隊〕、私達までもが…『ラルクに敵対する同志達』と声高らかに言ったんだ。

【パスティーユ】のcockピットを降りてから、私も兄達も、《同志宣言》の張本人に会っていない。

私としては、実際に彼に会って、真意を確かめたいのに。

マル口本人が全然、私達の元へ現れない。

相当、後ろめたいのかな？

後から冷静に振り返ってみて、私達の意図に背いてしまったと、合わせる顔がないと思ってるのかな？

正直、今の彼が何を考えているのか、早く確かめたい。

私の気持ちとしては会いたい思いでいっぱいなのに、彼に中々会えない。広大な〔ラストコア〕の基地内を歩き回ってみても、彼の姿を発見できなかった。

マル口の格好は常に七五三で見かける袴のような上着を着用しているから、小柄でもよく目立つのに。

…もう、引越したのかな？

マル口は〔宇宙犯罪者〕としても恐れられる、強いHRの1人。

今の武人兄ちゃんが不在の〔ラストコア〕には欠かせない逸材なんだ。多分、

〔エクステラ隊〕と〔ラストコア〕の架け橋役でも担っているんだろうな。

そう考えると、私の表情は自然に曇っていった。

何も解消できない、私の悩み。

ベンチでリラックスしているのに、悩みが大きすぎて、安心して休めなかった。

ぐるぐると答えのない思考に陥っている時に、足音を聞いた。

足音の主の歩き方は普通のようなだった。

靴と床が擦り合う音のテンポが、一定の間隔で刻まれていたから。

私は咄嗟に、顔を上げた。

それは誰かを確かめる為の、後ろを振り向く動作に繋がった。

立ち上がるまでには至らなかった。

突き当たりの位置で、足音を立てる主に遭遇した。

黒い不気味な首の装置と、銀色の袴みたいな上着。

白髪少年と間違える程、童顔すぎる男性。

マルロが、とうとう私の前にやってきた。

「…こんな所で、何をしている？」

マルロは私に気づいた。

ベンチに座っていると頭部しか突き当たりからでは見えないけど、彼には私だとわかったみたいだ。

マルロがベンチと並ぶ位置まで歩いてきたので、私は立ち上がらなかった。

訪れた彼の顔を見ているから、会話はできる。

「見てわかるでしょ？くつろいでいるだけよ。」

「兄貴達はどうした？」

「兄ちゃん達は普通にあそこで喋っているよ。私が外の空気を吸いに行きたかっただけ。単独でのんびりできるのは、この日限りだって思ってるから。」

私がそう言った後、マルロが若干驚いた声を漏らした。

彼の息遣いは、私の耳に届いていた。

「…お前、勝手に決めつけているのか？」

「決めつけている？決定事項なのよ。そもそも、西条司令から『3ヶ月』の契約で結ばれていたのよ。私が努力を怠ったから、明日で終了なの。」

私は正直に告げていた。

この発言は、何も間違っていない。

偽りは何1つも言っていない、のに。

マル口はフッ、と鼻で笑った。

高笑いはせずに、私に言い返してきた。

「随分と素直に従うんだな。あれ程《極悪人》を連れ戻したいなどと意気込んでいた癖に。所詮、ガキはガキだ。単独では何も立ち向かえない。」

見下しているような言い方を彼はした。

私は急にベンチから降りた。

マル口と面と向かい合い、今度は声のトーンを大きめにして言い返した。

彼の発言が、癪に触ったから。

「あなたこそ、いつまでも《武人兄ちゃん》の敵じゃない！何なのよ、[ユー
トピア]の時のあの発言！まるで命乞いと同じだわ！」

ほとんど怒りを込めていた。

「命乞い？俺が怯えているとでも言いたいようだな。」

「そうじゃない！あなた1人と、[エクステラ隊]の軍団。数だけ見ても勝てっこないなんてわかってたんでしょ！」

「あれは作戦の1つだ。奴らに恐怖なんぞ、微塵も感じていない。」

「作戦にも程ってものがあるじゃない！」

「いい加減にしろ！」

マル口がキレた。

他の発言の時よりも、声の大きさが感じられた。

私は肩を1度だけ揺らして、口を閉じてしまった。

彼の怒りっぷりに、突然敏感になった。

「とんだワガママな《メス》だな、お前は。嘘も時には有利になる場合がある。直情的だと、痛い目に合うぞ。」

マルロの言動は、まだ続いた。

「雑魚みたいなHRの集団でも、使い途はいくらでもある。戦力補強に困ってるんじゃないのか？この基地は。」

「…結構、調べきっているのね。」

「こういうのは、俺の得意分野だからな。」

マルロは肝心な部分をスラッと言ったけど、表情は変えなかった。

どうも今の状況では、マルロに軍配が上がっているように事が進んでいた。

ムスツとしているけど、彼はいつもこんな顔をしている。

腕を組んでいるくらいだし、彼には多少の余裕があった。

現在の私は、焦っている。

《武人兄ちゃん》を倒すべき敵だと、認識したくないと思い込んで。

苦肉の策でも、何か言い返さなきゃ。

自分の精神が保たない。

解決策に至らないと知っていても、私はだまっではいらなかった。

「…仲間を増やすのは、大目に見るわ。でも、やっぱり私は、認めたくないよ！

《武人兄ちゃん》を敵だなんて！私はずっと、兄ちゃんを助けたかったのに！」

「それは不可能だ。」

「何でなの！？あなたは兄ちゃんと、《ラルク》と戦闘した経験があるから断言できるとも言うの！？」

私は悲鳴に近い声で素早く言い切った。

直前で…マルロが私に立ち塞がるように、歩いて来たんだ。

視線の高さはないのに…冷たく見下ろされた気がした。

顔は固定したまま、彼は口を開いた。

「貴様の言う通り、俺は、俺達の部隊は《ラルク》と交戦経験はないさ。HRは禁忌の子供だとしても、広大な宇宙には数多の戦闘員がいたからな。」

「じゃあ…。」

「交戦経験がない、としか言ってないぞ。俺は。遭遇の話は、また別だぞ？」
…そうだった。会うのと戦うのは、全く別の話なんだ。

今まで【バステュー】で応戦していたから、それで慣れてしまった。

だから、遭遇と戦闘は切り離して考えないと…。

でも、マル口はいつ、どこで会ったのか。

私の見る《夢》にも出現しない、全然知らない過去の中に埋もれているのかな？

「今、昔の記憶から掘り起こそうとでも思ったか？」

顔の近い彼に、図星を言い当てられた。

私は苦い表情をしてしまった。

こんなの私が負け犬扱いみたいじゃない、と自覚した。

マル口は昔ではない、と否定の言葉を口にした。

一体何がどうなのか、理由を彼は述べていった。

「つい最近会ったぞ。最後に顔を見たのは、【レッド研究所】だった。」

「【レッド研究所】…？」

「ラルクの《育ての親》であるクーラン・レッド直々の怪しい研究所だよ。HRの改造や、不気味な発明品を開発が主な施設だ。…司令室の等身大カプセルで、奴は眠らされていた。」

眠らされていた…？という事は、武人兄ちゃんはマル口が目撃した時点では、モルモットにされているの…？

「ほう、まだ序の口なのだが、飲み込みは早いようだな。貴様の動揺する姿は、見ていて飽きないぞ。」

「……趣味悪いわよ、あなた。」

「クーランにも別の意味で言われたさ。」

自覚はあるんだ。

余計にタチが悪いよ。

私はほんのちょっとだけ、めまいを起こした気分になってはいた。

まだガン見で見下ろす童顔の男性から入手したい情報は残っていたので、頑張って耐えた。

「変人扱いより、静かで関心の薄い《オス》として見ていた。クーランのが、よっぽど変人だ。」

変人って、この少年っぽい30代男性よりも…？

世の中、いや宇宙は広い世界なのね。

ちょっぴり感心しているうちに、マル口は自身の持っている情報を追加した。

「簡潔に言えば、『頭がおかしい奴』だ。研究者とHRの主従関係なのに、実の《息子》のように《ラルク》を寵愛するんだ。」

「可愛がっているって、そんな感じ？」

「その愛情表現が、歪なんだ。奴は《ラルク》を史上最強のHRに仕立て上げるべく、改造と服従を強要させていた。11の星を滅ぼした記録は残されている。…エトラトル・フェルホーンと鉢合わせになれたのは、《ラルク》には救いだったろうな。」

…《夢》で見たあの女性は、そんな長い名前だったんだ。

武人兄ちゃんが1番、笑みを交わしあった相手だった女性。

だけど、その女性は、もう…。

「彼女の最後は、能力発現とともに散った。彼女の生命と引き換えに、《ラルク》は生き返った。それから10年、奴はのうのうと過ごした。」

「10年後に、私達兄妹と武人兄ちゃん…他にはあなたと出会った。」

「俺なんて、完全にオマケだよ。こき使われるのは慣れているからいいのだから。」

とマル口は述べたけど、ちょっとため息が混じっていたのは気のせいだろうか？

アレックスさんに相当、弄られてるね、彼は。

ため息混じりで話していた時は、瞳を閉じていたのに。

目蓋はすぐに開かれた。

これからマル口が口にするのは、非常に重要な内容だろう。

私はまっすぐに、彼の話を待っていた。

怖い真実が告げられるだろうから、逃げた方がいいと頭で理解していても。

もう、後がないんだし。

「クーランの、狂気じみた研究者に捕らえられた《ラルク》は、もう逃れる術はない。あの《親》はあの手この手で《ラルク》を従わせる。…毒を盛る事さえ厭わない奴なんだ。」

「毒を…盛る…！？」

元から衝撃の連続だったけど、マル口の今の説明は、私を少し狼狽えさせるには十分だった。

私が驚きで体が震えそうになっても、マル口は話を続けた。

「クーラン本人を謀って、奴の息の音を止めれば…直接的な支配は免れる。間接的な、所謂後遺症は残るだろうな。盛られた毒の進行が、早くなるとか。」

「そんな…。武人兄ちゃんは、救っても長く生きられないとでも…？」

「[ラストコア]の活動が、奴に火をつけさせたのか…。奴は口ボ形態への変身を強制させられた状態だった。幾度の細胞分裂と細胞破壊。それは、HRの身体を酷使する。クーランも愚痴を溢したくらいだからな。」

武人兄ちゃん…。今まで無理して戦っていたんだ。

内心は、辛そうだったんだ。

だったら尚更、武人兄ちゃんを救い出さないと…！

でも、マル口の口ぶりからすると、兄ちゃんは一言で言えば『洗脳』されているそうで…。

どうすれば、一体どうすれば良いのかな…？

「今、新たに不埒な思考でもしていたか？」

マル口が低い声で、私を現実呼び戻した。

侮辱的な言葉も含めた発言。

見過ごせなかったけど、今この時は黙っておいた。

「貴様の幼稚な能力では、『ラルク』の奪還は不可能だ。たとえ、期間を設けて技術を磨いたとしても、な。」

醜い表現があっても、私は言い返せなかった。

悔しいけど、実力不足なのは変わらないんだ。

交戦経験も少なく、地球人だから特殊能力なんて持ち合わせていない。

未熟なままでは、命が幾つあっても足りない。

まだまだ、知識と技術を習得する必要があるんだ。

マル口の厳しい評価は真っ当なんだ。

このまま、【バスティーユ・フラワー】で飛び出すのは、非常に危険すぎる。

武人兄ちゃんを助けられないのは明白なのに、私の心は悔いだらけだ。

何の手段も講じずに、兄ちゃんの朽ち果てる姿を見守るだけ…。

もしかしたら、彼の最後を垣間見る機会も失う。

私はマル口に言われるがまま、徐々に頭を下げていった。

堂々と頭を上げて反論なんてできなかった。

ところが、マル口は説教じみた発言で締め括らなかった。

彼は、私の右に移動した。

耳に届くように、告げた。

「終わりを握らせたくないなら、貴様がトドメを刺せ。狂う程に挑んで、奴を倒せ。でないと、くたばらないぞ。」

マルロは歩いていった。

振り返ったのは、彼が消えてからだった。

★★★

マルロと再会して、話までしたのに。

心の蟬りは消えなかった。

私は、不機嫌な表情を出したまま、臨時の相部屋に戻ってきた。

時計を見ると、『18:00』を過ぎていた。

【ラストコア】にいられる時間は、あと半日くらいしかない。

寝泊まりしてから帰宅する計画だった。

『18:00』となれば、兄達は食堂で最後の定食でもご馳走になっているんだろう。

不機嫌で、暗い面持ちで、相部屋に帰っていった。

時間は刻々と迫っているのに、足取りが重い。

時の流れからは、逃げられない。

だけど、何事もなく、このまま【ラストコア】を去りたくはない。

何の別れの言葉も交わせずに、武人兄ちゃんに『さよなら』したくない。

フラフラした気持ちで、相部屋に戻ってきた。

兄達はご飯食べに行ってるし、戻って来るまではベッドで休もう。

そんな考えて自動ドアを開いた。

私は、パッと顔を上げた。

相部屋に、2人分の両足を発見したから。

靴裏を床につけている2人の正体は、私が【ラストコア】に訪れる以前からご存知の家族だ。

和希兄ちゃんと勇希兄ちゃん。

食堂で夕食を摂っている筈の2人が、イスに座ったままで話し合っていた。

私に気付いたのは、勇希兄ちゃんだった。

「未衣子！」

下の兄の煩さは、全然変わっていない。

勇希兄ちゃんの声は抑揚をつけて話すから、はっきりと耳に届く。

和希兄ちゃんもドアを開けた私を見た。

「もう、散歩はいいのか？」

「うん。」

上の兄の言葉に私は頷いた。

「どこまで歩き回ったんだよ、お前。」

勇希兄ちゃんは予想通り、ズケズケと場所を聞いてきた。

…ああ、そうか。今、ここが正念場なんだ。

私が【ラストコア】に残って、武人兄ちゃんに『会いに行く』のを継続させる為の…最後の手段。

手段と呼ぶには甘すぎる、短絡的だと言われるかもしれない。

でも、この手段…兄達に本音を告げないと、何も動けない人間になってしまう。

私は兄達に、どこ行ってきたかの場所は言わない。

その代わり、願望じみた本音を、打ち明けた。

「兄ちゃん達、あのね。やっぱり私、[ラストコア]にもう少し、残りたいんだ。」

私が戻ってきた時、2人の兄達は笑いながら話し合っていた。

彼らの笑顔が、スッと消えた。

勇希兄ちゃんがまじまじと、私の顔を見つめてきた。

近づけてきた表情は、若干しかめっ面の姿をしていた。

「お前、何言ってんだよ？」

「じゃあ、もう一度言うね。私はまだ[ラストコア]に残りたい、って思ってるの。」

私は自分の本音を繰り返して告げた。

勇希兄ちゃんが立ち上がった。

彼は私の前まで歩き、至近距離まで顔を近づけた。

ほとんど怒りに満ちた、睨みつけている表情だった。

「お前さあ、明日帰るって言ってなのに、今更文句垂れてんじゃねえよ。」

「これが私の正直な思いよ。」

「なんでもかんでも贅沢言ってんじゃねえよ！しれっと言いやがって！」

勇希兄ちゃんの怒り方はわかりやすい。

すぐに剥き出しになって、声を荒げてしまう。

このままだと手も出しかねないのだけど…流石に妹の私は一度も殴られた事はない。

彼は空手を習っているので、他の人を殴る行為は絶対してないけど。

なので兄ちゃんの吠える様に、私は怯んでいなかった。

和希兄ちゃんも遅れて立ち上がった。

上の兄は下の兄の隣に並んでいた。

「いいかい末衣子。これは決定事項なんだ。今更撤回はできない。大人しく帰ろう？」

和希兄ちゃんはいつものように、優しく諭してくれる。

彼の話し方ならば、大抵の人は納得して、それで事が済むのだろう。

でも、私は素直に頷けなかった。

言葉だけ告げるのみで。

「それはわかってるわ。」

「いやわかってねえよ！お前はすぐに態度出るんだよ！気に入らない事あったらずっとふてくさるじゃねえか！」

勇希兄ちゃんにズバッと見抜かれた。

長年兄妹でいてるんだし、当然の結果である。

「大体よお、お前が残りたい理由って武人兄ちゃん絡みしかないだろ！今は行方不明だけどよ、戻ってきたら時々会えばいいだけじゃねえの！？」

「武人兄ちゃんは、もう戻らないわ。」

「勝手に決めつけてんじゃねえよ！マル口の野郎が言っても、俺は信じてるぜ！末衣子が望んでんだからよ！」

勇希兄ちゃん…。

私に同調しているだけだろうに、今の今まで武人兄ちゃんの帰りを信じているんだ。諦めきれない心を持っている。

兄妹の中でスポーツに向いている理由が、今ならわかるよ。

でも、私ははっきりとマル口に告げられたんだ。

武人兄ちゃんが捕まった後の行方を。

クーラン？という研究者の側にいたらしい証言もしているのだから、これに嘘が入る余地は少ない。

マル口は知的なHRだ。

「エクステラ隊」への説得でも、それを発揮していた。

武人兄ちゃんやクーランの動向も、偽りはないだろう。

この基地から離れていったら、二度と兄ちゃんに会えない。

「兄ちゃん達も信じていたのは、意外だったね。」

「はあ！？普通だろ？お前が信じているのに信じないわけねえだろ！？」

「フフ…。ありがとう。でも、それとこれとは別よ。武人兄ちゃんは帰らない。これは事実よ。」

「…それなのにお前は、残りたいのかよ？」

下の兄の疑問に、私は頷いた。

「私は武人兄ちゃんを救いに行く為には残らない。彼に『会いに行く為』に残りたいの。」

「はあ！？意味不明だろ！？ただ単に『会いに行く』だけに何の価値もねえだろ！」

「それでも！私はたとえ1度きりでも、武人兄ちゃんの顔が見たいのよ！今何しているのか、確かめたいのよ！」

たった1つしか変わらない下の兄と私の口論は、ヒートアップしていった。

もう中学生になって、自分の意志を確立していく頃合いだ。

でもまだ中学生で、意志決定には大人の介入が必要だ。

このままだと口だけでは終わらず、両者共に手を出しかねない。

私達の喧嘩の終わりは不透明だった。

時間を無駄にするだけの言い争いは、第3者の割り込みでストップした。

「2人とも、ここは落ち着くんだ。今からアレックスさんと相談する。技術局長のあの人に掛け合ってもらおう。何か解決するかもしれないから。」

和希兄ちゃんが相部屋内のパネルを素早い手つきで操作し始めた。

臨時の報告や連絡の為の、テレビの画面サイズのモニターがある。

パネルはリモコンより2、3センチ幅をとった小さなサイズだった。

和希兄ちゃんはアレックスさんと呼び出す。

モニターに真っ先に現れたのは、[ラストコア]の技術局のスタッフさんだ。

研究者らしく、白衣を纏っていた。

技術局のスタッフさんは、少々お待ちくださいと伝えてから、画面を切り替えた。

《Now waiting…》という、ゲームの読み込み中の簡素な画像が表示された。

取り次ぎに時間を要しているようで。

和希兄ちゃんはモニターを見続けながら、私に対して約束を交わした。

「いいかい末衣子。これからアレックスさんをお願いしてみるけど…ダメだって言ったら諦めるんだよ？」

言い方は優しく諭しているようで、厳しく接しているようにも聞き取れた。

和希兄ちゃんも、笑顔が消えていた。

1枚絵の画像は取っ払われて、指名された本人の正面像が現れた。

いつものワイシャツに白衣を羽織ったアレックスさんだった。

なのに、どこか疲れきっているように見えるのは、表情に歪みが生じているからだろうか？

「アレックスさん。引越し作業の真っ最中に申し訳ございません。」

『ああ、気にするな。まあ、最後だし恋しくなったんだろう？』

恋しい…？

技術開発に熱心なアレックスさんのジョークかな？

あまり色恋沙汰な話を、技術局長は苦手としているらしいから。

『らしい』というのは、彼との会話でも、彼の研究室でも…恋愛を匂わせる存在がないからである。

集中するのに、敢えて雑念が入らないように工夫しているのかな？

…今はアレックスさんのピンクな情報を気にしている場合ではない。

あと数時間で日付が変わる。

日付が変わってから半日後には、[ラストコア]を出発しなくてはならない。

それを止めるのに、現在アレックスさんと相談するのだ。

社交辞令ばかりで時間を潰してはいけない。

「…あの…、その『最後』の言葉なんですが、ちょっと考えさせてもらえませんかね？」

『何があったんだ？』

「未衣子が、どうしても折れなくて…。」

和希兄ちゃんの対応は、少しオドオドしているように見えた。

若すぎるとは言っても、アレックスさんはれっきとした成人男性である。

目上の人に話すのは、誰だって緊張する。

特に、自分自身が掲げる頼み事をするのならば、余計にだ。

上の兄の代わりに私自身が対応していたら、内心は同じようにドキドキしていたかもしれない。

今は和希兄ちゃんに感謝したい。

この場を設けてしまう程、私はワガママを押し通してしまった。

《期間満了》の件を先送りしてしまった事と同時に、後悔してしまった。

ああ、頭脳明晰で冷静沈着なアレックスさんも、今回は本気で怒るだろうなあ、と懸念していた。

よくない期待は、裏切られた。

アレックスさんはモニター越しの私達に向かって言った。

その内容が、衝撃的だった。

『…未衣子は、諦めきれないだろうなとは、薄々気づいていたさ。黒川の行方を1番、気にしていたからな。』

アレックスさんは私の気持ちを知っていた。

怒るところか、むしろ妙に納得している雰囲気だった。

『マル口が俺の研究室にやって来たんだ。未衣子の《夢》について聞き込みに、な。』

「え？」

「なんでアイツが聞きに行ったんだよ！」

『俺が物知りじゃないかとも思ったのか、あるいは…[ユートピア]で未衣子と話し合ったから、かもな。』

「…まさか、未衣子が昔の話をしたから…？」

『HRでも、繊細な心を持ってるんだなあと感心したさ。黒川も同じだったか。』

なるほど…。私は頭の中で合点がいった。

マル口とばったり会った時、最後にこう言い放ったんだ。

『終わりを握らせたくないなら、貴様がトドメを刺せ。狂う程に挑んで、奴を倒せ。でないと、くたばらないぞ。』

マル口は、私達兄妹が戦場に行かず、平和に暮らせればいいと考えていた。

私が昔の話を打ち明ける前でも、『地球の学校のシステムは素晴らしい』と堂々と宣っていた。

そんな彼が、どうしてあんな捨て台詞を吐いたのか、理解できなかった。台詞を吐いた後に、当の本人は去ったのだから。

あの時、マル口はアレックスさんと色々話をしていたんだね。

2人の間の会話で、マル口は何らかの異変に気付いたんだ。

『一通り、[ユートピア]での様子を監視してもらったが、未衣子、君は相当ないじめを受けていたようだ。最初の診断では、『夢』の事について軽く述べた程度だったのに。』

「話しても共感しないかな、と思ったからです。」

『実際、その通りだろう。未衣子の見ている《夢》は、地球上に暮らす人間には、決して覗けない内容だからな。』

え？ どうして？ なんで？

私は疑問の言葉を発せず、驚きで固まってしまった。

それは私が毎晩見る《夢》が特殊だと、アレックスさんは言いたいのだろうか。

『内容、というよりシステムの問題かな？ 冷静になれなくなるだろうが、よく聞いてほしい。未衣子、君は黒川、イコール《ラルクの夢》を見るように仕込まれているんだ。生まれた時から、少しずつね。』

「えっ！？」

私は驚きの反応とともに、無意識に大きな声を出していた。

兄達も同じように、アレックスさんの説明に仰天していた。

「生まれた時からって、どういう事なんだよ！？」

『これは、君達の母親である『白井マリコ』から、未衣子に受け継がれた能力らしい。未衣子は《ラルクの夢》しか見れないよう、縛られているんだ。』

「何故、《ラルク》限定ですか？」

和希兄ちゃんが質問した。

私達の母親からの遺伝と、《ラルク》、武人兄ちゃんとか結びつきがあるのか、疑問に思ったんだろう。

『君達の母親と《ラルク》…黒川はな、実は接点があったんだ。』

やっぱり、結びつきはあったんだ。

でも何で、どういった経緯で繋がっているのかなぁ？

『白井マリコ』の子供達である私達の抱く疑問を、アレックスさんは徐々に解消していった。

『彼女は地球人じゃない。《レフェリー・ローン》という、火星圏セレスの《メス》だ。』

「何、だって…？」

「ちょっと待ってください！それは機密情報ではないんですか？」

兄達は狼狽していた。

いつも騒がしい勇希兄ちゃんとはまかく、普段は温厚な和希兄ちゃんさえ、この慌て様であった。

アレックスさんは両掌を見せて、私達に落ち着く様に促した。

『確かに未衣子、いやお前達兄妹に火星人の血が流れているのは事実だ。だが『白井マリコ』は素性を隠して生きていた。現在まで《地球人》として、お前達は生きてきた。だから、堂々と胸を張って《地球人》と宣言したらいい。能力を引き継いだのは未衣子だけだ。』

「その未衣子が証明できねえだろうが！頭いいのにわからねえのかよ！」

『彼女の《夢》は日常生活を送る上での支障はない！』

勇希兄ちゃんの訴えを、アレックスさんはピシャリと退けた。

『人間関係のギクシャクはあるだろうが、未衣子は《夢》以外ならば普通に生活を送れている。障害者と認定されるほどの病気もない。……未衣子、ちょっと前に来てくれないか？』

アレックスさんが私を呼んだ。

私は黙って、兄達よりも前に出た。

『君のこれからが聞きたい。まだ教え切れていない部分はあるが、君の《夢》は偶然ではなく、必然だった、という事だ。だから、周りの人間と違うからって、悲観的になるな。』

「悲観的になっていませんよ。あまり深く考えない様に切り替えますから。」

そうか、とアレックスさんは呟いた。

『こちら【ラストコア】としては、黒川がいない以上…人手が欲しい状況だ。マルロが健在といっても、奴をどこまで信用すればいいか、不透明なんだ。あと3ヶ月の猶予を与えるよう話を進めるが…どうする？』

ああ、本当に今日は、衝撃の連続だ。

特にアレックスさんの今の話には、私が知るだけで3回も驚いた。

マルロが相談していた事。私達の母親の素性。

今、アレックスさん本人が、続投を勧めてきている事。

ショックのあまり、私の口数は少なかった。

単に兄達が代わりに話に応じているから、余計少なくなっているだろうけど。

『無理に、とは言わないさ。誰だって、命は惜しいからな。このまま帰る事を選択すれば、今までの平穏な生活に戻れるが…。』

「是非、続投させてもらえませんか？」

私は自然と継続の意志を口にしていた。

これに、2人の心配性な兄達が、黙っていなかった。

怒号の嵐がやってきた。

「馬鹿かよお前！もういいだろうが！いい加減帰ろうって！」

「嫌よ。」

「嫌よじゃねえよ！婆ちゃん達が心配すんだろ！腹を括れよ！」

「じゃあ、私1人残るから、兄ちゃん達は帰っていいよ。」

「とんだワガママ女だな！お前！」

いつも以上に過熱した勇希兄ちゃんとの口喧嘩は止まらない。

和希兄ちゃんも静観できなかった。

「諦めよう未衣子。人生、楽しい事はいっぱいあるんだ。武人兄ちゃん以上にいい人だって現れる。《夢》の話も、理解してくれる人だって…。」

「お婆ちゃんが理解してないじゃない。もういいわ。」

私は兄達から、顔を背けた。そのまま、黙り込んだ。

勇希兄ちゃんはずっと、私に向かって怒鳴っていた。

話をしても無駄なので、スルーしていた。

反対に和希兄ちゃんは観念して、私じゃなくてアレックスさんと話すように切り替えていった。

「…わかりました。未衣子はここに残りますが、俺達は帰ります。」

「兄貴！なんでだよ！」

「覚悟を決めているんだ、未衣子は。これ以上、無理強いはいくれない。」

和希兄ちゃんはこのように言って、勇希兄ちゃんを抑えた。

これで、私だけ居残りが確定した。

と思ったんだけど、アレックスさんには物足りなかったらしい。

彼は悪い博士のように、ニヤニヤと笑い出した。

不気味な笑い方に、私以外の2人の地球人の背筋が凍った。

『未衣子だけでも来るなら大歓迎だ。しかし、【パスティユ】は3人乗りだ。ジェームズの呼んだ志願兵達を乗せてもいいが…彼女の頑固さについていけるかな？』

兄達はハッ、と声をあげて、互いを見合わせていた。

『未衣子は悲惨ないじめに遭った経験がある。今度は学生のいじめと違って、命を落とすかもしれないぞ？妹を手放してのうのうと生きていられるのか？一生、深い傷を背負うかもしれないぞ？』

アレックスさんの饒舌さに、兄達だけでなく私も度肝を抜かれた。

人って、ここまで落し込めるのかと。

私と違って、帰る気満々だった2人の兄達。

チラッと横目で見ると、2人とも落ち込んだ感じになっていた。

顔を下に向けていた。

落胆したけど、開き直ったのか。

勇希兄ちゃんが握り拳を作って声を張り上げた。

「畜生！こうなったら運命共同体だろ！気が変わったぜ！俺も残る！」

「勇希兄ちゃん…？」

「勘違いすんなよ！妹を残して呑気に生きていられねえから、悔いを残したくねえからここにいんだよ！」

それ、遠回しに私の事を物凄く心配していると、聞こえるんだけど。

でも、よかった。

下の兄が残ると聞いて、私の心が暖かく感じられた。

残るは、上の兄。

中学生の私と勇希兄ちゃんと違って、和希兄ちゃんは高校生。

多岐にわたる進路が待ち構えている時期を抱えた1学生なんだ。

和希兄ちゃんは頭いいから、リスクを減らす方向性でいくだろう。

でも、実際は…。

「そうですね。弟と妹を捨ててまで、堂々と生きていきたくないですね。」

素直な感想を述べていた。

「同じ期間でしたら、俺も残ります。学業は、自力で追いつけますから。」

『勉学の補講なら、調整しておくぞ?』

「そこは気を遣ってくださるんですね。ありがとうございます。」

和希兄ちゃんはお礼を述べたけど、頭までは下げなかった。

これで、役者は揃った。

私達兄妹の決意表明を聞いたアレックスさんは、早速直近のスケジュールを話した。

『今日はそのまま相部屋に泊まるんだ。明日、朝食を済ませ次第、ここを出発する。臨時支部行きの潜水艇があるから、そこに乗っていけ。手続き関係は、俺から司令に伝達しておこう。いいな?』

はい!と私達はハキハキとした声で返事した。

その後、用事の詰まっていたアレックスさんとの回線が終了した。

兄妹3人だけの相部屋。

どっちにしても、愛嬌湾内の【ラストコア】本部の滞在は、今日で最後だ。

時刻は《19:30》。重大な話題があった割には、回線は短かった。

兄達にどうして気が変わったのかを聞いてもいいけど、今は別の話題を切り出した。

「兄ちゃん達、私が帰ってきた時にここにいたけど、夕食は食べ終わったの?」

「とっくに食べ終わった、けどよ…。」

「あんまり食欲がなくて、少なめだったさ。不思議と、喉が通らなくてね。」

「それじゃあ、食堂には行ってないの?」

「先に行って、軽食しか食べてないな。俺はグラタンで勇希はピザとポテト。」

「時間外だと、スナックしかねえし。」

これは、兄達も心のどこかで引っ掛かっていた、って事？

おそらく、きっと、何もできない自分達かもどかしかったんだ。

【パスティーユ】のパイロットとして、期待されていた日々。

でも、大した活躍なんてできなくて。

兄達も物足りなさをずっと感じていたんだ。

「今はどう？お腹いっぱい？」

「いいや、なんだか腹が減ってきたよ。」

「俺も。怒鳴ったらスッキリして、ご飯が食べたい気分だぜ。」

勇希兄ちゃん、怒り狂うにも程々にね？

あえて言わないけど。

これで、3人で食堂に行ける口実ができた。

「じゃあ、今から食堂でもっと食べようよ？私、まだ食べてないから。」

「そっか、未衣子は帰ってきた所か。」

「うっし！じゃあ今度はたらふく買ってたべるぜ！」

勇希兄ちゃんは気合を入れていた。

和希兄ちゃんはハハっ、と後ろで笑っていた。

そして私は下の兄の行動に呆れつつも、兄達と共に相部屋を出た。

向かうは食堂のみ。

勇希兄ちゃんが思いっきり走って、私が注意して喧嘩して、和希兄ちゃんにはこやかな表情で見守っていた。

元気がないのは私だけだと思ったけど、話し合えば皆、活気がなかったのは同じだった。

私達は、これから歩き出す。

次の3ヶ月間の間に、めざましい活躍を果たすために。

《武人兄ちゃん》に会いに行くために。

まずは目先の腹ごしらえ。

私達の足は、前に進んでいった。

『白井未衣子とロボットの日常《反転》』前巻 おわり

☆『ミコロバ』シリーズ一覧☆

○《共闘》ルート ※表記がない分です。

[1・正夢の日]、[2・復讐の日]、[3・糾弾の日]、
[4・暴挙の日]、[5・酔狂の日]

[6・暴露の日]、[7・告白の日]、[8・業火の日]、
[9・協議の日]、[10・誓約の日]

[11・包囲の日]、[12・潜入の日]、[13・奪還の日]、
[14・忘却の日]、[エピローグ・再出発の日]

公園で出会った《武人兄ちゃん》と一緒に、[宇宙犯罪者]のHRや《武人兄ちゃん》の『育ての親』であるクーランに挑むルートです。

《武人兄ちゃん》の過去や、未衣子の兄である和希・勇希の話も含んでいます。

☆『ミコロボ』シリーズ一覧☆

○《反転》ルート

*前巻

[1・捕囚の日]、[2・更改の日]、[3・降下の日]、
[4・翻弄の日]、[5・遭遇の日]、[6・招待の日]
[7・供述の日]、[8・力説の日]、[9・立証の日]、
[10・切替の日]

*後巻

[11・入城の日]、[12・破滅の日]
[13・集結の日]、[14・解放の日]、[15・譲渡の日]、
[16・対峙の日]、[17・絶縁の日]、[エピローグ・再認識の日]

《武人兄ちゃん》と袂を分つルートになります。

《武人兄ちゃん》の代わりに、《マルロ》が味方になります（言い切った）。
未衣子のトラウマ話も出てきます。『7』だけは人を選びそうな内容なので注意書きがあります。

※先に《共闘》ルートの『1』『2』を読む事をおすすめします。

☆『ミコロバ』シリーズ一覧☆

○短編

『1・調査の日』、『2・奮起の日』、『3・観察の日』、
『4・報告の日』、『5・改名の日』、『6・方言の日』、
『7・説明の日』、『8・救助の日』、『9・同居の日』、
『10・触発の日』

『11・試練の日』、『12・慰留の日』、『13・挑戦の日』、
『14・動悸の日』、『15・天翔の日』、『16・逃走の日』、
『17・伝道の日』、『18・自責の日』、『19・欲望の日』、
『20・成長の日』

8割方、1本で完結するタイプの短編です。

『8』～『9』（白井3兄妹の両親編）、『11』～『15』（華南編）のみ続き物となっております。

大体、本編の補完的な内容になっています。

おくづけ

タイトル 白井未衣子とロボットの日常《反転》前巻

作者 カレーポーク

メアド ton1200tekisuki★[gmail.com](mailto:ton1200tekisuki@gmail.com)

(★→@に変えてください。)

個人サイト『お肉のうまい定食屋』

(URL : <https://plus.fm-p.jp/u/meat5rice>)

note ID→curry_pork

pixiv users→87815976

(pixivのURLの後ろに入れるか、『カレーポーク』
でユーザー検索してください。)

発行日 2024年11月18日

制作先 製本直送.com様